

# 大阪府教育庁文化財調査事務所年報

26

2023年2月

大阪府教育委員会

## はじめに

大阪府教育庁文化財調査事務所は、大阪府における埋蔵文化財発掘調査の拠点として平成9年に開設され、この間、府内における発掘調査やそれに伴う整理作業、報告書作成及び埋蔵文化財を活かした普及啓発・公開活用事業を主な業務として実施しています。

令和3年度においては、60件の調査を実施し、調査面積は約8,546m<sup>2</sup>でした。そのうち発掘調査は9件実施しました。

主なものとして、八尾市久宝寺遺跡では、弥生時代後期～古墳時代の土器が大量に出土しました。また、井戸が発見され、その井戸枠は、古墳時代の準構造船を再利用したものであることが分かりました。

羽曳野市・藤井寺市陵東遺跡では、古墳時代前期の溝、井戸、古墳時代後期の掘立柱建物等が見つかり、さらに古墳時代後期の水田と畦畔が発見されました。

そして藤井寺市津堂遺跡では、古墳時代前期末から中期初頭にかけての総柱構造の掘立柱建物が複数棟連なって発見されました。倉庫の機能を持った建物の可能性が高く、古市古墳群周辺の古墳造営と深く関わる貴重な発見となりました。

一方、普及・啓発・公開事業については、新型コロナウィルス感染症拡大のため、中止や自粛をせざるをえない状況が続きました。そのなか感染対策を行った上で、府内出土の資料を利用した展示会の開催、府立博物館との連携事業など5件の事業を実施しました。文化財普及動画の作成にも取り組みました。

令和3年度の調査成果や普及・啓発・公開事業などといった調査事務所の実施した事業が、教育面や学術面などで皆様の役立つことを願っています。最後にこの場をお借りしまして、事業実施にご協力いただきました関係の皆様にお礼申し上げます。

令和5年3月31日

大阪府教育庁文化財保護課長

稲田 信彦

## 例　　言

1. 本書は大阪府教育庁文化財調査事務所年報の第 26 冊である。
2. 本書には令和 3 年度に大阪府教育庁文化財調査事務所が実施した埋蔵文化財調査報告及び公開活動等の記録を記載している。
3. 埋蔵文化財調査概要報告（本書 8 ~ 15 頁）の表題には以下の内容を示す。  
　遺跡名（令和 3 年度調査番号）  
　（1） 所在地  
　（2） 調査の原因となった事業  
　（3） 調査担当者  
　なお、概要報告表題の調査番号は表 3 令和 3 年度調査箇所一覧の調査番号に一致する。
4. 本書の執筆は各担当が行い、文末に氏名を記した。編集は調査管理グループ河原秋桜が、同グループ中西裕見子、原田昌浩、竹原伸次の監修のもとで行った。
5. 図、表、写真は各項ごとに番号付けしている。

# 目 次

はじめに

例 言

目 次

令和3年度における埋蔵文化財調査の概況	1
令和3年度文化財保護課・文化財調査事務所組織図	4

## 【試掘確認調査の概要報告】

名越遺跡 (21023)	6
豊能町牧地区 (21041)	7

## 【主要発掘調査の概要報告】

久宝寺遺跡 (21008)	8
陵東遺跡 (21009)	9
津堂遺跡 (21017)	10
府中遺跡 (21002・21026)	14
宮園遺跡 (21030)	15

## 【新指定 大阪府指定文化財の紹介】

日本基督教団大阪教会本館	16
金剛寺一切経	20

## 【資料紹介】

大坂城跡発掘調査報告（ドーンセンター第2次発掘調査報告）	23
牛石9号墳の発掘調査	62
令和3年度弥生プラザ展示『水差形土器の世界』展示資料について	70

## 【事業報告】

文化財調査事務所での普及・啓発・公開事業	74
令和3年度収蔵資料	77
令和3年度調査・研究等の検討会	77
令和3年度大阪府教育府文化財保護課刊行物一覧	77
令和3年度資料貸出・掲載・閲覧事業一覧	78
令和4年度文化財保護課・文化財調査事務所組織図	84

奥付



## 令和3年度における埋蔵文化財調査の概況

### 【調査件数と調査面積】

大阪府教育委員会が令和3年度に実施した調査件数は、**発掘調査が9件、試掘調査が5件、確認調査が2件、試掘・確認調査が2件、立会調査が42件の合計60件**であった（表3）。

また、調査面積は、算出が困難な立会調査を除き、**8,546 m<sup>2</sup>**である。前年度と比較して調査面積はやや減少（令和2年度は8,848m<sup>2</sup>）したものの、調査件数は2倍近い件数（令和2年度は33件）となっている。

調査原因別で推移をみると（表1）、道路事業については令和2年度以上に件数、面積とも増加している。このことは、昨年度の傾向と同様、一般府道八尾富田林線（藤井寺工区）に伴う発掘調査の実施によるところが大きい。住宅事業については、ここ数年増加していたが、令和3年度は前年度に比して半減している。これは、大規模な府営堺宮園団地の建て替え事業が一段落してきたことに起因する。学校事業については、前年度に比して調査面積は大きく減少しているものの、調査件数は増加している。これは、とくに立会調査の実施件数が多いことによる。農林事業については、前年度よりも件数、面積が増加している。これは、令和元年度より南河内において府営農村総合整備事業に伴う確認調査や発掘調査が行われていることに加え、令和3年度からは府北西部において同事業に伴う試掘調査が始まることによる。

地域別でみると、泉北地域では面積は半減しているものの、件数は増加している。また、泉南地域では件数、面積とも前年度より増加している。これは、都市計画道路泉州山手線の建設に先立ち、試掘・確認調査を開始したことによる。南河内地域は、他地域と比較して、

令和元年度より件数、面積とも多い地域である。これは、前述の都市計画道路八尾富田林線に伴う調査を令和元年度より開始したことによるところが大きい。今後もしばらく道路計画用地における試掘・確認調査やその結果に基づく発掘調査を実施していくことになるであろう。令和元年、2年と事業がなかった豊能地域で件数や面積が増加している。これは、前述の農林事業である、豊能町牧地区における府営農村総合整備事業計画に伴い、広範囲に試掘調査を実施したためである。

過去10年間における調査件数と面積を概観すると、調査面積は平成24年度当時よりは減少しているものの、平成25年度以降の調査件数は大局的にみれば40件台から60件台の範囲内で推移しており、大幅な減少はみられない。調査面積も、やや減少傾向があるが、平成29年度以降も常に7,000m<sup>2</sup>以上の調査実績であり、大きな変動はみられない。これは近年、泉北地域における府営住宅建替に伴う宮園遺跡の調査や都市計画道路大阪岸和田南海線建設に伴う府中遺跡の調査、南河内地域における都市計画道路八尾富田林線建設に伴う太田遺跡、津堂遺跡、陵東遺跡の調査が継続的に実施されてきたところが大きい。

### 【主な調査成果】

令和3年度の調査成果の概要については6頁以降に主要なものを掲載している。ここではこれらについておもな時代ごとに概観しておく。

#### 弥生～古墳時代

和泉市府中遺跡では、弥生時代末から古墳時代初頭の土坑、落ち込み、壁穴住居2棟などが見つかっており、当該期の集落が広がる様相が認められた。

表1 原因別調査面積・件数一覧（面積：m<sup>2</sup>）

	H24	25	26	27	28	29	30	R1	2	3	
	面積	件数	面積	件数	面積	件数	面積	件数	面積	件数	
住宅	124	9	727	10	1,800	5	108	8	4,616	7	745
農林	1,741	3	1,995	4	959	4	264	2	20	2	224
道路	6,404	25	6,988	22	2,138	8	3,778	17	2,539	11	6,255
下水	16	1	8	1	0	1	118	2	0	2	0
河川	48	1	0	0	0	2	0	2	0	0	0
学校	78	3	760	4	10	2	50	1	0	6	46
その他	2,120	43	4,155	23	4,353	23	597	13	635	22	728
合計	10,531	85	14,633	64	9,442	45	4,915	45	10,510	52	7,998

表2 地域別調査面積・件数一覧（面積：m<sup>2</sup>）

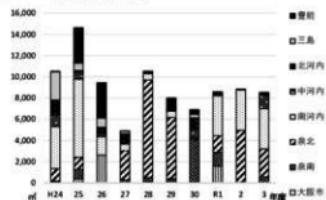
	H24	25	26	27	28	29	30	R1	2	3	
	面積	件数	面積	件数	面積	件数	面積	件数	面積	件数	
大阪市	98	3	414	5	2,621	3	22	31	150	7	173
泉南	81	8	865	4	0	4	240	2	361	4	212
泉北	1,166	6	1,139	5	0	2	2,757	6	9,181	11	5,782
南河内	3,985	14	7,367	11	1,742	9	653	11	619	8	598
中河内	1,091	21	686	18	317	9	141	10	135	9	0
北河内	1,391	9	116	5	559	5	800	3	0	4	94
三島	2,673	22	712	15	867	10	254	5	60	7	91
熊野	46	2	334	1	3,336	3	48	5	4	2	1,048
合計	10,531	85	14,633	64	9,442	45	4,915	45	10,510	52	7,998

八尾市久宝寺遺跡では、弥生時代後期後半から庄内式期の土器が大量に出土しており、当該期の集落が周辺に存在することが想定される。古墳時代中期から後期にかけての遺構面も確認されている。なかでも井戸176の井戸枠は、準構造船の船首あるいは船尾を切断して再利用したものであり、埋土からは土師器、須恵器、製塙土器、韓式系土器等が出土した。近年、中北河内の調査では古墳時代の準構造船材を井戸に転用した事例が増加しており、河内湖周辺の渡来系の様相を端的に示している。

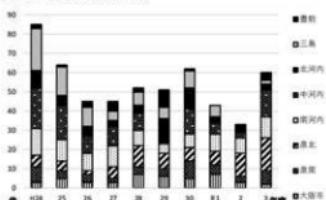
羽曳野市・藤井寺市陵東遺跡の調査は、盾持人、力士、男子などの人物埴輪が出土した古墳時代後期初頭ごろの溝が見つかった調査区の隣接地である。同じ段丘面には古墳時代前期の溝、井戸や古墳時代後期の掘立柱建物、溝や開析谷では古墳時代後期の水田と畦畔が発見された。自然科学分析によても水田耕作が傍証され、古市古墳群造営時期に当遺跡など周辺では水田開発が行われていた様相が判明してきた。

藤井寺市津堂遺跡では、古墳時代前期末から中期初頭遺構にかけての遺構が多数確認された。掘立柱建物7棟、敷地北端を区画する柵(塀)、土坑、井戸などがあり、少なくとも3時期の建て替えが現段階で想定されている。とくに東柱をもつ縦柱構造の掘立柱建物が複数棟連なっており、倉庫の機能をもった建物である可能性が高い。当遺跡の性格はその立地と相まって、古市古墳群で最も早く築造されたと考えられる大型前方後円墳の津堂城山古墳築造と連動して営まれた集落として考えることが可能であり、古市古墳群造営の歴史的背景を探求するうえでも重要である。

グラフ1 地域別調査面積



グラフ2 地域別調査件数



## 古代

和泉市府中遺跡では、これまでの調査と同様、奈良、平安時代の遺構や遺物が散見され、集落は弥生時代から古墳時代、古代にかけて連続と営まれていることがわかる。

堺市宮園遺跡では、8世紀以降の須恵器、土師器、土馬、緑釉陶器、三彩のほか、10世紀ごろの黒色土器が大量に出土した。同時期の建物は今回発見されなかったが、古代において集落が営まれていたことが想定されている。なお、今回の宮園遺跡の調査では、古代の粘土採掘土坑は認められなかった。

## 中世

古代において集落が営まれていた府中遺跡や宮園遺跡では、中世の飼溝、溝、ピット、土坑、中世耕作土などが確認されており、中世以降、水田開発が図られたことがわかる。

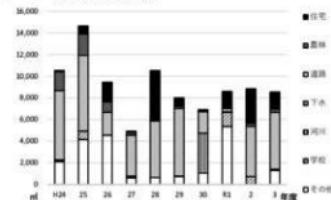
また、試掘・確認調査が行われた貝塚市名越遺跡や豊能町牧地区では、ともに中世の遺構が発見された。

名越遺跡では、これまで大規模な調査事例がなく内容がよくわかっていないが、今回の調査で中世の耕作層や飼溝等が確認され、当該地が中世に開発されていたことが判明した。

豊能町牧地区は、埋蔵文化財包蔵地の有無がこれまで確認されてこなかった地域だが、今回の広範囲に及ぶ試掘調査により、鎌倉時代を中心とした中世の井戸や遺物片が出土し、当地が鎌倉時代にはすでに開発が行われていたことが明らかとなった。

(小浜 成)

グラフ3 原因別調査面積



グラフ4 原因別調査件数

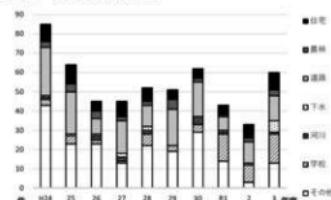


表3 令和3年度調査箇所一覧

調査番号	調査名	所在地	種別	調査開始日	調査終了日	調査面積(m <sup>2</sup> )	担当者	事業課	事業名	
21001	太田道路	藤井寺市津津堂	発掘	令和2年度より継続	令和3年7月21日	1340.0	原田	都市整備部富田林土木事務所	一般道大坂羽曳野線（藤井寺工区）道路改良事業	
21002	府中道路	和泉市府中町	発掘	令和3年1月5日	令和3年7月30日	951.0	木村	都市整備部土木事務所	府中市南北大通岸田由南海陸橋改修事業	
21003	道跡外	堺市北区新今泉町	立会	令和3年4月2日	令和3年7月2日	-	西川	住宅まちづくり部	新今泉町立会	
21004	南花田道路	堺市北区新今泉町	立会	令和3年4月13日	令和3年4月13日	-	三木	住宅まちづくり部	府常陸新金三丁八番地建築工事	
21005	菅田白鳥道路	羽曳野市白鳥	立会	令和3年4月30日	令和3年3月31日	-	新尺	都市整備部富田林土木事務所	国道170号電線共同溝設置工事	
21006	目黒道路 吹田市春場 道路	吹田市目黒町	立会	令和3年5月18日	令和3年5月24日	27.0	山上	西日本旅客鉄道（株）大阪支社事務所	吹田総合事務所近代化改良工事	
21007	山之内道路	岸和田市多治美町	立会	令和3年5月10日	令和3年5月10日	-	三木	住宅まちづくり部	既存中央レバータイプ事業（芦屋岸和田治田宅）	
21008	久宝寺道路	八尾市西久宝寺	発掘	令和3年5月1日	令和3年11月30日	1240.0	西川	都市整備部八尾土木事務所	久宝寺地盤整備事業	
21009	陳東道路	羽曳野市東泉・藤井寺市東美坂	発掘	令和3年5月28日	令和4年1月31日	1117.0	新尺	都市整備部富田林土木事務所	一般道大坂羽曳野線（藤井寺工区）道路改良事業	
21010	道跡外	豊中市新千里東	試掘	令和3年5月31日	令和3年8月25日	6.0	岡田	住宅まちづくり部	豊中市新千里東3丁細高屋住宅（建て替え）新築工事	
21011	大町道路	岸和田市大町	発掘	令和3年6月1日	令和3年6月30日	210.0	三木	住宅まちづくり部	府宮岸和田大町住宅道整備工事	
21012	欠番	-	-	-	-	-	-	-	-	
21013	陶山岸壁跡 (地区)	堺市南区筋谷山	立会	令和3年7月2日	令和3年7月2日	-	大澤	教育施設財務課	府立高校姫路城跡内管改修工事（晴ヶ岳高校）	
21014	麗星道路	松原市三宅東	立会	令和3年7月5日	令和3年8月16日	-	原田	教育施設財務課	府立高校姫路城跡内管改修工事（松原高校）	
21015	七ノ坪道路	泉大津市北垂中町	立会	令和3年7月6日	令和3年8月28日	-	木村	教育施設財務課	府立高校姫路城跡内管改修工事（泉大津高校）	
21016	立部道路	松原市西大隅町	立会	令和3年7月13日	令和3年7月30日	-	木村	教育施設財務課	府立高校姫路城跡内管改修工事（立部高校）	
21017	津浦道路	藤井寺市津津堂	発掘	令和3年8月2日	令和4年度継続	416.0	原田	都市整備部富田林土木事務所	一般道大坂羽曳野線（藤井寺工区）道路改良事業	
21018	陶山岸壁跡 (地区)	大阪府堺市南区原山台	立会	令和3年7月21日	令和3年7月21日	-	岡田	教育施設財務課	府立農高高等支援学校体育館空調設置工事	
21019	道跡外（羽曳野 古墳墳頂接地）	堺市南区東上野芝町	立会	令和3年7月26日	令和3年7月26日	-	原田	教育施設財務課	府立岸坂支援学校ガス管移設工事	
21020	新金三丁道跡	堺市北区新金町	立会	令和3年8月5日	令和3年9月21日	-	岡田	住宅まちづくり部	府営金岡第3住宅第1期工事レバーニング構築工事	
21021	島江道路	豊中市庄内町内町	確認	令和3年8月25日	令和3年8月25日	4.0	岡田	都市整備部富田林土木事務所	都市計画道路三輪岸口街路整備事業	
21022	宮園道路	堺市中区宮園町	立会	令和3年7月21日	令和3年7月21日	-	大澤	住宅まちづくり部	府営坪庭園第3期住宅（建て替え）中幡別立住宅整備工事	
21023	名越遺跡他	貝塚市渋谷地内	試掘・ 確認	令和3年8月16日	令和3年9月22日	240.0	地村	都市整備部岸和田土木事務所	都市計画道路坪庭園手縛（名越工区）道路改良事業	
21024	道跡外（太久保 道跡接地）	熊取町太久保	試掘	令和3年9月27日	令和3年10月14日	66.0	地村	都市整備部岸和田土木事務所	主要地方道大坂と泉奈庄南線改修工事	
21025	美園道路	八尾市美園町	立会	令和3年8月17日	令和3年8月17日	-	岡田	大阪府立水道局農園支事務所	地下埋設物調査工事（東部水道事務所管内）	
21026	府中道路	和泉市黒島町	発掘	令和3年9月1日	令和3年12月14日	300.0	木村	都市整備部農土木事務所	都市計画道路大阪岸田由南海陸橋改修事業	
21027	道跡外（宮野 道跡接地）	門真市上町	試掘	令和3年9月15日	令和3年9月24日	32.0	木村	都市整備部枚方土木事務所	都市計画道路福原川東側道路拡幅事業	
21028	大竹西道路 東高野街道	八尾市大竹西	立会	令和3年9月3日	令和3年9月3日	-	岡田	都市整備部東部地下道事務所	枚岡河内南幹線（二）(第4工区)下水管整備工事	
21029	水越道路	八尾市脇町	立会	令和3年9月6日	令和3年9月9日	-	木村	大阪府立水道企業団東部水道事務所	管路井蓋整備工事（4箇、南部朝峰、八尾市）	
21030	宮園道路	堺市中区宮園町	発掘	令和3年10月1日	令和4年3月8日	1347.0	大澤	住宅まちづくり部 住宅整備室	府営坪庭園第3期住宅（建て替え）新築工事	
21031	太井道路	堺市美原区北部	立会	令和3年9月13日 令和3年11月15日 令和4年1月20日	令和3年11月16日 令和3年1月19日	-	大澤	西川	教育施設財務課	府立農芸高等学校水舎新築その他工事
21032	道跡外 (藤井寺道路 施設地)	茨木市西福井	立会	令和3年9月21日	令和3年9月21日	-	岡田	教育施設財務課	府立茨木支援学校管理棟1棟便所改修工事	
21033	陵東道路	羽曳野市鳥島・藤井寺市東美坂	確認	令和3年3月21日	令和3年9月21日	6.0	新尺	都市整備部富田林土木事務所	一般道大坂羽曳野線（藤井寺工区）道路改良事業	
21034	宮園道路	堺市中区宮園町	立会	令和3年10月8日	令和3年10月15日	-	岡田	住宅まちづくり部	府営八田庭園立地敷地内排水管整備工事	
21035	東郷通跡	八尾市立荘内町	立会	令和3年10月18日	令和3年10月18日	-	地村	都市整備部八尾土木事務所	大阪府立水道企業団東部水道事務所	
21036	瓜生堂道路	東大阪市若江西新町	立会	令和3年10月19日	令和3年10月19日	-	岡田	大阪府立水道企業団東部水道事務所	地下埋設物調査工事（東部水道事務所管内）	
21037	日暮廻寺道路	東大阪市若江南新町	立会	令和3年10月19日	令和3年10月19日	-	岡田	大阪府立水道企業団東部水道事務所	地下埋設物調査工事（東部水道事務所管内）	
21038	八尾寺内町	八尾市本町	立会	令和3年11月25日	令和3年12月13日	-	岡田	都市整備部八尾土木事務所	主要地方道大坂八尾線電線共同溝計画委託計画	

調査番号	道路名	所在地	種別	調査開始日	調査終了日	調査面積	担当者	事業課	事業名
21039	成法寺道跡	八尾市光庭町	立会	令和3年11月25日	令和3年12月13日	-	岡田	都市整備部八尾土木事務所	主要地方道大阪港八尾線電線共同溝設計計画検討課題
21040	西野々古墳群	富田林市伏見堂	試掘・確認	令和3年11月1日	令和3年12月27日	128.0	西川	南河内農と緑総合事務所	府立農村地区整備事業「伏見堂地区」
21041	豊能町牧地区	豊能町牧	試掘	令和3年11月1日	令和3年11月30日	200.0	地村	北部農と緑の総合事務所	府立農村地区整備事業「牧地区」
21042	久宝寺道路	八尾市西久宝寺	立会	令和3年11月24日	令和4年1月14日	-	岡田	都市整備部八尾土木事務所	久宝寺盆地地区工区電線設備工事
21043	中之島鹿屋敷跡	大阪市中央区中之島	試掘	令和3年11月18日	令和3年11月18日	9.0	岡田 大阪市	府立中之島図書館	大阪市立中之島図書館施設改修工事その他の工事
21044	加治・神前・晶中通跡	貝塚市晶中	立会	令和4年1月10日	令和4年1月10日	-	岡田	教育庁施設財務課	府立貝塚高校体育館空調設備工事
21045	太井通跡	堺市美原区北余部	立会	令和3年12月8日	令和3年12月8日	-	新尺	教育庁施設財務課	府立農芸高等学校水害干渉新築その他の工事
21046	南巴家跡群	堺市中区上之	立会	令和3年12月16日	令和3年12月16日	-	地村	泉州農と緑の総合事務所	陶陶溪跡群若狭山地区 南巴家改修（3）工事
21047	久宝寺道路	八尾市西久宝寺	立会	令和3年12月22日	令和3年12月23日	-	木村	八尾土木事務所 都市みどり課	久宝寺盆地地区工区工事 雨水貯留池整備工事
21048	茨田安田通跡	大阪市鶴見区安田	立会	令和3年12月23日	令和3年12月23日	20.0	西川	教育庁施設財務課	府立茨田高校体育館空調設備工事
21049	金岡通跡	堺市北区金岡町	立会	令和4年1月6日	令和4年1月7日	30.0	西川	教育庁施設財務課	府立金岡高校体育館空調設備工事
21050	津津浦跡	藤井寺市御所町	立会	令和4年1月29日	令和4年1月29日	25.0	西川	教育庁施設財務課	府立藤井寺高校体育館空調設備工事
21051	桙井御所跡	島本町桙井谷	立会	令和4年1月22日	令和4年1月22日	25.0	西川	教育庁施設財務課	府立島本高校体育館空調設備工事
21052	太井通跡	堺市美原区北余部	立会	令和4年1月11日	令和4年1月11日	-	新尺	教育庁施設財務課	府立農芸高等学校水害干渉新築その他の工事
21053	道跡外 （荒治山山麓 隣接地）	枚方市島尾家原町	立会	令和4年1月18日	令和4年1月18日	-	新尺	都市整備部 枚方土木事務所	一般行政長尾八幡線道路整備工事
21054	道跡外 （剪谷台道跡 隣接地）	羽曳野市飛鳥地内	立会	令和4年2月3日	令和4年2月10日	-	新尺 木村	都市整備部 富田林土木事務所	一般河川飛鳥川改修工事（八丁堀上流 RG）
21055	由山通跡	阪南市轟作地内	立会	令和4年2月14日	令和4年2月14日	-	岡田	大阪広域水道企業団 南部水道事業部	送水管布設工事（阪南岬送水管・ 指南市ほか）2工区
21056	日根通跡	吹田市目坂町	立会	令和4年3月8日	令和4年3月8日	10.0	山上	西日本旅客鉄道（株） 大阪支社事務所	吹田駅周辺車両近代化改良工事
21057	東郷通跡	八尾市日向内町	立会	令和4年3月7日	令和4年3月7日	6.0	西川	住宅建築局一般施設課	中河内府民センタービル改修工事
21058	高畠通跡	東大阪市高田田町	立会	令和4年3月9日	令和4年3月9日	-	岡田	都市整備部 八尾土木事務所	一般国道306号電線共同溝整備工事
21059	六口南寺	岸和田市加守町	立会	令和4年3月11日	令和4年3月11日	20.0	西川	海岸和田土木事務所建設課	一般府道南寺南線歩道整備工事
21060	東郷通跡	八尾市日向内町	立会	令和4年3月23日	令和4年3月28日	13.0	西川	住宅建築局一般施設課	中河内府民センタービル改修工事
21061	東東通跡	羽曳野市泉島	発掘	令和4年3月16日	継続事業	75.0	新尺	都市整備部 富田林土木事務所 松原建設事務所	一般府道大羽羽狩野（藤井寺工区）道路改修事業

### 【文化財保護課】

課長 保存管理グループ

文化財企画グループ

調査管理グループ  
グループ長 主査  
中西裕見子

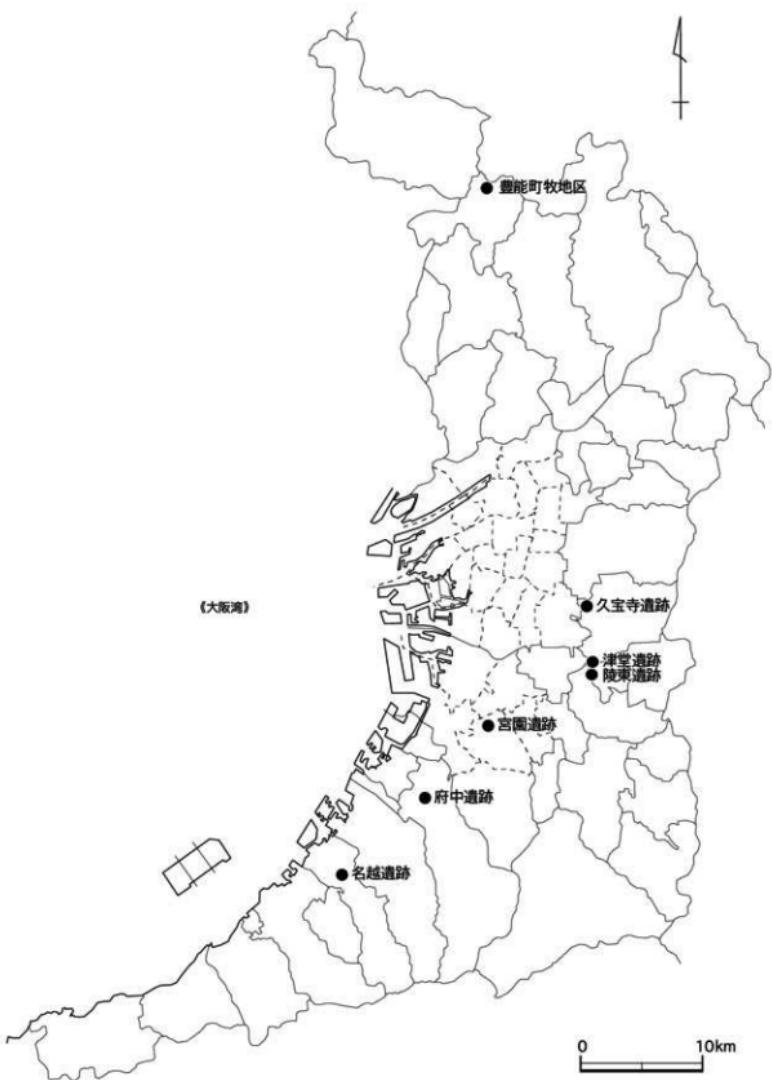
主査 横田 明 事務所・収蔵庫維持管理等  
副主査 石角三夫 積算および竣工検査等  
副主査 杉本清美 収蔵資料の整理等  
副主査 藤井陽輔 文化財公開活用事業等  
技師 河原秋萩 収蔵庫資料等の選搬・管理等  
専門員 竹原伸次 資料貸出・閲覧等  
専門員 藤田道子 報告書作成閲覧の遺物・資料整理

調査事業グループ  
調査事業補佐  
岡田 賢

主任専門員 三木 弘 調整・指導・発掘調査等  
主査 西川寿勝 調整・発掘調査・遺物整理等  
副主査 木村啓章 調整・発掘調査・遺物整理等  
副主査 原田昌浩 調整・発掘調査・遺物整理等  
技師 大澤 崇 調整・発掘調査・遺物整理等  
技師 新尺雅弘 調整・発掘調査・遺物整理等  
技師 地村邦大 調整・発掘調査・遺物整理等

### 【文化財調査事務所】

令和3年度文化財保護課・文化財調査事務所組織図



主要調査位置図

## 【試掘確認調査の概要報告】

### 名越遺跡（21023）

（1）貝塚市清児地内

（2）都市計画道路泉州山手線（名越工区）道路改良事業

（3）地村 邦夫

#### はじめに

調査地は貝塚市清児地内に所在する都市計画道路泉州山手線（名越工区）の道路用地である。

本道路用地は、近木川右岸に広がる丘陵の縁辺部にあたり、水間寺への参詣道である水間街道と、その東側100mに並行して伸びる新水間街道に挟まれている。丘陵上は古より開発が進められており、新水間街道より東側は耕作地となっている一方、調査地の位置する地区は、ほとんどが宅地として利用されている。

#### 調査の概要

調査地は東西に長く、両端の南側が突出する凸字形をしている。最も広い部分で東西約130m、南北約65mである。調査区を1～3区に区分し、1区に4ヶ所（1-1区～1-4区）、2区に2ヶ所（2-1～2-2区）、3区に1ヶ所（3区）の計7ヶ所のトレンチを設定した。トレンチは1区及び2区では長さ12m×幅3m、3区では長さ3m×幅1.5mである。

#### 1区の調査成果

1-1区では3面の遺構面を確認した。

第1面（T.P+41.8m）では中世～近世と考える、南北方向の溝1条を検出した。遺構埋土から瓦器片や土師器片が出土している。

第2面（T.P+41.7m）でも中世と考える南北方向の鋤溝を7条確認し、遺構埋土から土師器片が出土した。

第3面（T.P+41.5m）では中世と考える不定形の落ち込みを検出し、埋土から瓦器片が出土した。

1-2区では3面の遺構面を確認している。

第1面（T.P+41.75m）では中世と考える東西方向

の溝9条が検出され、遺構埋土から瓦器片が出土している。

第2面（T.P+41.45m）では中世と考えらえる東西方向の溝6条を検出している。

遺構面精査時に瓦器碎片・瓦器小皿片・土師器片が出土している。

第3面（T.P+41.35m）は地山面であり、溝10条とピット4基を検出した。顯著な遺物は出土しなかつたが、1-2区の調査成果や他トレンチの調査成果から中世の遺構と考える。

1-3区及び1-4区では、いずれも地山面（T.P+41.1～41.2m）で中世と考える東西方向の溝を複数検出している。地山面精査時に瓦器片・土師器片が出土している。

#### 2区の調査成果

2-1区では（T.P+41.25m）の地山面で中世と考える東西方向の溝2条とピット1基を検出しており、地山面精査時に瓦器片・土師器片が出土した。

2-2区では遺構は検出されず、瓦器片が出土しているのみである。

#### 3区の調査成果

遺構、遺物とも確認されなかった。

#### まとめ

今回の調査では、1-1・2区にて遺構面を3面、1-3・4区、2-1区において1面を検出した。

これら遺構面のうち、最も年代的に遡るのは地山面で検出した中世の鋤溝等であり、この地の開発が中世には進められていたことが明らかとなった。

（地村邦夫）



図1 調査位置図

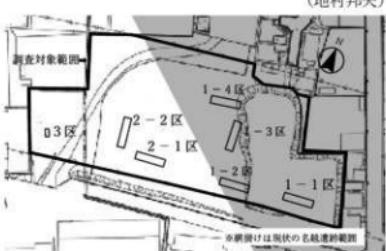


図2 調査区詳細図

## 【試掘確認調査の概要報告】

### 豊能町牧地区（21041）

(1) 豊能町牧

(2) 府営農村総合整備事業「牧地区」

(3) 地村 邦夫

#### はじめに

豊能町牧地区は、北・東・南の三方を鴻巣山とそれに連なる鴻巣山山塊、西を妙見山に連なる妙見山山塊に囲まれた山あいの農村である。北摺山地に位置する豊能町域は、山間部を縫うように流れる河川によって形成された盆地性の河谷平野に農村が営まれてきた。牧地区もそのひとつであり、鴻巣山・同山塊に源を発する牧川の二つの源流が形成した河谷平野に農地が造られている。地区の範囲は東西 1km、南北 500m に及ぶ。

#### 調査の概要

事業は牧地区の大半を対象とするものである。当地における埋蔵文化財の有無を確認するため、切土の予定されている農地を検討の上、51ヶ所の調査区を設定した。調査区は平面 2m 四方とし、掘削により土層の変化、遺構・遺物の有無を確認した。

#### 調査の成果

調査区 2において、調査区北端で井戸 1基を検出した。北半分は調査区外になるため、正確な規模も不明である。その輪郭を検出した G.L.-0.6m では径 2m 以上、調査の最終掘削深度である G.L.-0.9m では径 1.7m 程度であった。

遺物は井戸より瓦器椀、瓦質鍋、瓦質三足、土師器小皿のような中世の土器片が出土している。

他の調査区でも瓦器片・土師器片が出土したもの、遺構は確認されなかった。

このような状況から、牧地区はこれまで明らかにされていているように、鎌倉時代には開発が行われていたと考えられる。

(地村邦夫)



写真1 調査区 02 南から



写真2 調査区 02 南から



図1 調査区 02 南から

## 【主要発掘調査の概要報告】

# 久宝寺遺跡（21008）

- (1) 八尾市西久宝寺町
- (2) 令和3年度久宝寺緑地整備事業
- (3) 西川寿勝・岡田 賢

## はじめに

今回の発掘調査は府営久宝寺緑地東地区の第2期整備事業に伴うもので、雨水貯留施設の設置に先立って実施した。面積は1,240m<sup>2</sup>である（図1）。

## 調査成果

### 1) 基本層序

基本層序は大別して6層ある。第0層は緑地公園の基盤となる造成土。第1層は旧水田耕作土（現代）。第2層は第一遺構面（近世島畠）を覆う堆積土（近代以降の耕作土）。第3層は第2遺構面を覆う暗灰黄色土、灰白色粘土層であり、調査区のほぼ全域で確認された。島畠の構成土や島畠間の水田耕作土などからなる。第4層は第2遺構面の基盤層であり、厚層40～80cmの砂層である。第4層の下半部で認められた灰白細砂層からは布笠式土器や準構造船の舷側板とみられる板材が出土した（写真1）。第5層は第3遺構面のベースを形成する黄灰色粘土層などで構成される。草などの植物片を含む腐植土層もみられ、湿润な堆積環境が想定される。本層からは弥生時代後期後半から庄内式期の土器が大量に出土した。

### 2) 各遺構面の概要

第1遺構面：南北方向に長い島畠、その間の水田を検出した。水田耕作土から近世後期の陶磁器が出土しており、近世後半以降に機能した島畠である。

第2遺構面：第4層上面で検出された古墳時代中期～後期の遺構面である。溝、土坑、井戸等が検出されている。中でも調査区の西半で検出された井戸176は特筆される。検出面での平面形は長辺約0.9m、幅0.7mを測り、埋土上半は5世紀後半の須恵器片が含まれる淡褐色粘土で、層相から人為的な埋戻しが想定される。これを除去すると木製井戸枠が検出された。井戸枠は準構造船の船首もしくは船尾を切断して再利用したものである（写真2）。井戸枠内からは須恵器・土師器・製塙土器・韓式系土器が出土している。

第3遺構面：調査区西南部にある河川181の氾濫により第4層（氾濫堆積物）が堆積したとみられるが、第4層除去後は河川181から東側の調査区全体が粘質土で覆われており、この上面で古墳時代前期の水田畠畔の検出を想定したが、溝を数条検出したのみで、耕作地として土地利用されていないことが分かった。

## まとめ

平成30年度に行った発掘調査では、古墳時代中期の遺構と、平安時代の遺構が同一面で検出されている。今回調査区でも古墳時代中期の遺構を複数検出しており、遺構面の基盤層を考慮すると、北西～南東方向に形成された自然堤防上に集落の広がりが想定できる。なお出土遺物の詳細を今後検討しなければならないが、今回は古代に属する遺構は希薄であった。

また第5層からは弥生時代後期後半～庄内式期の土器が大量に出土している。周辺（調査区の南か？）に当該期の集落が存在することが想定される。

（岡田 賢）



図1 検査区位置図



写真1 第4層中舷側板出土状況（南から）



写真2 井戸176 検出状況（南から）

## 【主要発掘調査の概要報告】

### 陵東遺跡（21009）

- (1) 羽曳野市島泉・藤井寺市恵美坂
- (2) 一般府道大阪羽曳野線（藤井寺工区）道路改良事業
- (3) 新尺 雅弘

#### はじめに

陵東遺跡は羽曳野市島泉八丁目と藤井寺市恵美坂二丁目にまたがり、羽曳野丘陵の末端に位置する（図1）。一般府道大阪羽曳野線（藤井寺工区）の建設に伴い令和2年度より府教育委員会による発掘調査を実施している。今回の発掘調査は前年度調査の隣接地1.117m<sup>2</sup>を対象として実施した。なお、水路の関係から調査区を分割して調査を実施しており、北側の調査区をN区、南側の調査区をS区と設定した。

#### 調査の概要

今回の調査区の東側には開析谷が走り、その堆積をN区北東部で検出した。南へ向かって標高は高くなり、調査区中ほどでは旧耕作土を除去するとすぐに中位段丘構成層が露頭するようになる。しかし、S区北端のあたりから調査区南側へ向かって下降し、東側の開析谷に注ぎ込む東西方向の支谷の北崖が検出された。

N区では、中位段丘構成層の上面を中心に中世～古墳時代前期までの遺構を検出した（写真1）。主なものとしては、古代の掘立柱建物1棟、溝1条、古墳時代後期の掘立柱建物1棟、溝1条、前期の井戸1基、溝2条を検出した。なお、掘立柱建物と溝は前年度調査区で検出していたものの続きである。また、開析谷部では古墳時代後期の水田と畦畔を検出した。

S区では古墳時代後期の包含層上面で畦畔の痕跡を検出し、当該期以降は水田として利用されていたことが判明した（写真2）。支谷の自然堆積層からは古墳時代前期、弥生時代中期、縄文時代後期の土器が出土している。また、堆積構造から支谷には乾湿のサイクルがあったこともわかり、乾燥期の堆積からは北側の丘陵部から投棄された弥生土器がまとまって出土した（写真3）。

#### まとめ

本調査では、前年度までに明らかにした遺跡周辺の土地利用の様相をより明確にできた。特に、支谷部の水田化が6世紀に遡ることが明らかとなり、開析谷部で検出した水田と時期を等しくすることは重要である。前年度に実施した自然科学分析の結果、6世紀を境とした局地的な森林域の縮小が確認されており、古市古墳群の營まれた時期に遺跡周辺で大規模な水田開発が行われたと推察される。

（新尺雅弘）



図1 調査位置図



写真1 N区全景



写真2 S区全景



写真3 S区支谷部弥生土器出土状況

## 【主要発掘調査の概要報告】

# 津堂遺跡（21017）

- (1) 藤井寺市津堂
- (2) 一般府道大阪羽曳野線（藤井寺工区）道路改良事業
- (3) 原田 昌浩

## 調査の概要

津堂遺跡は、大阪府藤井寺市の北西一帯に広がる縄文時代から中世にかけての集落遺跡で、昭和48年に府立藤井寺高等学校の建設に際して遺構・遺物が発見され、遺跡として周知されている（図1）。過去に数回開発に伴う発掘調査が行われており、中でも平成27年の物流倉庫建設に伴って行われた発掘調査では、古墳時代前期末から中期初頭の大型建物2棟と高环を大量に投棄した溝が見つかっている（笠栗編2016）。これらの遺構と、南東約1kmに所在する古市山古墳群の嚆矢となる大型前方後円墳である津堂城山古墳（墳丘長210m）と時期が近いことなどから、注目を集めてきた。

令和3年度は、一般府道大阪羽曳野線の建設に伴って約600m<sup>2</sup>の調査区を設定し、令和3年8月から令和4年6月まで調査を実施した。調査の結果、中世の遺構面で耕作に伴うと考えられる溝、掘立柱建物複数棟を、古墳時代の遺構面で古墳時代前期末から中期初頭の建物群を検出した。

令和4年3月17日に古墳時代前期末から中期初頭の建物群発見について報道提供を行い、同月26日に現地公開を予定していたが、現地公開は荒天のため直前に中止した。なお現地公開資料は、当課のホームページにて公開している（図3）。また、現地公開の代替として、令和4年6月25日に藤井寺市と共に「津堂遺跡発掘調査報告会」を開催し（於：藤井寺市生涯学習センター）、本調査内容について報告を行い、39名の参加があった。報告会の様子は藤井寺市の公式YouTubeチャンネル「フジイデラテレビ」で公開されている。

## 古墳時代前期末から中期初頭の遺構

調査区南半で計7棟の掘立柱建物、敷地の北端を区画する柵（塀）、土坑、井戸を検出した。調査区の北半は検出面が地形的に低くなってしまっており、遺構はなく、地震等による地形変動の痕跡を検出した（図2・写真2）。

建物A・B・C・Dは柱間が3間×2間の総柱、建物Eは3間×2間、建物Fは2間×2間、建物Gは3間×2間に復元できる。建物の規模は長辺が約6.8m、短辺が約5.2mで推定床面積は1棟あたり約35m<sup>2</sup>である。掘方の規模は建物A・B・C・D・G



図1 津堂遺跡の位置

が一边約0.8mの方形、建物Eが一边約1.0mの方形、建物Fが一边約0.5mの方形で、深さはいずれも検出面から約0.8mである。柱間は芯々で約2.4mである。その値から外れる場合、別建物と認識している。柱は直径0.15mから0.25mの丸太状と推定できる。

遺構の切り合い等から、建て替えが想定される。先行して建物EとFとが建てられているが、これらが同時に建てられ機能していたかは不明である。次に建物A・B・C・Dが建てられる。建物の柱筋が揃い、規格的な建物配置であることから、これらは同時併存していたと考えている。これらの建物群が機能を終えると、建物Gが建てられる。

以上の建物群のうちどの段階のものと組み合うかは不明であるが、建物北端に柱間3.0mで1列の柵（塀）を検出した。この柵（塀）より北側の調査区内に古墳時代の遺構は検出できていない。

また全ての柱は建物の機能終了後に抜き取られている。その埋め戻しに際して、土器等を埋めており（写真3）、これらの土器は須恵器を含まず、笠栗柘による津堂遺跡の土器編年（笠栗2017）の1・2段階のみである。のことから全ての建物の建設・建替・廃絶が短期間であったと考えられる。建物と切り合い関係のない井戸から出土した土器（写真4）も同時期で



写真1 津堂遺跡と周辺の景観（北西から）



写真2 津堂遺跡の遺跡俯瞰写真（上が北）

ある。建物群の機能終了後は、中世（鎌倉時代）の遺構面に至るまで遺構・遺物が希薄であった。

#### 周辺調査との関係

今回の調査区北東 80m では、今回検出した建物群とほぼ同時期に機能していた北流する流路が（岩崎編 1992）、西約 150m では今回の建物群と軸を揃える大型掘立柱建物 2 棟とそれらを囲むような流路と高環ばかりが廃棄された土器だまりなどが検出されている（笹栗編 2016）。東の流路は機能終了後（今回の建物群の機能終了と同時か？）に埋没していたことが判明している。また西の大型建物は機能終了後に廃絶するが、古墳時代中期以降も遺構遺物がみられ、集落は継続している。

#### 今回の建物群の意義

今回調査した建物群は一部を除いて、束柱を持つ総柱構造の掘立柱建物である。複数棟が連なる総柱構造の建物はクラ（倉庫）である可能性が高い。津堂遺跡の倉庫群は、遺構の時期的に大阪市法円坂遺跡や和歌山市鳴滝遺跡、豊中市螢池東遺跡で見つかっている古墳時代中期中葉の倉庫群の前史となる可能性がある。なお、法円坂遺跡・鳴滝遺跡・螢池東遺跡とともに存続時期が短いことも、津堂遺跡と類似する。

また、古市古墳群の周辺では津堂遺跡が発見されるまで大型建物を含め、掘立柱建物自体が少ないことが指摘されてきた（伊藤 2011）。これまでの津堂遺跡の調査成果をまとめると、津堂城山古墳の築造と連動して大型建物や倉庫群等の集落が整備されていたことがほぼ確実である。大型古墳（津堂城山古墳）の築造過程を考察する上で、また古市古墳群造営の歴史的背景等を探究する上でも重要な意義を持つ遺跡と考えられる。

（原田昌浩）

#### 参考文献

- 伊藤聖浩 2011『古市古墳群の形成と居住域の展開』『古墳時代政権交替論の考古学的再検討』(平成 20 ~ 22 年度科学研究費補助金 基盤研究 (B) 研究成果報告書) 大阪大学大学院文学研究科  
岩崎二郎編 1992『津堂遺跡』大阪府文化財調査報告書第 43 号、大阪府教育委員会  
大阪府教育庁文化財保護課 2022『津堂遺跡現地公開資料』  
笹栗 拓編 2016『津堂遺跡—TD2014-3 区の発掘調査報告書—』藤井寺市文化財報告第 39 集、公益財團法人大阪府文化財センター調査報告書第 273 集、藤井寺市教育委員会  
笹栗 拓 2017『津堂遺跡における古墳時代中期の土器編年—古市古墳群周辺集落の土器様相とその特質—』『大阪文化財研究』第 50 号 公益財團法人大阪府文化財センター  
笹栗 拓 2018『津堂遺跡の集落出現期の土器と周辺動向』『古墳出現期土器研究』第 5 号、古墳出現期土器研究会  
笹栗 拓 2020『古市古墳群周辺の土地利用と地域開発』『大阪文化財研究』第 53 号、公益財團法人大阪府文化財センター

#### 挿図出典

- 図 1 國土交通省國土數値情報及び笹栗編 2016 より作成  
図 2 ~ 3 大阪府教育庁文化財保護課作成



写真3 掘立柱建物の柱穴断面



写真4 井戸出土の土器群

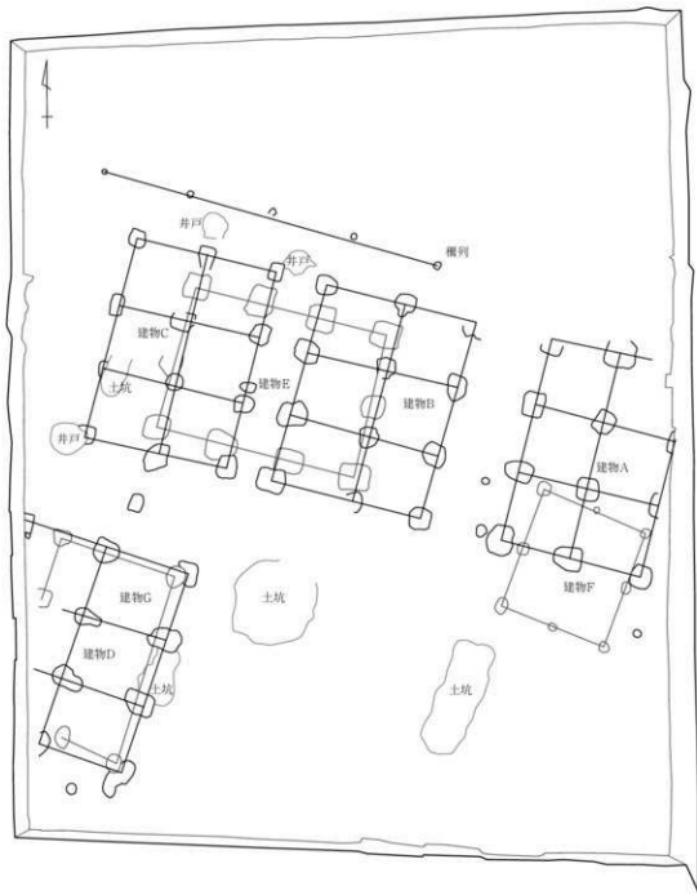


図2 津堂遺跡の造構平面図

0 5m

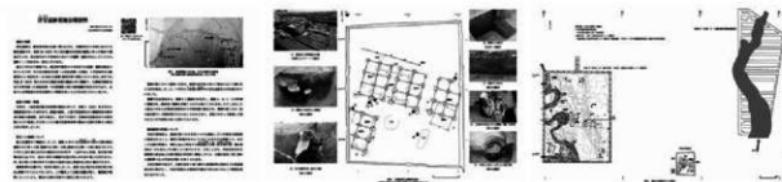


図3 津堂遺跡現地公開資料



津堂遺跡現地公開資料 URL QR コード

## 【主要発掘調査の概要報告】

### 府中遺跡（21002・21026）

（1）和泉市府中町・黒島町

（2）都市計画道路大阪岸和田南海線街路築造事業

（3）木村 啓章

#### はじめに

府中遺跡は槇尾川右岸の低位段丘上に立地し、和泉市北西部、府中町、黒島町、桑原町にまたがる東西約1km、南北約1.2kmの広範囲にわたる。遺跡内には和泉国府跡や和泉寺跡推定地を含まれている。平成17年度より都市計画道路大阪岸和田南海線の街路築造事業に伴う調査を実施しており、令和3年度は前年度調査地から継続する約700m<sup>2</sup>（21002-1・2区）と平成29年度調査第1区の北側の道路交差点部分（21026-1・2区）の約400m<sup>2</sup>の範囲において調査を実施した（大阪府教育委員会2019『府中遺跡』）。



写真1 21002 第1調査区 捜査柱建物

#### 21026 第1・2調査区の調査概要

##### 【第1調査区】

調査地の現地表はT.P.+23.6m程度で、基本層序は、現代盛土の直下に、近現代耕作土、中世耕作土となり、基盤層は砂礫層～砂礫混じりシルト層からなる。

中世の鍋溝や大型の土坑、弥生時代末～古墳時代初頭の土坑と同じ基盤層上面で検出した。調査区東側に弥生時代末～古墳時代初頭の遺構が分布する傾向にあり、当該期の集落がより北西に広がることが想定される。

##### 【第2調査区】

調査地の現地表はT.P.+23.2m程度で、基本層序は、現代盛土の直下に、近現代耕作土、中世耕作土、中世～古代の包含層となり、基盤層は砂礫混じりシルト層からなる。

狭い調査区ではあったものの（写真2）、弥生時代末から古墳時代初頭の竪穴住居2基や土坑、古墳時代以降と考えられる東西溝を検出した。

（木村啓章）



図1 府中遺跡調査区位置図

#### 21002 第1・2調査区の調査の概要

第1・2調査区は現代の水路を挟んで隣接しているため、まとめて報告する。調査地の現地表はT.P.+23.5m程度で、基本層序は、現代盛土の直下に、近現代耕作土、中世の耕作土、中世から古代の包含層となり、基盤層は砂礫層～砂礫混じりシルト層からなる。昨年度第3調査区と同様、南西に向かってシルト層へと変化し、北東側には砂礫層が広がり、わずかに高まる地形となっている。

弥生時代末～古墳時代初頭の遺構として、第2調査区北端に土坑や第3調査区より続く落ち込み001を検出した。昨年度同様この001を境に南に行くにつれ当該期の遺物の分布は少なくなる傾向がみられた。

第1調査区南東側では、平安時代後期と考えられる掘立柱建物や土坑を検出した（写真1）。建物の軸は北東～南西方向を向き、規模は三間×四間、もしくはそれ以上と考えられ、柱間は約1.9mであった。



写真2 21026 第2調査区全景

## 【主要発掘調査の概要報告】

みやぞの

### 宮園遺跡（21030）

（1）堺市中区宮園町

（2）府営堺宮園第3期高層住宅（建て替え）新築工事

（3）大澤 崑

#### はじめに

宮園遺跡は堺市中区宮園町に所在する古墳時代から中世にかけての遺跡である。泉北丘陵から北西に伸び、緩い傾斜地となっている泉北台地の中ほどに立地している。府営堺宮園第2高層住宅の建て替え工事に伴い、平成28年度より府教育委員会による調査を実施している。今回の発掘調査は、住宅棟、設備棟及び貯水槽の建築予定地約1300m<sup>2</sup>を対象として行った。調査期間は令和3年10月から令和4年2月である。

#### 調査の概要

基本層序は上から順に、宅地造成土、現代耕作土、中世耕作土、地山となる。中世耕作土は3～5区では1層のみ構成されるが、1区では2層、2区では3層に分けられ、とりわけ2区の2層目には瓦器や土師器が大量に含まれていた。時期は出土遺物から、12世紀から15世紀と考えられる。6区では確認できなかった。また2区でのみ中世耕作土の下に堆積層が確認された。遺物は須恵器や土師器、石器が出土しており、須恵器は8世紀以降の特徴を示している。

1区はほぼ平坦な地形だが、東端部に段差があり2区と接続している。土層断面の観察から中世耕作土に段差が認められ、耕作に起因する段差の可能性がある。遺構は鰐溝、溝、ピット、土坑を検出した。特に調査区中央の溝は埋土が他の遺構と異なる白色砂質土であり、縄文時代晩期の石籠が出土した。遺構の配列から建物等を明確に復元することはできなかった。遺物は溝から出土した石籠のほか、土馬や須恵器の壺、黒色土器、瓦器が出土している。

2区は今回の調査区の中で最も地山の標高が低く、前述のとおり隣接する1区より1段低くなっている。遺物包含層である中世耕作土を3層確認しており、古代に属する堆積層も確認している。遺構は多くの溝、ピット、溝、土坑を検出した。建物等を明確に復元することはできなかった。遺物は前述のとおり中世耕作土から10世紀頃の特徴を持つ黒色土器や羽釜の破片が大量に出土しており、縄文陶器や三彩の破片も含まれている。古代の堆積層からは弥生時代の石籠のほか、須恵器の破片が出土している。

3区は団地内の旧道路部分にあたるため、調査区のほとんどが攪乱を受けていた。わずかに残存していた

壁面から、攪乱される前は中世耕作土が存在していたことを確認した。

4区は大部分で攪乱を受けていた。攪乱を逃れた部分で、溝や井戸を検出した。遺物は瓦器や土師器が出土しており、中世に属すると判断する。

5区は大部分で攪乱を受けていた。東側の攪乱を逃れた部分で、溝や井戸を検出した。遺物は中世耕作土層から瓦器と土師器が出土したのみで遺構の時期は不明である。

6区は大部分で攪乱を受けていた。北側の攪乱を逃れた部分で、溝、ピット、土坑を検出した。遺物は瓦器や土師器が出土しており、中世に属すると判断する。

#### まとめ

今回の調査では既往の調査で確認された建物や粘土探査土坑、自然流路は確認できなかった。一方で既往の調査ではほとんど出土していない、10世紀頃の特徴を持つ黒色土器などが大量に出土しており、本遺跡の調査成果に新たな知見を加えることができた。

（大澤 崑）

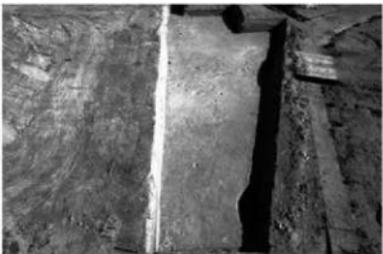


写真1 1区全景



写真2 2区全景

## 【新指定 大阪府指定文化財の紹介】

# 日本基督教団大阪教会本館

名 称 日本基督教団大阪教会本館

煉瓦造を主とした複合構造、建築面積 467m<sup>2</sup>、  
3階建、塔屋及び門柱付、洋瓦葺 附：長椅子など調  
度類 92 点、2 階半円窓旧ステンドグラス一具（5 枚）

文化財の種類 有形文化財（建造物）

員 数 1 件（1 棟）

所在地 大阪市西区江戸堀一丁目 23 - 17

所有者 宗教法人 日本基督教団大阪教会

年 代 大正 11 年（1922）

### 沿革

日本基督教団大阪教会の起源は、アメリカン・ボーデの宣教師ゴルドンが始めた英語塾にあるとされ、明治 7 年（1874）5 月 24 日に西区本田の小さな借家である梅本町公会としてはじまった、在阪最古のプロテスタント教会である。その後、明治 10 年（1877）、明治 14 年（1881）、明治 21 年（1888）と教会活動の進展により会堂を移転し、教會員が 300 人を超えた大正 7 年（1918）には、現在の西区江戸堀における教会堂建設が決められた（註 1）。設計は数多くの教会堂建築を手がけていたヴォーリズ建築事務所に依頼され（註 2）、大正 10 年（1921）に着工、翌年竣工した（註 3）。

### 建築的特徴について

大阪教会本館は西区土佐堀通りの南に通る江戸堀北通りに南面し、聖堂と大講堂を含む幅 15.4 m、奥行き 28.7 m、最大高さ約 15 m、地上 3 階建て、妻入りの建物と、その北西隅に 4.5 m四方、高さ約 25 m の塔屋を付している。南面の妻壁の西側に間口 2.2 m の正門を開き、現在、本館の西側には緑豊かな前庭（註 4）が配され、塔屋 1 階部に開く玄関へと通じるアーチ空間として使われている。本館北側の背後には鉄筋コンクリート造 3 階建の教育館が建つ。

本館正面は切妻形の煉瓦壁で、中央に御影石の屋根形迫持ちアーチを庇にした出入口と、その上部に直径は約 2.4 m のバラ窓を配す。このファサードの構成は一見すると簡潔であるが、煉瓦の長手と小口を交互に表すフランス積みを基調にして、ブリック・ワークのさまざまな圖柄が折り込まれている。また用いられてる煉瓦は均一なものではなく、形状不揃いの焼過ぎ煉瓦を積みあげ、織物のような風合いを感じさせている。30 m余りにつづく教会堂側壁の一層目はフラットアーチの矩形容、二層目は半円アーチ窓、側廊上部に

あたる三層目には小さな半円アーチ窓が連なり、その上部にはロマネスク・スタイルの特徴であるロンバルディア・バンドが軒下を飾る。塔屋は 6 層で構成され、宝形屋根を架けている。また本館西側に続く正門の門柱も煉瓦造で、建物正面の妻壁と同様、柱頂部など各所にブリック・ワークが施された意匠性の高いものである。

本館内部の主なる諸室として、1 階には玄関ホール及び階段、大講堂、2 階は 250 席余りを備えた幅 14.5 m、奥行き 25.5 m の聖堂、牧師室などが置かれている。また聖堂は後部にギャラリーを備え、屋根裏まで吹き抜いたオープン・ルーフとなっている。2 階の聖堂は身廊と側廊とで構成されるバシリカ式の平面を有し、上部空間には約 12 m の梁間に 7 組の木造キングポスト・トラスを架け、それらを支持するプラケットの意匠は、トラス屋根の重量を打ち消すかのように巧みである。内壁面は腰高までを化粧煉瓦積みとし、それより上部を漆喰塗としており、煉瓦の腰壁によって内外の一体感がつくり出されている。聖壇上の大きなラウンド・アーチは力強く、側廊はアーチを連続させることで奥行き感と劇的な光の効果が生まれている。また聖壇は弓形に張り出すように設けられ、会衆席から聖壇に向かって床がゆるやかに傾斜している。

1 階の大講堂は聖堂の直下に位置する大部屋で、集会や教会学校の教室等に用いられている。昭和 47 年（1972）の改築により、内装は改変されているが、当初の主要構造部材、東西壁面の窓の配置などは保持されている。加えて階段室も本教会にとって重要な空間である。玄関ホールの両脇に設けられた階段は、連続するアーチ形の手摺子によって上昇感を強め、太い親柱が屈曲する階段を力強く分節する。2 階の聖堂への入り口であるホールには、ステンドグラスの入る半円形の飾り窓が配されている。階段室はさらにオルガン（註 5）と会衆席を備えた 3 階ギャラリーへと通じ、上部にある円形のバラ窓から会衆席へと射しこむ光が、ロマネスク・スタイルの大阪教会の象徴となっている。

なお本館の北側には、かつて 1 階に図書室等、2 階に社交室、3 階に骨の日本室を備えた木造の教育館（付属館）が接続していたが、平成元年（1989）に鉄筋コンクリート 3 階建に建替えられている。

## 構造的特徴について

大阪教会本館の構造はその外観からは煉瓦造を想起させるが、部位によって構造材が異なる「複合構造体(mixed structure)」であることが、当初の設計図面および建物調査(註6)により明らかになっており、構造設計には米国からの技術援助があったことが伝えられている。次に要点を列記する。

・**基礎**：外壁基礎は無筋コンクリート、外柱基礎は鉄筋コンクリート造であるなど、無筋並びに鉄筋コンクリート造基礎が併用されている。

・**柱**：柱には鉄骨が採用されている。外柱は基礎から小屋までの通し柱とし、中柱は2階の会堂床を支える管柱としている。柱脚部は鉄筋コンクリートで庇護され煉瓦壁体に納められている。

・**梁および床**：鉄骨柱に架かる梁は鉄筋コンクリート造で、主要鉄筋として米国から輸入したカーンバー(Kahn trussed bar)(註7)が用いられている。臥梁も鉄筋コンクリート造で、2階および3階の床部や外周煉瓦壁と繋がるパットレス部に配され、側壁煉瓦頂部の補強効果を高めている。また梁間が最も長大な1階大講堂の天井には、鉄筋コンクリート造の梁を波形鉄板で被覆した防火床(註8)が採用されている。

・**屋根**：煉瓦壁頂部の軒折り、母屋部のトラス梁、下屋の垂木は木造である。屋根葺材はセメント瓦とし、現在は洋瓦に葺き替えられている。

以上のように本建物は壁面に煉瓦を用いているが、無筋・鉄筋コンクリート、鉄骨、木といった異種材料の結合が多く、それらを一体として結実させた「複合構造体」であることが特徴である。

## 改修履歴について

大阪教会本館における主な改修履歴(註9)について簡単にまとめる。

昭和47年(1972)の創立100周年記念に合わせて、1階大講堂の床面が傾斜床からフラット床に変更され、1階玄関ホール脇の控室がトイレに改修された。平成元年に本館北側の木造3階建ての教育館が、鉄筋コンクリート造3階建てに建て替えられた。この改修に合わせて塔屋の基礎部を補強し地盤改良が行われた。また本館2階の半円形飾り窓のステンドグラス(註10)が入れ替えられた。

平成7年(1995)1月17日に発生した阪神淡路大震災により被災し、地盤の液状化等により聖堂妻壁に亀裂が生じ、塔屋が傾斜するなどの被害を受けた。復旧にあたっては本館の外周基礎部分の地盤改良が行われ、南側妻面と階段室に鉄骨柱を加えることで妻壁が補強され、塔屋内壁に鉄骨柱を添えることで耐震性

が向上された。またバリアフリー化に応じるため、1階玄関ホールにエレベーターが設置された。

以上のようにこれまで改修や耐震補強が行われてきており、全体を通じて煉瓦壁や柱梁や小屋組みなどの主要構造部材は建築当初から変更されておらず、特に教会堂内部を最も特徴づけている2階聖堂の内部空間は建築当初の姿が維持されている。

## 本館と一体的に設計・製作された調度類などについて

本教会には、建物と一緒に設計・製作された調度類や旧ステンドグラスなどが残っている。

建築当初の調度類(註11)は、2階聖堂内の会衆席の長椅子71点をはじめ、聖壇に据えられた椅子(註12)3点、講壇および3階ギャラリー席や階段室などに配された長椅子17点があり、これらの総数は92点である。長椅子はオーク材の厚板を用い、2階会衆席のものは聖壇の曲線を囲むよう円弧形にデザインされている。また聖壇の椅子は、会衆席と比較して装飾性が高いゴシック調のデザインが施されている。

本館2階の半円形飾り窓には教会唯一のステンドグラスが嵌められており、現在のものは改修によって入れ替えられたものだが、前身のステンドグラス一具(5枚から構成)が別置保管されている。旧ステンドグラスは、繁茂する樹木の中央に白い花が咲く風景が図案となっており、使用されている乳白色のマーブル模様のガラス(註13)は米国製のものである。

なお照明器具も建築当時のものがいくつか残っている。聖堂内天井に設置された灯具は、繊細な彫刻が施された鋳造製の金物で吊り下げられている。また階段室の踊り場に設置された灯具はブラケット部分に装飾模様を彫り出したものである。

## 評価

大阪教会本館の意匠的特徴は、半円アーチを用いた壁面構成を特色とするロマネスク様式の外観や、バシリカ式平面の聖堂、小屋組みに簡素でかつ力強い印象を与えるキングポスト・トラスが採用されるなど、中世初期に遡る建築様式を用いていたところにある。

建築構造は、外観からは煉瓦造に見えるが、柱梁などの主要構造部材に、鉄骨、鉄筋コンクリート等を複合的に活用している点が大きな特徴である。近代日本において大規模建築に用いられた構造の歴史を辿ると、幕末から煉瓦造を主とした洋風建築が数多く建てられ、明治期から大正期にかけて耐久性や防火性を増すため煉瓦のみでなく鉄骨や鉄筋コンクリートを複合的に用いた「複合構造体」へと発展を遂げるとともに、その材料や施工技術は欧米(特に米国)から輸入され

た。しかし大正12年（1923）に発生した関東大震災において、煉瓦を用いた建物の多くが被害を受けことにより、以降構造は鉄筋コンクリート造が主流となり、日本国内で材料や施工技術が独自に発展した。このような歴史的な背景があり、煉瓦造を主とした建造物で現存するものは、大阪府内においても少ない（註14）。そして関東大震災直前の大正11年に竣工した大阪教会は、当時の米国の最先端構造技術を導入した「煉瓦を主とした複合構造体」の、最晩年かつ到達点といえる建築作品に位置付けることができる。

また大阪教会は、ヴォーリズ建築事務所の大規模な教会建築の代表作品としても評価できる。同事務所は戦前期におよそ140棟の教会建築を設計し、建築活動の主たる部分をなしている。そのうち、煉瓦や鉄筋コンクリート造といった非木造の大規模な教会堂で現存する作例はいくつかあるが（註15）、建築面積が450m<sup>2</sup>を超し、高さ約25mの高塔を有する大阪教会本館は、最大規模のものである。

大阪教会本館は建築当初から現在に至るまで、教会の需要や安全性を確保するため、改修や耐震補強が行われてきたが、外観を特徴づける煉瓦壁、本館の骨格である柱梁や小屋組みなどの主要構造部材、内部の意匠的価値が最も高い2階聖堂の空間などは適切に維持されている。また当該建物は聖堂のみならず大講堂の機能が含まれているのが特徴として挙げられる。これは献堂にあたり大阪教会が、礼拝のみではなく地域のため種々の集会など多用途に供することができる教会堂を目指したためであり（註16）、現在も聖堂と大講堂の機能が保持されている。さらに1990年代に再整備された前庭が塔屋1階に聞く玄関へと通じるアプローチ空間を豊かなものにしており、都市部における教会堂としても見るべきものがある。なお大阪教会本館はすでに平成8年（1996）に国登録有形文化財として登録されており、建築から現在に至るまで教会員達によって大切に守られている。

以上のように大阪教会本館は、都市部における大規模な教会堂建築であり、その外観に煉瓦壁とロマネスク様式の伝統的な要素を用いているが、建築構造には当時最先端の「煉瓦を主とした複合構造体」が使われており、近代日本における建築構造技術の発展を知るうえで貴重である。また全国に数多くの教会建築を残したヴォーリズ建築事務所における大規模な教会堂作品としても重要であり、総じて大阪府指定文化財としてふさわしい。なお建築当初から使用されている調度類や、別置保管されている旧ステンドグラスは、建物と一緒にして設計・製作された貴重なものである。

（神谷悠実）

註1 明治15年（1882）に大阪教会の牧師として就任した宮川経輝は、現教会堂の建設を推進し、教会活動の進展に大きく寄与した。

註2 大正7年（1918）にヴォーリズ建築事務所に設計が依頼され、設計着手から着工まで3年を要した。6つの計画案スケッチが残されており、長い設計期間中にヴォーリズ建築事務所において様々な計画案が検討されていたことが分かる貴重な資料といえる。設計にあたり作成されたスケッチや建築図面の原団は、現在、株会社一粒社ヴォーリズ建築事務所が所蔵しており、大阪教会には複写図面が保管されている。

註3 建築年代は、献堂式の際に配布された記念冊子「大阪基督教会会堂建築記念 大正11年6月」による。

註4 前庭は1990年代に一部を煉瓦敷きにするなどの改修が施され、現在の姿となっている。

註5 3階ギャラリーにはリードオルガンとパイプオルガンが据えられている。リードオルガンは、*Esty Organ company*（米国）の製品で、当社の1922年のカタログに掲載されている。建築時に奉納されたものと伝わる貴重な装備といえる。阪神淡路大震災で被災したが、修復され現在も演奏することができる。パイプオルガンは昭和51年（1976）に設置されたもので、設置に伴いギャラリーを支持する補強工事が行われた。

註6 大阪教会では歴史を経てきた教会堂の保存対策に向けての建築調査を昭和52年（1977）に日本建築学会近畿支部に依頼し、昭和56年（1981）に「大阪教会建築調査報告書」が作成された。報告書は教会堂を保存することを前提として、特に構造上の特徴に重点を置いて書かれている。

註7 *Trussed Concrete Steel company*（米国）製の異形鉄筋の種類。大正間に日本に輸入され使用された。大正12年の関東大震災で多くに被害を引き起こしたため、以降使用されていない。なおカーンバーが使われている現存建物には、大谷派本願寺函館別院（国指定／大正4年（1915）、山口銀行本館（山口県指定／大正9年（1920））などがある。

註8 防火床とは、コンクリートや木造の梁を鉄板で被覆することで防火性を増すための工法である。

註9 大阪教会では創建から現在に至るまでの建物としての歩みを令和3年（2021）に「日本基督教団大阪教会建築調査記録」にまとめるとともに、建物の現況図面が作成された。現況図面は、建築当初図面に一部加筆や改変する方法で作図されており、本稿では本調査記録に収録された図面を引用する。

註10 現在のステンドグラスはキリストと羊の図案で、平成元年（1989）にミラノで製作されたものである。

註 11 調度類の図面は残っていないが、主に会堂建築記念冊子に掲載されている古写真に写っているものを、建築当初と判断する。

註 12 椅子の背もたれの裏側には、献堂にあたり尽力した建築委員長の名が刻まれている。

註 13 ステンレスガラスに使用されているのは、*Kokomo Opalescent Glass* (米国) 製のガラスである。

註 14 大阪府内で煉瓦を主とした建造物で現存するのは、北浜レトロビルディング (旧桂隆産業ビル) (国登録／明治 45 年 (1912))、高麗橋ビルディング (明治 45 年)、大阪市中央公会堂 (国指定／大正 7 年 (1918))、川口基督教會 (府指定／大正 8 年 (1919))、田尻歴史館洋館 (府指定／大正 11 年 (1922)) が挙げられる。

註 15 ヴォーリズ建築事務所設計による現存する非木造の大規模な教会堂は、京都御幸町教会 (煉瓦造／京都市指定／大正 2 年 (1913))、明治学院礼拝堂 (煉瓦造／港区指定／大正 4 年 (1915))、久留米ルーテル教会 (煉瓦造／登録／大正 7 年)、大阪福音教会 (RC 造／昭和元年 (1926))、神戸ユニオン教会 (RC 造／国登録／昭和 3 年 (1928))、神戸女学院チャペル (RC 造／国指定／昭和 8 年 (1933))、博愛社礼拝堂 (RC 造／昭和 10 年 (1935))、京都復活教会 (RC 造／昭和 11 年 (1936)) が挙げられる。

註 16 「大阪基督教会会堂建築記念 大正 11 年 6 月」の冒頭には、「(前略) 新会堂は独り我が教会の使用に止めず広く之れを我が大阪市民の為めに解放し宗教、教育、社会事業等の集会に便し教会本来の使命に向て邁進せんこと之なり。(後略)」とあり、地域に開かれた教会を目指すべきであると記されている。

## 参考文献

大阪基督教会 1922 『大阪基督教会 会堂建築記念』

大阪基督教会 1924 『大阪基督教会沿革略史』

日本建築学会近畿支部・日本基督教團大阪教会 1981 『大阪教会建築調査報告書』

大阪府教育委員会 2007 『大阪府近代化遺産（建造物等）総合調査報告書』

独立行政法人 国立文化財機構 東京文化財研究所 2020 『コンクリート造建造物の保存と修復－未来につなぐ人類の技 19』

日本基督教團大阪教会 2021 『日本基督教團大阪教会 建築調査記録』



写真1 日本基督教團 大阪教会本館 外観



写真2 日本基督教團 大阪教会本館 聖堂内部



写真3 日本基督教團 大阪教会本館 聖堂会衆席



写真4 日本基督教團 大阪教会本館 階段室

こんごうじいっさいきょう  
金剛寺一切経

名 称	こんごうじいっさいきょう 金剛寺一切経
文化財の種類	有形文化財（書跡・典籍）
員 数	4461 卷 24 帖 2 枚
所在地	河内長野市天野町 996 番地
所有者	宗教法人 天野山金剛寺
年 代	平安時代前期から江戸時代中期まで

**概要**

金剛寺一切経は、天野山金剛寺（以下、金剛寺。河内長野市）が所蔵する 4461 卷 24 帖 2 枚（註 1）にて構成された、まとまって伝來する府内唯一の写本一切経である。

本一切経は、鎌倉時代前期から中期にかけて金剛寺およびその周辺地域の寺社等にて書写した経巻と、既に平安時代以来各所にて書写されていた経巻を併せる形で作られた。この中には、中國唐代の経巻に基づく本文をとどめる奈良時代写經を転写した経巻も多数含まれる（註 2）。

**金剛寺における一切経の書写**

一切経とは、体系的に集積した数多の仏教経典のこと、で、経・律・論の三蔵のみならず中国の高僧らが著した中国撰述の注釈書類等も加えた、仏教典籍の集大成といるべき經典群である。

金剛寺は、行基の開創で、空海修行の地とされるが、その後荒廃する。金剛寺の再興は平安院政期のこと、聖地房阿彌（1136～1207）が弘法大師空海の御影供を始めたと伝わる承安 2 年（1172）、あるいは金堂が建立された治承 2 年（1178）とされる。金剛寺一切経の書写事業は、『施焰口餓鬼陀羅尼經』の奥書に「承元第二年六月七日、於河内国金剛寺書写已畢」と記されることから、阿闍の没した翌年となる承元 2 年（1208）に開始されたと考えられている。以降、嘉禎 3 年（1237）を最多として書写奥書を有する経巻が多く見だされ、建長 3 年（1251）より後は急速に書写にかかる奥書が見えなくなる。このことから、金剛寺を拠点とする書写事業は承元 2 年に開始、嘉禎 3 年頃に最も活発な書写活動がなされ、ほどなく大部分の書写が終了したとされる。金剛寺の山内における書写場所として、北房、東谷、塔本房、如意院、北谷不動院、中院、極楽院、光明心院などが奥書から確認できる。

このうち、文永 10 年（1273）に「金剛寺安置一切経之内、未加点之間、(中略)、仍加点而納寺」と記された『成唯識論 卷六』の奥書のごとく、加点にかかる奥書から確認できる。

書が現れる。この頃には金剛寺に整えられた一切経を用いて、訓読のための訓点を付すなど修学のなされたことが知られる。また、南北朝時代の文中元年（1372）に『大般若波羅密多經』卷第五十三および卷第五十五などが補写されたこと、江戸時代中期の正徳 4 年（1714）には『羅摩伽経』や『摩訶般若波羅蜜道行經』『小品般若波羅密經』などが修理のうえ折本に改装されるとともに、欠本は黄葉版をもって補写されたことなどが奥書より判明する。長きにわたって整備や護持のなされてきたことがうかがえる。

**金剛寺周辺寺院における書写**

本一切経には、金剛寺周辺地域の寺院などにて書写された経巻も数多く伝存する。奥書に「金剛寺一切経内」となどと明記される事例として、貞応 3 年（1224）に和泉国南郡山直郷の大日寺（岸和田市）にて書写された『雜一阿含經 卷第十一』『雜一阿含經 卷第二十』や、嘉禎 2 年（1236）に同國塙穴郡石津村の念佛寺（堺市）にて書写された『十誦漏寧比丘要用法』『善見律毘婆沙 卷第四』、同 3 年に同國田原郷下条菱木村（堺市）の慈尊寺にて書写された『摂大乘論 稲 卷第十』、同年に同國泉郡上条郷農中村（堺市）にて書写された『立弘明集 卷第三』などがあげられる。金剛寺にて書写を進めると同時に、各所に散在する貴重な仏典の写本を求め、周辺地域の寺院などにて書写を行っている様子がうかがえる。

このほか、奥書などに金剛寺一切経とは記されないものの、同時期に書写され、金剛寺に伝えられた経巻も数多く存在する。例えば、河内国内において書写された経巻として、寛喜 2 年（1230）に鶴瓶郡宇礼志郷の結願院（富田林市）にて書写された『薩婆多毘婆沙 卷第一』や、嘉禎 3 年に丹北西条郡矢田部郷の善福寺（大阪市）にて書写された『四分律 卷第五十三』などがある。また、和泉国内での写經として、嘉祥 3 年（1222）に大鳥郡の長承寺（堺市）にて書写された『根本說一切有部毘奈耶雜事 卷第三十一』や、貞永元年（1232）に日根郡淡輪辺（岬町）にて書写された『阿毘曇八犍度論 卷第二十二』、嘉禎 2 年（1236）に土塔山（堺市）にて書写された『大周刊定衆經 目錄第五』、そして同 3 年（1237）に泉州の槇尾寺（和泉市）にて書写された『阿毘曇勝俱舍軒論 卷第十八』『広弘明集 卷第十八』、向井村（堺市）にて書写された『弘明集』、和田郷下条の栄多寺（堺市）にて書写された『一切經音義 卷第十』、日根郡近木の地藏堂（貝塚市）にて書写された『一切經音義 卷第四』などが伝存する。

## 平安・鎌倉写経の収集

金剛寺一切経は、そのほとんどが鎌倉時代に書写された経巻で構成されている。しかし、この一切経中には、阿觀による金剛寺の再興期、あるいは書写事業の開始時期を遡る年代を記した、書写や校合の奥書を有する経巻も見いだすことができる。特筆すべきものとして、本一切経中にて奥書から書写年代が判明する最も古い経巻である承暦3年(1079)書写的『大般若波羅密多經 卷四百』を含む大般若經約三百巻や、保延5年(1139)書写的『大唐慈恩寺三藏法師伝』など僧快尋が発願した一切経の一部、応保2年(1162)書写的『顕揚聖教論』など大鳥郡深井郷(堺市)八田寺の一切経の一部、そして建久7年(1196)書写的五部大乗経などを含む僧栄印發願の紀伊国丹生都比売神社とみなされる天野宮一切経の一部などが挙げられる。このほかにも、長承4年(1113)に和田郷中条(堺市)の行基(基力)院野々井寺住僧らが書寫した『経律異相 卷第三十五』や、康治2年(1143)に奈良寺(堺市)の御塔供養料経として書寫された『大方広仏華嚴經 卷第三十八』なども伝わる。また、書写的年は記されないものの、もう一組、字体や料紙といった形態から平安時代前期の書写と判断される大般若經約六百巻も現存する。これらの経巻は、13世紀初頭から金剛寺にて一切経書写事業が進められる間、既に平安時代以来書写され存在していた経巻の施入もしくは收集もなされたため、金剛寺に伝来したと考えられている。

## 金剛寺一切経と奈良写経

金剛寺一切経の中には、いわゆる古逸經典が遺存することも注目される。例えば、本一切経より見いだされた後漢代の安世高訳『十二門經』は、隋代の仁寿2年(602)に成立した『樂經自錄』で既に欠本と記されており、7世紀初頭には散逸していた經典であった。また、安世高訳『安般守意經』をはじめとして、『仏說七女經』『五王經』『餓鬼報應經』『集諸經禮儀儀』などは、現在流布する10世紀以降に成立した宋版や高麗版といった刊本一切経系統の文言と大きく相違する異本であり、その文言は奈良写経である正倉院聖語蔵本と多く一致することが明らかにされている。奈良時代の写経は、隋・唐代の本文を反映しており、敦煌写経とも親近性を有するとされる。金剛寺一切経は平安時代以降に書写された写経であるが、しかし、その藍本として奈良時代の写経もしくはその転写本を用いたものが存するため、宋版や高麗版といった刊本とは異なる經典や本文を伝えているとされる。

## 評価

金剛寺一切経は、その大半が平安時代から鎌倉時代中期にかけて金剛寺および周辺地域の寺社などにて書写された経巻で構成される、まとまって伝わる府内唯一の書写一切経である。本一切経には、書写や校合などの奥書が数多く記されており、書写的年代や場所、人物そして願意などを知ることが出来る。このことから、中世における金剛寺史のみならず、河内国および泉州の地域史や文化史を理解する上で非常に重要なである。加えて、僧侶の学問的營為により調点を付された経巻や、加点年を記した奥書を持つ経巻が存することから、当時の訓読を知ることができ国語学上においても貴重である。また金剛寺一切経は、主たる藍本が奈良時代の写経もしくはその転写本と考えられており、既に散逸したとされてきた經典を蔵することや、宋版など刊本一切経系統とは異なる本文を記す經典を多数含む資料群であることから、日本列島のみならず東アジアにおける仏教学上の資料的意義も大きい。以上より金剛寺一切経は、歴史学、国語学、仏教学などの學術研究において非常に価値が高いといえ、本府指定文化財にふさわしい。

(三好英樹)

註1 金剛寺一切経を構成する経巻のうち、既に国の重要文化財として大正4年(1915)に指定された後村上天皇の奥書を有する『大般涅槃經』12巻および大正8年指定の『梵漢普行願經』1巻、昭和43年(1968)指定の『宝瓶印陀羅尼經』1巻は、この員数に含まない。また本一切経には、同一名の經典が複数巻存在するものもある。

註2 金剛寺一切経は、昭和11年(1936)に東方文化学院東京研究所によってはじめて整理と調査がなされ、その後、昭和40年代半ばには河内長野市史編纂事業で調査のうえ史料編等が刊行されるなど、世に広く知られた存在であった。しかし、長らくその全貌は詳らかでなく、落合俊典を中心とした研究チームによる、目録を含む調査報告書(2004、2007)の刊行によってはじめて明らかになった。

## 参考文献

- 三好鹿雄 1936 「金剛寺一切經全貌」『宗教研究』13-6
- 樋浦晋 2001 「金剛寺一切經と新出安世高譯佛典」『佛教学セミナー』73
- 落合俊典編 2004 「金剛寺一切經の基礎的研究と新出仏典の研究」科学研究費補助金（基盤研究A）研究成果報告書
- 京都国立博物館編 2004 「古写経—聖なる文字の世界—」
- 赤尾栄慶 2005 「河内長野金剛寺一切經管見—中間報告にかえて—」『マンダラの諸相と文化—頼富本宏博士還暦記念論文集 下(胎藏界の巻)』法藏館、頼富本宏博士還暦記念論文集刊行会編
- 落合俊典編 2007 「金剛寺一切經の総合的研究と金剛寺聖教の基礎的研究」科学研究費補助金（基盤研究A）研究成果報告書
- 大塚紀弘 2016 「天野山金剛寺一切經の来歴について」『寺院史研究』15
- 堺市博物館編 2018 「堺・經典をめぐる文化史」
- 堀川亜由美 2019 「天野山金剛寺一切經奥書からみる和泉、河内地域の寺院、人物」『堺市博物館研究報告』第38号、堺市博物館編
- 京都仏教各宗学校連合会編 2020 「新編 大藏經—成立と変遷」法藏館



写真1『大般若波羅密多經 卷第四百』卷末



写真2『施焰口鏡鬼陀羅尼經』卷末



写真3『成唯識論 卷第六』卷末



写真4『雜一阿含經 卷第十一』卷末



写真5『摩訶般若波羅蜜經 卷第三十三』卷末



写真6『安般守意經・仏說十二門經・仏說解十二門經』卷首

## 【資料紹介】

# 大阪城跡発掘調査報告（ドーンセンター第2次調査報告）

### はじめに

大阪府教育委員会は、婦人総合センター（以下、ドーンセンター）建設事業に伴って、大阪府立大手前会館敷地内において、平成元年（1989）から平成4年（1992）かけて4次にわたって発掘調査を実施している（図1）。

第1次調査(OSJ89区:OSJ)は大阪城跡の略号では、奈良時代のピット・土坑、大阪本願寺期の建物群、豊臣前期の屋敷地とそれを移転させて新設した大阪城三ノ丸の石垣、そして江戸時代初期の屋敷跡を検出した。豊臣前期の屋敷地からは遺構に伴って陶器、木製品（漆器・下駄・木簡・枠）、鉄製品（短刀・笄・小柄・鐵）、錢貨、金箔瓦を含む瓦類、動物骨など大量の遺物が出土している（註1）。

今回、紹介する第2次調査は、第1次調査で検出された三ノ丸石垣の解体調査とその下層の屋敷地の調査（OSJ90-1区、調査面積 215.52m<sup>2</sup>）および第1次調査の北東に接する部分（OSJ90-2区、調査面積 311.74m<sup>2</sup>）の二ヶ所で、調査は平成2年（1990）11月25日から平成3年（1991）5月23日まで実施した。

OSJ90-1区では、三ノ丸石垣の移築復元を前提とした解体調査後（石垣を撤去後）、下層の調査を行い、第1次調査で検出された豊臣前期の側溝を伴う南北道路の続きや土坑、礎石、ピット、そして大阪本願寺期の焼土層、礎石やピット、埋甕等を検出した。

OSJ90-2区では、豊臣前期の礎石建物、ピット、井戸、便所、土坑、そして豊臣後期の三ノ丸石垣に併行する形で、その前面に設けられた新旧2時期の柱列（珊瑚）と堀、大阪ノ陣による焼土層、江戸時代初期の庇を伴う礎石建物、江戸時代初期から昭和初期にかけて重層して堆積する道路跡（京街道）、昭和初期の区画整理が行われるまで調査地の北端に見られた間知積みの石垣（大正時代まさかのぼる可能性）と寝屋川の河川敷跡などを検出した（註3、4）。

なお、中近世の時期区分については、大阪本願寺が創建された明応5年（1496）から焼亡した天正8年（1580）までを「大阪本願寺期」、大阪本願寺焼亡から大阪城三ノ丸築造開始の慶長3年（1598）までを「豊臣前期」、三ノ丸築造から大阪夏ノ陣の慶長20年（1615）までを「豊臣後期」、大阪夏ノ陣以降を「徳川期」としている（註5）。



大阪市地形図



大阪実測図 明治19年（1886）

図1 調査位置図（註2の図62に今回の調査区を追加）

### 1. OSJ90-1区調査の概要

調査は、堤壩に残されていた三ノ丸石垣の中央部分南北方向に先行トレーニングを設定し、三ノ丸石垣の裏込めの堆積状況や基底面を確認した。その上で移築復元に必要なデータを記録するため、石垣の各段毎に平面図作成（写真1）と並行して、約288個の石垣石の詳細な標高や個々の寸法（高さ、幅、控長）を計測した（写真2）。そして石を慎重にレッカーより取り外した後に（写真3）、下層の調査を実施している。

なお、石垣石の撤去作業の前に、現状の写真撮影を行い、石垣前面を洗浄後、番号付け（ガムテープを石面に貼り付け油性マジックインキで記入）を行った。並行して50cmピッチで水糸を張り、復元の際の設計図とした。その後、石垣撤去施工者と密に調整し、北側に解体用足場の設置後、南側の裏込め土の調査と並行して石垣の解体作業に着手した（写真4～7）。具体的な撤去作業は東・西・中央の3つの地区に分けて東と西を交互に作業を行い、最後に断面観察用に残していた中央部分の石垣石を取り外すこととした。平成2年（1990）11月27日に開始し、平成3年（1991）1月30日に終了した。取り外した石垣石は洗浄後、上面の控え方向に墨汁で番号を記入している。

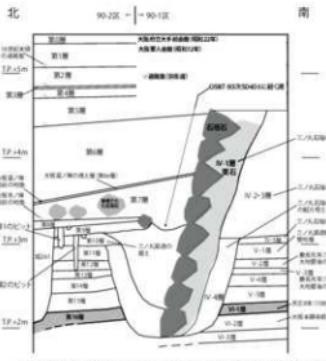
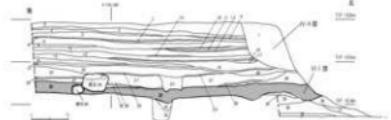


図2 OSJ90-1・2 区の基本層序図

基本層序は三ノ丸石垣の北側と南側では、豊臣後期以降の堆積状況が異なることが予想されたため、OSJ90-2区の層序名をアラビア数字ではなく、ローマ数字のI～VI層と呼称し、I層（表土層、昭和以降）、II層（江戸時代～戦前）、III層（江戸時代）、IV層（豊臣後期）、V層（豊臣前期～後期）、VI層（大坂本願寺期）とした（図2・3、写真8）。第1次調査で江戸時代以前の遺構については調査が終了しているため、調査はIV層から開始している。

IV層：三ノ丸石垣建築による盛土及び整地土で、IV-1～5層に分けられる。IV-1層は三ノ丸石垣の栗石で層厚45～60cmをかる。IV-2・3層は三



1. 107.53 モルタル・粘土・シルトブロック ・砂利充填物 IV-2	20. 107.51 オリーブ岩、粘土・シルトブロック ・砂利充填物 IV-2
2. 107.50 オリーブ岩、粘土・シルトブロック ・砂利充填物 IV-2	21. 107.47 砂利、粘土・シルト ・砂利充填物 IV-2
3. 9.53 47.オリーブ岩、粘土・シルト ・砂利充填物 IV-2	22. 107.01 砂利充填物、粘土・シルト ・砂利充填物 IV-2
4. 9.53 47.モルタル・シルト ・砂利充填物 IV-2	23. 107.00 砂利充填物、粘土・シルト ・砂利充填物 IV-2
5. 107.52 オリーブ岩・粘土・シルト ・砂利充填物 IV-2	24. 107.00 砂利充填物、粘土・シルト ・砂利充填物 IV-2
6. 9.53 31.モルタル・シルト ・砂利充填物 IV-2	25. 107.00 砂利充填物
7. 2.79 52.砂利充填物、粘土・シルト ・砂利充填物 IV-2	26. 107.92 砂利充填物、粘土・シルト ・砂利充填物 IV-2
8. 2.79 52.モルタル・シルト ・砂利充填物 IV-2	27. 107.92 砂利充填物、粘土・シルト ・砂利充填物 IV-2
9. 2.79 63.モルタル・粘土 ・砂利充填物 IV-2	28. 107.92 砂利充填物、粘土・シルト ・砂利充填物 IV-2
10. 9.20 砂利充填物 IV-2	29. 107.92 砂利充填物、粘土・シルト ・砂利充填物 IV-2
11. 2.79 42.砂利充填物、粘土・シルト ・砂利充填物 IV-2	30. 107.92 砂利充填物、粘土・シルト ・砂利充填物 IV-2
12. 9.41 砂利充填物、粘土・シルト ・砂利充填物 IV-2	31. 107.92 砂利充填物、粘土・シルト ・砂利充填物 IV-2
13. 107.62 オリーブ岩、粘土・シルト ・砂利充填物 IV-2	32. 107.92 砂利充填物、粘土・シルト ・砂利充填物 IV-2
14. 107.47 砂利充填物、粘土・シルト ・砂利充填物 IV-2	33. 107.92 砂利充填物、粘土・シルト ・砂利充填物 IV-2
15. 107.62 オリーブ岩、粘土・シルト ・砂利充填物 IV-2	34. 107.92 砂利充填物、粘土・シルト ・砂利充填物 IV-2
16. 107.47 砂利充填物、粘土・シルト ・砂利充填物 IV-2	35. 107.92 砂利充填物、粘土・シルト ・砂利充填物 IV-2
17. 107.47 砂利充填物、粘土・シルト ・砂利充填物 IV-2	36. 107.92 オリーブ岩、粘土・シルト ・砂利充填物 IV-2
18. 2.79 53.砂利充填物、粘土・シルト ・砂利充填物 IV-2	37. 107.92 砂利充填物、粘土・シルト ・砂利充填物 IV-2
19. 2.79 72.砂利充填物、粘土・シルト ・砂利充填物 IV-2	38. 107.92 砂利充填物、粘土・シルト ・砂利充填物 IV-2

図3 OSJ90-1 区の東側 P ライン沿い土層断面

ノ丸石垣の裏込土で、層厚は約 1.15m である。IV-4 層は三ノ丸石垣の根石部分の掘方埋土で、中央部においては栗石で充填され、IV-4～5 層の堆積はほとんど認められなかった。IV-5 層（標高 T.P.+2.8～3.1m）は層厚約 20cm をかり、三ノ丸石垣築造の施工面として、上面の約 1cm 前後の層は堅固に突き固められており、三ノ丸石垣の掘方を検出している。東側では轍の痕跡を確認し、石垣石を運搬するための荷台の車輪跡と考えられた。層中より備前焼（播鉢・鉢・壺・壺）、丹波焼大平鉢、青花、青磁、白磁、不明陶器、瀬戸美濃焼（鉄釉播鉢・碗・皿、灰釉皿）、李朝瓶、犬形土製品、櫛・瓦、銅錢、木筒等が出土している。

三ノ丸石垣は慶長 4 年（1599）に築造された三ノ丸の北外郭をめぐる防御施設（註 6）で、慶長 19 年（1614）の大坂冬ノ陣の講和後に上部が破壊され、埋没していた。現存高は根石部分を含めると最大で高さ 3.3m（8 段）、平均して 2～3m 前後で、東西約 21m にわたって石垣を検出した（図 4・5、写真 9～13）。石垣の掘方は西端で、南側へ大きく入り込んでいく状況から、西端で L 字形に屈曲して、南側へ伸びる可能性が考えられる（図 6）。第 1 次調査（OSJ89 区）では三ノ丸石垣の前面（大坂冬ノ陣直前の地表面）には破壊された石材（石垣石・栗石）が転がっており（写真 14）、これを加えると築造当初は高さ 5m 以上と推定される。また、裾部には排水を目的とした配石溝を巡らせており（写真 15）。下の 2～3 段分の石垣石は幅約 3m、深さ約 0.6m の掘方を設け、地表下に根石状に埋められていた。基底面の高さは東端では標高 T.P.+2.37m、中央部で T.P.+1.85m、西端では T.P.+2.15m と西側が低くなる。中央部で低くなっているのは下の層に存在する遺構の影響で沈んでいるためと考えられる。石垣の施工単位については石垣石の段数の違いから少なくとも 4 単位あると推定された。

石垣の方位は N-86.2°-E である。石垣は六甲山系・生駒山系の花崗岩の自然石（割石を少量含む）を用いる「野面積」（いのめう）という積み方で、約 288 個の石垣石の大きさは最大で幅 160cm、最小で幅 12cm、平均して幅 46cm、高さ 35cm、長さ 58cm で、1 m<sup>2</sup>あたり使用個数は 4～6 個である。間詰石はよく残っており、中には間詰石を石垣石として利用している例（仮に支石と呼ぶ）も認められた。石垣の勾配は約 5 分 5 厘～5 分 7 厘（約 65～67 度）である。注目される点は、石の位置が人の目線の高さ（約 1.5m）になる石垣の垂直方向の中ほどに幅 1m を超える大きな石（837・939・1001）を使用している。石垣の壮大さを強調し、威圧感を与えるための演出と考えられる。栗石は幅 29～84cm で、栗石幅と石垣石の控えの長さがほ

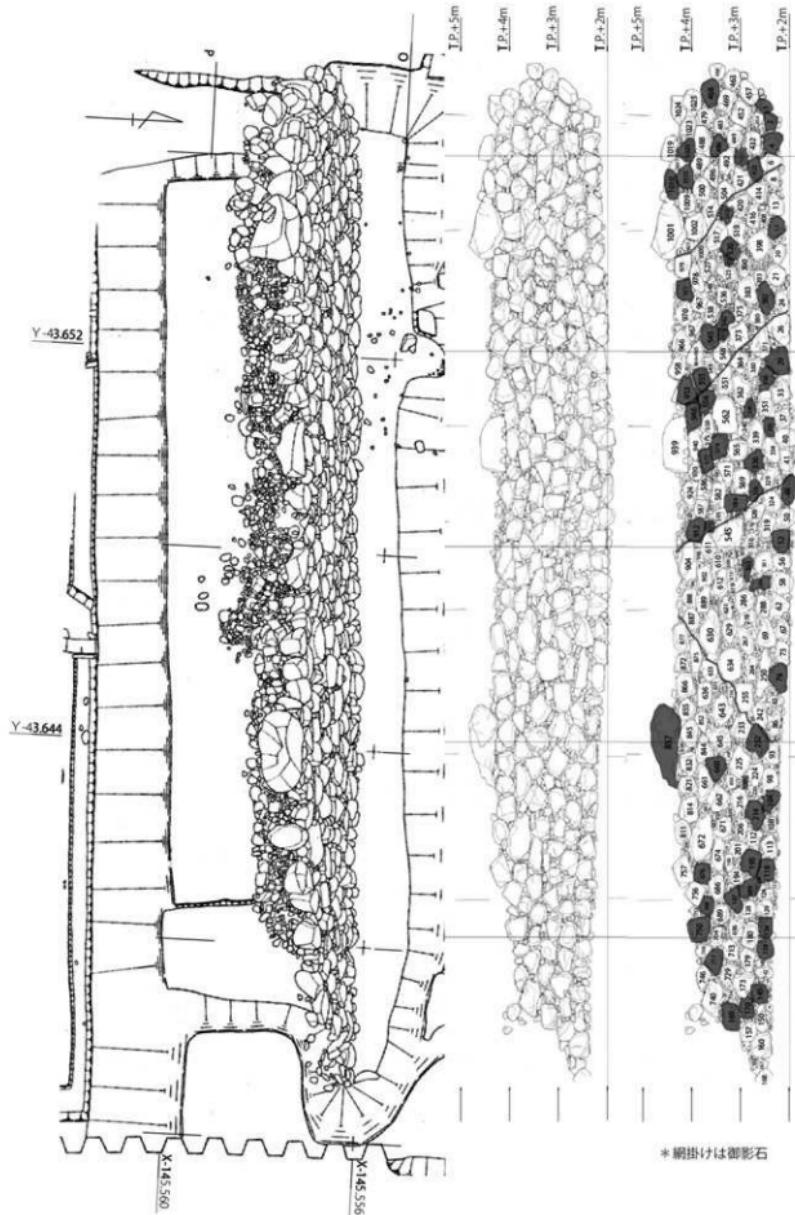


図4 OSJ90-1区 三ノ丸石垣の平面図、正面図 根石部分を含む(1/100)

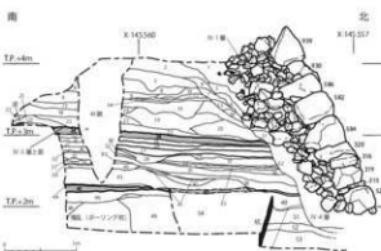


図5 OSJ90-1区 三ノ丸石垣中央部の側面及び断面図

1. 1990年発掘調査、昭和15~16年(?)頃の構造層 [V-1層]  
2. 黒色粘質土  
3. 砂利・砂利土  
4. 1990年V-2層  
5. 1990年V-3層  
6. 1990年V-4層  
7. 1990年V-5層  
8. 1990年V-6層  
9. 1990年V-7層  
10. 1990年V-8層  
11. 1990年V-9層  
12. 1990年V-10層  
13. 1990年V-11層  
14. 1990年V-12層  
15. 1990年V-13層  
16. 1990年V-14層  
17. 1990年V-15層  
18. 1990年V-16層  
19. 1990年V-17層  
20. 1990年V-18層  
21. 1990年V-19層  
22. 1990年V-20層  
23. 1990年V-21層  
24. 1990年V-22層  
25. 1990年V-23層

TP:4m  
TP:2m  
北

ば同じになり、根石付近より天端の方が広く、玉石と割石状のものが同程度使用されている(註7)。また、三ノ丸石垣の表面で確認されていた5点の石垣石(73・98・371・457・519)の墨書以外に、解体中に新たに5点の石垣石(112・267・360・454・740)の上面、側面で「大」?と書かれた墨書が確認された(写真16)。

なお、この三ノ丸石垣は、平成6年(1994)に文化財の活用として、ドーンセンター竣工と同時にドーンセンターの北側を区画するような形で、原位置より北東に約21mの所で、地上に2.2mほどかさ上げし、検出された姿(大阪冬ノ陣の講和後に上部が破壊された状態)に移築復元されている(写真17・18)。

V層: 豊臣期の堆積層で、V-1~5層に細分され、V-1層は豊臣後期、V-2~5層は豊臣前期。

V-1層: 黒色粘質土(下位で粗粒砂がプロック状に堆積)で、層厚は5~10cmである。標高TP.2.99m前後で、三ノ丸築造開始直前までの整地層で、豊臣前期の屋敷地を覆うように堆積している。上面及び下面に瓦片を敷いている(写真19)。層中より白磁、青花、赤絵、李朝、瀬戸美濃焼(鉄釉香炉、灰釉皿、天目碗・筒形・皿)、備前焼、丹波焼大平鉢、信楽焼(搖鉢・鉢)、土師質土器、瓦質土器、犬形土製品、硯、漆器椀、箸、木簡、シカ前肢骨、魚、貝殻等が出土している。

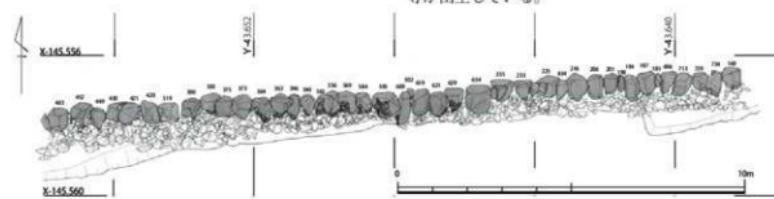


図6 OSJ90-1区 三ノ丸石垣の施工面での平面図

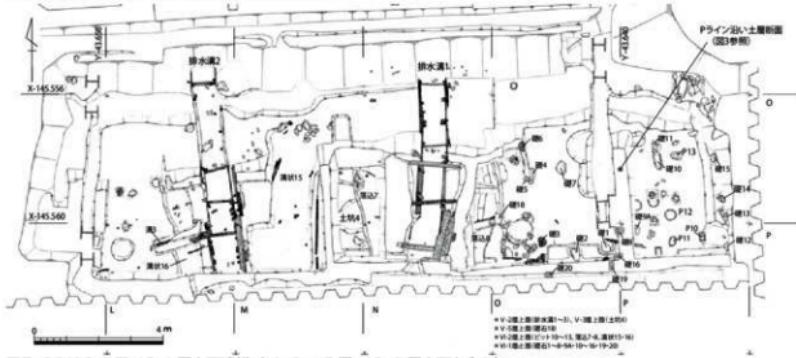


図7 OSJ90-1区 VI-1層上面遺構(V-2~5層、VI-2層上面も含む)

V-2層：オリーブ灰色～暗青灰色土層で、層厚は10～15cmである。標高T.P.+2.86m前後で、第1次調査から、慶長元年（1596）の慶長大地震後の整地土と考えられている。層中より白磁、青花、瀬戸美濃焼（鉄釉碗・皿、灰釉皿）、備前焼（瓶・壺・甕・擂鉢）、唐津焼小皿、丹波焼大平鉢、信楽焼大平鉢、瓦質土器鉢、将棋の駒等が出土している。上面において第1次調査で検出された大坂城三ノ丸築造開始前の豊臣前期の屋敷地や両側に側溝（排水溝1・2）を設けた幅約5mの道路遺構や溝3を検出している（図7、写真20）。

排水溝1・2は木組みの溝で、幅約1m、深さ約1.2mである。埋土はから白磁、青磁、青花、色絵、李朝、瀬戸美濃焼（鉄釉碗・皿・壺・灰釉皿）、備前焼（擂鉢・甕・壺・鉢・瓶）、丹波焼（擂鉢・大平鉢）、信楽焼（擂鉢）、土師質土器（鍋・皿・甕・蓋）、瓦質土器（鉢）、硯、木製品（漆器椀、しゃもじ、傘の軸、曲物底板）、金箔瓦、瓦等が出土している。

V-3層：オリーブ灰色土層で、層厚は5～10cmである。標高T.P.+2.7m前後で、上面はV-4層同様、豊臣前期（1583～1598年）の屋敷地で、V-3層に相当する道路面において土坑4を検出している（図7）。層中より白磁、青花、瀬戸美濃焼（鉄釉碗・皿・壺・灰釉皿）、軟質施釉陶器、備前焼（擂鉢・甕・壺・鉢）、信楽焼（甕）、土師質土器（皿・甕・鉢）、破風（屋根の切妻にある合掌形の装飾板で、長さ1.2mをはかる）。V-3層相当の道路面より出土：写真21）、曲物底板、ヘラ状木製品、下駄、炭団、骨角製品、貝殻等が出土している。

土坑4はゴミ穴で、径1.5×1.6m、深さ0.63mをはかり、坑中より青磁、白磁、青花、瀬戸美濃焼、備前焼、

土師質土器、錢貨、木製品（将棋・下駄・木簡・漆器・栓・櫛・箸）、銅製品、鐵製品（鉄釘・鉄針・刀子・小札・鉄滓）、瓦、魚類、ネズミ、種子等が出土している。

V-4層：オリーブ灰色～黒灰色土層で、層厚は15cm前後である。標高T.P.+2.6～2.65mで、上面は、豊臣前期（1583～1598年）の屋敷地である。V-2層上面で検出した排水溝1・2はこの面で掘削される（図7）。OSJ90-2区では第14層に対応し、礎石、井戸、土坑、ピットなどを検出している。層中より青磁、白磁、青花、李朝、瀬戸美濃焼（鉄釉碗・皿・壺・灰釉皿）、備前焼（擂鉢・甕・壺・鉢）、丹波焼（大平鉢・擂鉢）、信楽焼擂鉢、土師質土器（皿・甕・壺・羽釜）、瓦質土器（鉢・羽釜）、灯明皿受台、木簡、金箔瓦、弥生土器等が出土している。

V-5層：灰色～オリーブ灰色土層で、層厚は25cm前後である。標高T.P.+2.4～2.5mである。大坂本願寺消失後の整地土と考えられ、上面で落込や礎石等を検出している（図7）。層中より曲物底板等が出土している。

VI層：大坂本願寺期以前の堆積層で、VI-1～3層まで確認している。VI-1層は天正8年（1580）の焼土層（10YR17/1黒色炭屑）で、層厚12～20cmをはかり、標高はT.P.+2.0～2.3mである。層中より瀬戸美濃焼、備前焼擂鉢、土師質皿、包丁、鐵製鎌、鋸、切羽、飾り金具、毛抜き、錢貨、木綿、轟石、硯等が出土している。上面で礎石1～16・19・20、溝状遺構16を検出している（図7・8、写真22）。礎石は平面プランの把握はできなかった。溝状遺構16からは炭團が出土している。礎石の中には石臼を転用したもの（礎石3・6）もある。VI-2層（黄灰色～緑灰色砂質土）は大坂本願寺期の整地層で、層厚25cmを

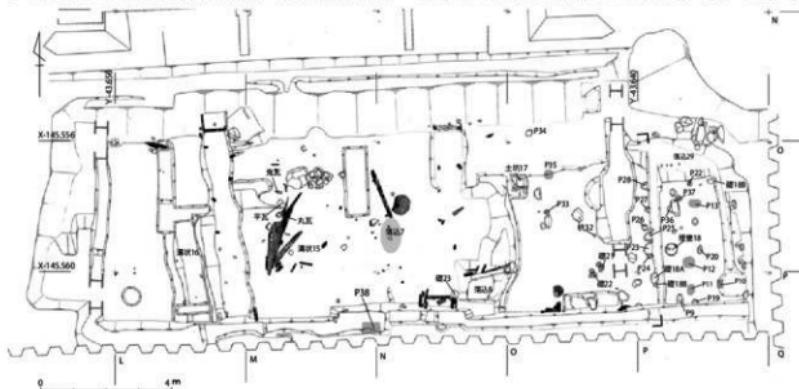


図8 OSJ90-1区 VI-1～2層上面遺構

ばかり、標高はT.P.+2.15～2.2mである。上面でビット群、土坑17、埋甕20、礎石18B・21・22、落込7・8、溝状遺構15・16を検出している（図7・8、写真22・23）。層中より備前焼播鉢・徳利・銅製品、笄・漆器椀・側板・鬼瓦等が出土している。VI-3層は灰白色砂質土層で、層厚5～15cmをはかり、標高はT.P.+1.9～2.0mである。層中から漆器椀が出土している。

## 2. OSJ90-2区調査の概要

調査地は、明治19年（1886）の『大阪実測図』によると、東側の京橋南詰めから西側の天溝橋南詰め方面に延びる京街道の一画に位置し、調査区内の北端は寝屋川の南岸となる斜面として描かれている（図1下）。現在、この区間の京街道は昭和2～7年（1927～1932）に実施された寝屋川付近都市計画事業によって、寝屋川が付け替えられ、旧流路の埋め立てにより、調査地の北側へ道幅を縮小して新たに造り直されている（図1上）。

調査によって、大坂本願寺期から近代までの遺構を検出し、第0～15層の堆積層を確認している。第6層はOSJ90-1区のⅢ層、第7層～10層はⅣ層、第11～14層はV層、第16層はVI層に対応する。近世から昭和初期の絵図・地図によると、調査区の北半部は一貫して、道路遺構（京・大阪を結ぶ幹道：京街道）として、南側は町屋や空き地として利用されている。図9は調査区西側（Tライン：Y=43.624m）での基本土層である。

第0層：昭和20年（1945）から大阪府立大手前会館（戦後に大阪軍人会館を改築したもので、昭和22年（1947）に開館）建設時までの堆積土で、電気配管溝、水道管や廁の基礎坑・溝等を検出している（図10）。上面の標高はT.P.+5.4～5.45m前後で、層厚は約10cm前後である。

第1層：層厚10～22cmをはかり、表層約10cmは大阪軍人会館建設（昭和12年（1935）7月建設）後に盛った整地土である。調査区の中央部から南北部の下層では道路面を検出した（近代～昭和初期の京街道で幅約6m）。上面に径1～2cmの礎が敷かれたもので、表面の土層は固く締まっている。なお、北端は昭和2～7年（1927～32）の大阪市の寝屋川付近都市計画事業によって埋め立てられた整地層が覆う。この整地層を除去する東西方向の間隔積みの石垣を検出した（図10）。昭和3年（1928）の航空写真に見られ、昭和17年（1942）の航空写真では埋まっていることから大正時代にさかのぼる石垣と考えられる（註8）。間隔積みの石垣は東西方向に長さ約23mを

検出し、高さは上部が削平されているものの残りの良い西側で2.6m（9段分）で、方位はN-81.2°-Eである。基底面は東から西へ向かって4度傾斜し、北側は寝屋川の河川敷に続く。近代～昭和初期。

第2層：黄色粘土で、上面は玉砂利を敷きつめており、1～2mm前後の灰色極細粒砂によっておおわれる（道路面）。道路面及び層中より18世紀末頃の陶磁器が出土している。層厚は20～25cmである。徳川期。

第3層：層厚は約4～5cm前後である。上面は第2層同様に1～2mm前後の灰色極細粒砂によっておおわれている（道路面）。層中より陶磁器、青磁、白磁、瀬戸美濃焼、唐津焼、備前焼、丹波焼、信楽焼、土師質土器、瓦質土器、染付、砥石、鉄釘、小刀、寛永通宝、瓦等が出土している。徳川期。



図9 OSJ90-2区 西側Tライン土層柱状図

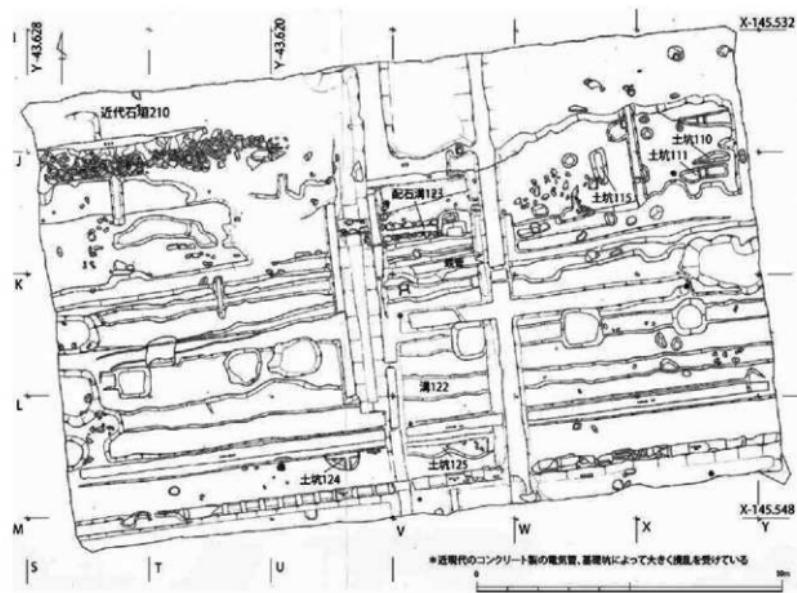


図10 OSJ90-2区 第4層上面造構

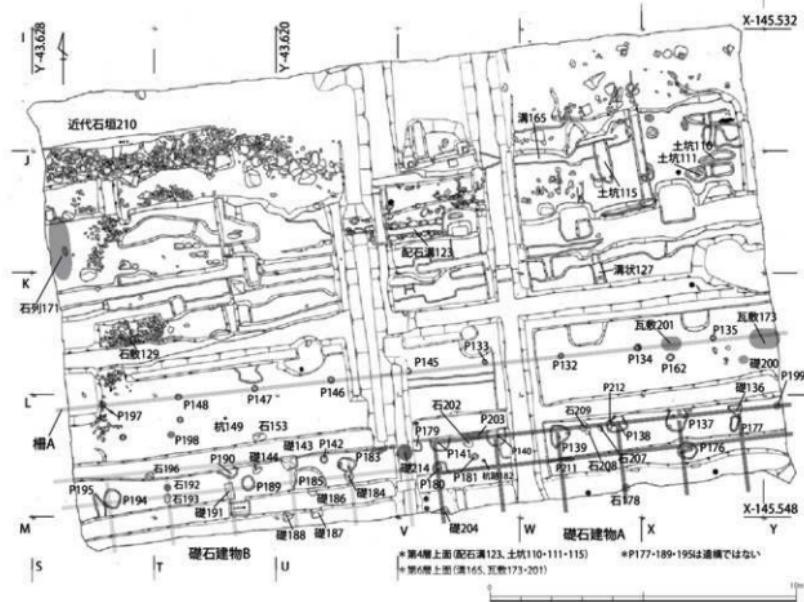


図11 OSJ90-2区 第5層上面遺構（一部、第4層および第6層上面の遺構も含む）

第4層：青灰～明褐色シルト層の整地層である。層厚約10cmで、上位は厚さ1cm前後の白色砂層が覆う。上面の標高はT.P.4.7～4.78m。上面で溝122、配石溝123、土坑110・111・115・124・125、中央部から北側は道路面（京街道）となっている（図10）。層中より陶器磁、青磁、白磁、青白磁、青花、瀬戸美濃焼鉄釉碗、唐津焼、高取焼、志野焼、備前焼、丹波焼、信楽焼、土師質鍋・甕、瓦質火灯の蓋、染付、硯、銭貨、鉄釘、貝、瓦等が出土している。徳川期。

第5層：江戸時代初期の整地土（1620年頃）である。層厚10～50cmで、中央部から北半部についてはa～dの4つに分けられ、いずれも上面に小礫が認められた。標高はT.P. 4.6～4.7m前後である。上面で礎石建物A・B、柵A、溝状遺構127、石列遺構171、石敷遺構129、礎石144・186・187・200、ピット142・162・179・181・189・199・203、石153・178・196・198・202・207～209・212、杭跡149・182、暗渠174・175を検出している（図11、写真24）。柵Aとしたピット132～135・145～148・197は礎石建物A（礎石136・204、ピット137～141・176・180・211）及び礎石建物B（石192・193、礎石143・184・188・191・214、ピット183・185・190・194）に伴う底のピットと考えられる。礎石建物A・Bは、調査区北半部を東西に

走る江戸時代の京街道に面した町屋等の建物跡の可能性が高いと考えられる（註2）。礎石建物 A・B は桁行 6 間以上（1 間は 2m 間隔）× 柱間 2 間以上（1 間は 1m 前後）である。なお、庇のピットは第 5a 層上面で検出されたもので、主軸方位は N-83.8°-E である。7 間以上（1 間はほぼ 2.5m 間隔）で、ピットの径は 16.3 ~ 21.7cm で、平均 18.5cm、深さは 10 ~ 38cm で、平均 26.5cm である。第 5c ~ d 層上面では石列構造 171 を確認している。層中より陶器、青磁、白磁、青花、李朝、瀬戸美濃焼、唐津焼、高取焼、志野焼、備前焼、丹波焼、信楽焼、土師質土器、瓦質土器、染付、硯、砥石、フイゴの羽口、錢貨、鉄釘、サザエ貝、瓦等が出土している。徳川期。

第6層：黄褐～緑灰色粘土混じり砂質土で、層厚約0.8～1.0 mをはかり、全体に柔らかく、縮まりのない土で、a～eの5つに分けられる。調査区中央の上面の標高TP+4.05～4.6 mで、北側に傾斜している。三ノ丸北辺部にある東隣接地の調査（0583-15次、0587-93次、0888-78次）から大坂夏ノ陣（1615年）後の整地層と考えられている（註2・10）。上面で溝165、瓦敷173・201（砂利と同じ用途で敷いている）を検出している（図11）。上面（写真25）は、1～2mm前後のにぶい黄色中粒砂～細粒砂層による礫敷き面（小さな瓦片も多く含む）となり、よく縮まっている（京街道）。



図12 OSJ90-2区 第7層上面遺構（一部、第5層上面の遺構も含む）

層より青磁、白磁、青花、ベトナム陶器、李朝、瀬戸美濃焼（鉄釉天目碗・筒形碗）、唐津焼（瓶・碗）、志野焼（皿・向付）、織部焼、高取焼、備前焼、丹波焼、信楽焼、土師質土器、瓦質土器、焼塙壺、硯（「天正十九年」の紀年鉛）、砥石、茶臼、石臼、金箔瓦等が出土している。下位にあたる第6e層は焼土層で、大坂夏ノ陣による焼土層と考えられ、層中より白磁、青花、ベトナム陶器、瀬戸美濃焼、唐津焼、志野焼、織部焼、備前焼、丹波焼、信楽焼、土師質土器、瓦質土器、漆器櫈、硯、石臼、錢貨、金箔瓦、瓦等が出土している。豊臣後期。

第7層：緑灰～明褐色中粒砂で、層厚約4～30cmで、上面は大坂夏ノ陣の被災面で、焼土層（第6e層）に覆われている。標高T.P.+3.24～3.78mで、北側に傾斜し、層中に破壊された三ノ丸石垣の石垣石や栗石を含む。OS88-78次調査地の第5層に対応する。上面で、瓦・陶磁器が集中して出土している。第7層は大坂冬ノ陣（1615年）後の整地層と考えられ、上面の遺構は大坂冬ノ陣の後に設けられた遺構で、配石溝215・219・230（268）、土坑216・218・222・234・235・256・257・260、石列217・228、石垣状遺構225・232・239、瓦瀧220・221・223・229・240・241、土器群224・226・238・284、溝231・249、配石233（第7層中）、ピット250

～255・258、杭跡 262・293を検出している(図12・13、写真26)。層中より白磁、青花、瀬戸美濃焼、唐津焼、絵志野、高取焼、織部焼、備前焼鉢、丹波焼、信楽焼、土師質土器、瓦質土器、焼塙壺、下駄、漆器椀、硯、砥石、軽石、銭貨(永楽通宝)、鉄釘、鐵鎌、鐵鍋、銅製紅皿、木簡、下駄、瓦、金箔瓦などが出土している。LR区の土坑235からは織部焼、志野焼も出土している。曹臣後期。

第8層：砂・シルトの互層で、層厚22~35cmである。OS88-78次調査地の第6層に対応し、三ノ丸石垣の北に堆積する。調査区の東側で、標高はT.P.+3.5m、北及び西側で標高T.P.+3.2m前後をはかり、西および北に傾斜する。上面は道路面として利用され、大阪冬ノ陣の直前の遺構面に相当し、ピット242~246・248・259・263・264・315~317、溝274を検出している（図13）。直上には大阪冬の陣の講和によって破壊された三ノ丸石垣の盛土や石垣石や栗石が覆う。層中より白磁、青花、瀬戸美濃焼、丹波津焼、高取焼、志野焼、備前焼、丹波燒播鉢、信楽焼、土師質土器、瓦質土器、銭貨、瓦等が出土している。豊臣後期。

第9層：暗青灰色シルト質砂層で、上下二層に分けられ、層厚は10～30cmである。OS88-78次調査地の第6層に対応する。上面の標高はTP2.8～3.3m

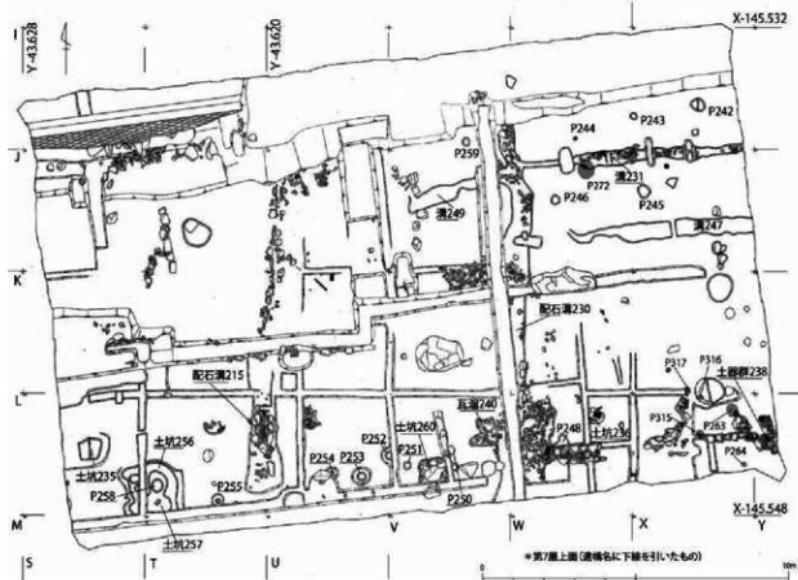


図13 OSJ90-2区 第8層上面造構（一部、第7層上面の造構も含む）

で、一部に礫敷きや瓦敷きの認められる箇所がみられた。三ノ丸石垣が築かれた後の整地土で、三ノ丸石垣の北に堆積し、上面で三ノ丸石垣に併行し、防御するような形で柱列（崩 1）やそれに伴う溝 276、堀状遺構 261（266・269）を検出している（図 14・15、写真 27・28）。溝 276 は第 10 層上面で検出された崩 2 同様に崩 1 の雨落溝と考えられる。堀状遺構 261 から和泉砂岩の五輪塔片も出土している。層中より、青磁、白磁、青花、色絵、瑠璃釉、李朝、瀬戸美濃焼香炉、津市焼、志野焼、軟質施釉陶器、漆器椀、木製蓋、木刀、物差し、下駄、土製円盤、砥石、十能、犬形土製品、銭貨、瓦等が出土している。OSJ90-1 区の IV 層に相当する。豊臣後期。

塚1の主軸方位はN-85.5°-Eで、東側でL字状に北側に屈折する。ピット271・275・277・281～283・382・383・442・585・645で構成され、ピット列の内側に溝276（雨落溝）が巡り、外側に壇状遺構261、溝269を設けている。ピットの径は40～75cmで平均約52cm、深さは39～81cmで平均約47cmをはかり、1間は約1.4mとなっている。検出面の標高は残りの良いところで、T.P.+3.08mをはかる。溝276、壇状遺構261は塚1に沿うような形で、東側でL字状に北側へ折れ曲がる。溝276は幅70cm、深さ3cmをは

かる。壠状遺構 261 は幅 6m 以上、深さ 0.7m をばかり、底の標高は TP.22.6m である。壠内から木製品（蓋・折敷の底板）等が出土している。壠 1 は何らかの理由で、下層の壠 2 を豊臣後期の短い期間に主軸方位をより三ノ丸石垣に沿うように造り替えている。

第10層：緑灰色砂層（ブロック土混じり）で、層厚10~38cmをはかる。三ノ丸の石垣構築のために盛土された整地土で、三ノ丸石垣の北側に堆積している。OS88-78次調査地の第7層に対応する。上面の標高はTP.2.98m~3.19mで、礫敷き面が広がる。包含される遺物は相対的に少ない。上面で三ノ丸石垣にはほぼ併行する形（三ノ丸石垣よりも昭和3年以前の寝屋川に沿うように主軸をやや北に振る）で、堀2やそれに伴う溝285、そして石448・449、ピット278・648・649、溝286・287を検出している（図15、写真29・30）。溝285は堀2の雨落溝と考えられる。層中より、白磁、青花、中国陶器、李朝、瀬戸美濃焼（鉄釉天目碗、灰釉丸皿）、岸崖系唐津焼皿、備前焼、丹波焼、土師質土器、瓦質土器、漆器椀、底板、下駄、砥石、石臼、錢貨、鉄釘等が出土している。OSJ90-1区の-2・3層に対応する。豊臣後期。

埠 2 の主軸方位は N-82°-E で第 9 層上面で検出した埠 1 同様に L 字状に 7 間以上 (1 間はほぼ 1.9m 間隔) で、

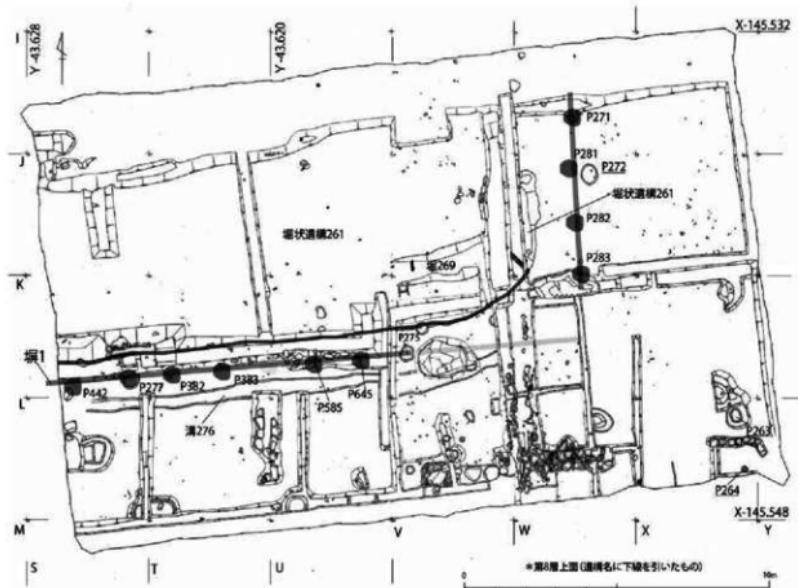


図14 OSJ90-2区 第9層上面遺構（一部、第8層上面の遺構も含む）

配置されている。ビット 297～299・310～313・384、溝 285 で構成され、ビット列の内側に溝 285（雨落ち溝）が巡っている。北西側のビット 297～299、そして溝 285 の北半は第 9 層上面で検出された埴状造構 261 によって上面を削平されていた。ビットの径は 51～86cm で平均 73cm、深さは 57～97cm で平均 77.2cm をはかる。検出面の標高は残りの良いところで、標高 TP+2.9～3.0m をはかる。溝 285 は幅 31cm、深さ 24cm である。

第11層：青灰色シルト層で、層厚5～10cmの薄い層である。三ノ丸の構築直前の整地層で、豊臣前期の屋敷地（建物群）を覆っている。OS88-78次調査地の第7a層に対応する。上面の標高はT.P.+2.7～2.82mである。層中より青磁、白磁、青花、中国陶器、ペトナム陶器、李朝、瀬戸美濃焼、津市燒、志野焼、軟質施釉陶器、備前、丹波、土師質土器、瓦質土器、弥生時代後期の底部片、漆器椀、木鉢、碁石、砥石、茶臼、錢貨、鉄釘、瓦等が出土している。OSJ90-1区のV-1層に相当する。豊臣後期。

第12層：青灰色ブロック土で、層厚3～12cmの土層で、慶長元年（1596）の慶長伏見地震後の整地土と考えられる。層内や上面では礎石建物1・2、瓦溜294、土坑295、礎石439・451・600、ピット373・

380・386・474・623、杭跡453を検出している(図15、写真30)。層中より白磁、青花、中国陶器、李朝、瀬戸美濃焼、唐津焼、備前焼、丹波焼、信楽焼、土師質土器、瓦質土器、漆器椀、下駄、扇子、砥石、銭貨、小柄、鉄釘、火箸、小札、フイゴ羽口、貝、骨、瓦等が出土している。OSJ90-1区のV-2層に相当する。豊臣前期。

調査区北東のIW区で検出したピット373は径40×32cm、深さ25cmで、底に根石を据えており、布でその根石を覆っていた。

礎石建物1(礎石322~325・327~333・335・343~346・348・388~390・566、ピット326・334・335、炉338)は西側に集石遺構340~342を伴う3間×5間の建物で、内部に炉388を設けている。礎石の上面の標高はTP+2.64~3.01m。炉338は一辺38cmの方形の粘土の枠で、枠の幅は約5cmをはかり、内側に厚さ6cmの炭灰が堆積していた(写真31)。粘土の枠はもともと木の枠で、茶室の跡跡の可能性が考えられる。

礎石建物 2 (礎石 319 ~ 321・350・352・353・358・377 ~ 379・606 ~ 608、ピット 351) の礎石の上面の標高は T.P.+2.46 ~ 3.0m。6 間 × 3 間以上の長い建物と考えられる。

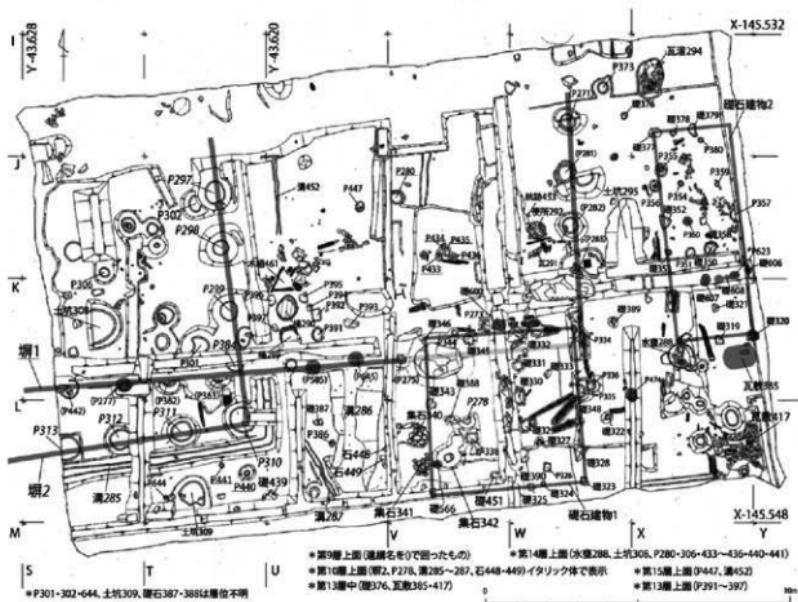


図15 OSJ90-2区 第10・12層上面遺構（一部、第8・9・13～15層上面の遺構も含む）

第13層：青灰色砂質シルト層～灰色炭混じり砂質土層。第14層同様に慶長元年（1596）の慶長伏見地震前の屋敷地と考えられる。上面で礎石 391～397（図15）、層中で礎石建物4、瓦溜め 385・417、礎石 370・374・376・577を検出している（図16、写真32）。層中より陶磁器とともに青磁、白磁、青白磁、青花、色絵、李朝、瀬戸美濃焼（鉄輪ひだ皿・天目碗・折縁皿、灰釉折縁皿・丸皿）、唐津焼、志野焼、備前焼、丹波焼、信楽焼、土師質土器皿、瓦質土器、弥生時代前期壺片、弥生時代中期壺片、木製品（漆器梶、籠、羽子板、木製蓋、下駄、木簡、曲物底板、物差し、灯明皿受台、台鉢）、わらじ、硯、砥石、土鍤、錢貨、火箸、鉄釘、鉄製鎌、小柄、小札、柄付き刀子、アワビ貝、瓦等が出土している。OSJ90-1区のV-3層に対応する。農臣前期。

礎石建物4は3間×4間で、礎石 362～365・367～369・372・375（454）・381（455）・416・456・458・555～556、ピット 557で構成され、礎石の上面の標高はTP.+2.18～2.38mをはかる（写真33）。

第14層：褐色～黄灰色砂層で、層厚30～50cmで、a～cの3つに分けられる。上面の標高はTP.+2.3～2.5mで、上面で伏見大地震以前に建てられた建物群（建物3・5・6）、礎石 347・433～436・482～

485・488・489・498～501・516・517・567・584・609・619～622、ピット 300・304・306・440・441・475～479・492・493・495・511～515・518・583・614～618・627・629・637～639・646、石 565、土坑 308・519、瓦敷 421、水甕 288、瓦燈 423、石臼 641を検出している（図16、写真32）。生活時の堆積土を第14a層としている。層中より青磁、白磁、青花、色絵、李朝、瀬戸美濃焼（鉄輪天目碗・徳利、灰釉丸皿）、唐津焼、備前焼、丹波焼、信楽焼、土師質土器皿、瓦質土器插鉢、漆器梶、灯明皿受台、下駄、柄杓、羽子板、硯、碁石、砥石、犬形土製品、瓦灯、錢貨、火箸、鉄釘、鉄製鎌先、鐵鎌、鐵錐、刀子、小柄、貝、サカナ、イノシシの骨、瓦等が出土している。OSJ90-1区のV-4層に対応する。農臣前期。

礎石建物3（礎石 414・415、ピット 410～413）の礎石の上面の標高はTP.+2.5mで、ピット 407～415は礎石抜き取り跡である。

礎石建物5（礎石 459・460・466～468・480・481・490・491・494・496・497・560・625・626・632・636）の礎石の上面の標高はTP.+2.32～2.64m。瓦溜め 385・417は土間で、水甕 288（写真33）、瓦燈 423と同様に礎石建物5に伴う可能性も

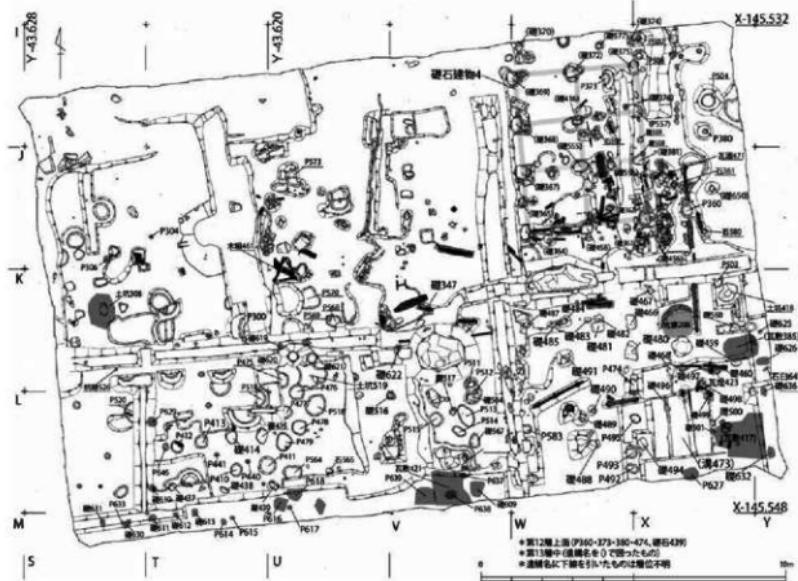


図16 OSJ90-2区 第13・14層上面遺構（一部、第12層上面の遺構も含む）

考えられる。礎石 626 には径  $13.6 \times 11.6$  cm、高さ 12.9cm の柱根が遺存しており、上部に  $5 \times 9$  cm、高さ 3cm のぼぞが認められた。

礎石建物 6（礎石 437・438・610～613・630・631、ピット 633）の礎石の上面の標高は T.P.+2.45～2.66m で、ピット 614・615・633 は礎石抜き取り跡である（写真 34）。

第 15 層：上面の標高 T.P.+1.7～2.21m をはかり、西および北へ傾斜する。上面で礎石建物 7・8、集石 422、土坑 420・530・596、礎石 462～464、石 531～538・549・551・561～563・572、ピット 303・305・307・443～445・447・503・505・506・521～525・527～529・540～543・552～554・575・576・578・586・635、溝 452 を検出している（図 17、写真 32）。層中より青花、李朝、瀬戸美濃焼、備前焼、土師質土器皿、瓦質土器、漆器椀、草鞋、下駄、曲物底板、砥石、石臼、錢貨、鉄釘、貝、瓦等が出土している。OSJ90-1 区の V・5 層に対応する。豊臣前期。

礎石建物 7（礎石 398～406）は 3 間 × 2 間で、礎石の上面の標高は T.P.+1.93～2.14m（写真 35）。集石 422、土坑 530 は礎石建物 7 に伴う遺構の可能性が考えられる（写真 36）。なお、集石 422 の南に接

して木枠に囲まれた状態で、二枚貝 3 点（標高 1.874～1.99m）が出土している（写真 37）。

礎石建物 8（礎石 509・510・539・544・545～548・590・591・593・594・605・640、ピット 595・597～599・604）は 3 間 × 5 間で、礎石の上面の標高は T.P.+1.98～2.09m（写真 33 の下）。ピット 595・597～599・604 は礎石抜き取り跡である。礎石 640 には径  $10.5 \times 13$  cm の柱根が遺存しており、上部で横木に組み合わさっていた（写真 38）。

土坑 420 は径 2.5m、深さ 0.44m をはかる大型の土坑で、埋土から土師質土器、漆碗、曲物の底板、瓦、骨片が出土している（写真 39）。

第 16 層：北西の JT・JS 区に設定した下層確認トレンチにおいて、標高 T.P.+1.42 m で礎石 571、標高 T.P.+1.215 m で礎石 643 を検出した（図 17）。層中より土師質土器、瓦等が出土している。大坂本願寺期の焼土層は確認していないが、隣接する調査地の調査成果から大坂本願寺期の層位と想定される。OSJ90-1 区の VI 層に対応する。大坂本願寺期。

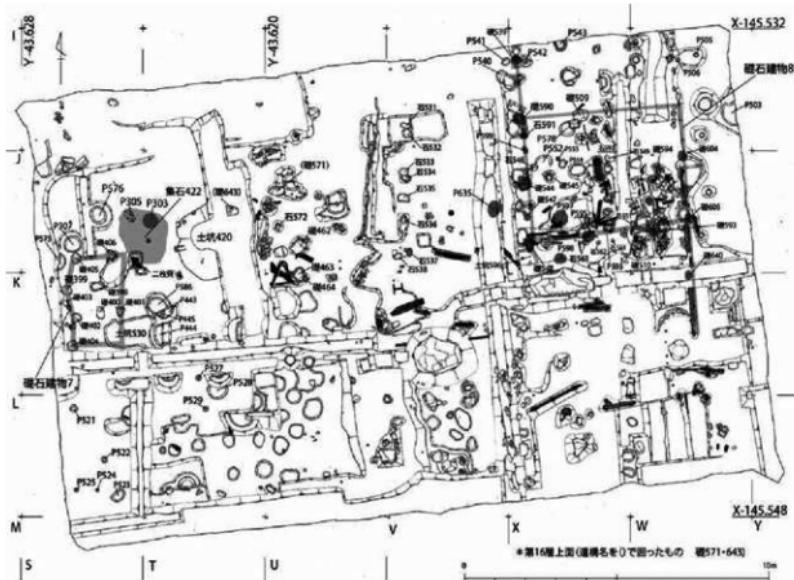


図 17 OSJ90-2 区 第 15 層上面構造（一部、第 16 層上面の遺構も含む）

### 3. OSJ90-1・2区の出土遺物（写真41～58）

出土遺物のうち主だったものを45～61ページの写真にまとめた。11、15、21、26、29、31、68～70、74～76、79～81、84、88、91、93～95、98～105、108、110、113、115～117、119、123、124、128はOSJ90-1区、1～10、12～14、16～20、22～25、27、28、30、32～67、71～73、77、78、82、83、85～87、89、90、92、96、97、106、107、109、111、112、114、118、120～122、125～127、129はOSJ90-2区から出土した。1～68の土器・陶磁器類の詳細は表1の觀察表にまとめたので参照されたい。なかでも42の備前焼甕は口径69cm、器高106cmをはかる大甕で、肩部に「参石入 捻土也」の刻跡がある。27の瓦燈（瓦灯）は灯明皿を載せる台に、釣鐘型の蓋をかぶせる瓦質の灯火器で、27は台の部分である。

69、70は骨角製品で、69は鹿角、70は獸骨でつくられている。切断された痕跡など加工跡があり、製品をめざしていたことはわかるが、用途は判然としない。

71は土製のイフゴの羽口で、第12層（慶長元年（1596）の整地土）から出土した。先端側の径は3.0cmで残存長が3.9cmを測る。72は径3.3cm、全長3.9cmの筒形をした土鍤で第13層（慶長伏見地震前の屋敷地、V-3層に対応）から、73の瓦質の円板は第9層（三ノ丸石垣築造による盛土及び整地層、IV層に対応）から出土した。

74、75は犬形の土製品で、74はV-1層、75はIV-5層から出土した。74は全長4.4cm、75は全長4.9cmを測る。76、77は碁石で、76は大きさ27.85×23.7mm、厚さ8.9mmでVI層から出土、77は大きさ29.5×23.25mm、厚さ6.8mmを計り、第11層（V-1層対応）から出土した。78は植物繊維を縄で縛った箒のような製品で第12～13層から出土、79はVI層上面の溝状遺構16から出土した箒、80は埋甕18から出土した木綿の布である。

81は石臼で建物礎石として転用されていた（礎石6）。このほかに82～85も石臼で、86は茶臼で、85、86は石垣状遺構225に転用されていた。87は五輪塔の一部で壇状遺構261から出土した。大阪夏ノ陣後の整地層（第6層、III層対応）及び大阪冬ノ陣後の整地層（第7層、IV層対応）からは硯が多く出土している。88は大阪本願寺期の焼土層（IV-1層）から出土した硯で、焼けによる変質がみとめられる。89、90は第7層から、91はOSJ90-1区排水溝2から出土した。92は「天正十九年」の銘入りで、被熱している。第6層から出土した。88及び90～92は頁岩製である。

93は側板直下の溝状遺構15（VI-2層上面）から出土した完形の隅瓦である。94～97はすべて金箔押軒丸瓦で、94は残存幅8cmでOSJ90-1区排水溝1から、95は残存幅9cmで三ノ丸石垣施工面のIV-5層から、96は残存幅9.5cmで第6層から、97は残存幅11.8mで第7層から出土した。

98～105は銅鏡（銅錢群5）で、93の隅瓦と同じ溝状遺構15から18枚がまとまって出土した。その中には、洪武通寶がもっと多く9枚あり、その他にも、景德元寶、祥符元寶、天祐通寶などの明銭・宋銭が含まれる。106～110は鉄製品で、106は鍔先、107～109は鍔先、110は包丁である。106及び109は14層（豊臣前期、V-4層対応）から107は第13層（V-3層に対応）から、108及び110はIV-1層から出土した。このほかにも本調査では、台鎧や鎧、錐などの大工道具類や毛抜き、切羽、小札、小柄、鉄、錫、釘、針、火箸など、多くの鉄製品や笄、紅皿などの銅製品が出土している。

荷札と思われる上部に切り込みのある木簡も多数出土している（111～117）。111は第13層から出土し、長さ17.41cm、最大幅2.7cm、厚さ0.56cmを測る。112は両面に文字が見える。同じく第13層から出土し、18.84cm、最大幅3.1cm、厚さ0.52cmを測る。113にも両面に文字が残る。V-1層から出土し、17.9cm、最大幅2.2cm、厚さ0.50cmを測る。114は片側が欠損しており、長さ11.92cm、残存最大幅1.24cm、厚さ0.2cmを測る。第7層から出土した。115は片側が欠損した上部のみの木簡で、文字は見えるが判読できない。残存長4.53cm、残存幅1.48cm、厚さ0.3cmを測り、IV-5層から出土した。○で囲まれた「高山」の文字が見える。116は下部の破片で、V-3層相当面で検出された土坑4から出土した。117も同じ土坑4から出土した木簡で、「十一月十日」と日付が書かれている。裏面には「油五斗の□□□□」と品物と分量がはっきり書かれている。長さ14.82cm、最大幅2.03cm、厚さ0.40cmを測る。

118～123は残存状態が極めてよい漆塗の木製椀である。118は黒漆で塗られ、内外面ともに朱で植物の絵が描かれている。底部に直径5.7cm、高さ1.4cmの高台が付き、厚さは0.5cmを測る。第9層から出土した。119は内面が黒漆の上に赤漆で塗られ、外表面が黒漆の上に赤漆で模様が描かれた椀。底部の高台の内側に「上」のような記号が書かれている。高台径7.8cm、器高5.2cmを測り、OSJ90-1区排水溝1から出土した。120は内面が黒漆の上に赤漆、外表面が黒漆で塗られ、高台径6.5cm、器高4.6cmを測る。第14層上面から出土した。121は内面が黒漆の上か

ら茶漆で塗られ、外面が黒漆で塗られた上に赤漆で模様が描かれている。第13層から出土したもので、外側の高さ3cm、直径7.8cmと高い高台をもつ。122は内面が赤漆、外面が黒漆で塗られた椀で、高台の高さが外側で2.4cm、器高9.0cmと背の高い椀である。厚みは0.8cmを測る。第12層上面から出土した。123は内外面ともに黒漆塗の椀で、内部が鉄分を帯びて赤茶色に変色している。底部の高台径は7.5cmを測る破片で、VI-2層から出土した。

124、125はともに完形の木製下駄である。124は116の木簡と同じ土坑4から出土し、全長21.2cmを測る。125は、全長19.7cm、幅9.5cm、で第10層（三ノ丸石垣構築のための整地層）から出土した。このほかにも本調査では、破風、曲物底板、羽子板、柄灼、しゃもじ、傘の軸、将棋の駒、物差し、木刀、栓、櫛、箸、扇子、木鍾、灯明皿受け台、木製蓋などの木製品が出土している。

この調査では動物遺体も出土している。126、127の貝は、アカニシ（*Rapana venosa*）と呼ばれる海水に生息する巻貝の一種で食用に適する。128はV-1層から出土した二ホンジカの上肢骨で、写真33の上段左から上腕骨、尺骨、桡骨である。129はアカガイ（*Anadara broughtonii*）で、大きさは8～9cm程度、第15層上面で検出した集石422から出土した（写真38）。内湾の潮間帯や浅海の砂泥底に浅く潜って生息する二枚貝の一種で、こちらも食用に適する。

## まとめ

### 大坂本願寺期

- OSJ90-1区ではVI-2層上面でピット群、土坑、埋甕、礎石、落込み、溝状遺構を検出している。大坂本願寺消失時の焼土層（VI-1層）や整地層（VI-2～3層）からは陶磁器や鉄製品（鎌、鋸、切羽、飾り金具、毛抜き、錢貨）、木綿などの生活用具が出土した。

### 豊臣前期

- 隣接する調査地（第1次調査区OSJ89区）で検出された道路側溝をともなう屋敷地（OSJ90-1区V-2～4層上面、OSJ90-2区第12層～第14層上面）や道路側溝をともなう屋敷地が整備される以前の土坑・礎石建物・柱穴遺構（OSJ90-1区VI-1層上面V-5層上面、OSJ90-2区第15層上面）を検出している。

### 豊臣後期

- 慶長4年（1599）に三ノ丸築造工事によって築かれた三ノ丸石垣を東西約21mにわたって検出している。また、三ノ丸石垣構築に伴う盛土および整地土（OSJ90-1区IV層・V-1層、OSJ90-2区第10・11層）や三ノ丸石垣に併行する形で、その前面に

新旧2時期（第9層及び第10層上面）の柱列と堀を検出している。柱列のすぐ南側には雨落溝と考えられる小溝を伴うことや堀に落ち込んだ瓦や漆喰等から堀と考えられ、三ノ丸の石垣の北側を堀めぐる二重の構造を示すことが明らかとなった。またいずれの堀も東側で折れ曲がり北に延びていることから、この地点が三ノ丸内への進入路と推定している。

- 第8層上面は大坂冬ノ陣直前の面で、第8層を覆う第7層には、破壊された三ノ丸石垣の石垣石や陶磁器が出土した。第7層上面を覆う焼土層（第6e層）は、大阪市文化財協会による隣接地の調査成果などから、慶長20年（1615）の大坂夏ノ陣で被災した地面と考えられる。
- 慶長4年（1599）に築造された三ノ丸石垣が、慶長19年（1614）の冬ノ陣後に破壊されるまでの変遷については、以下のように推定することができる。三ノ丸築造のため、豊臣前期の屋敷地を破却し、その跡地を覆うようにV-1層（第11層）で整地する。次に表面を固く叩き締め、施工面（IV-5層）とし、幅約3m、深さ約0.65mの掘方（IV-4層）を掘削し、石垣の根石2～3段分を据える。南側については順次石垣石を積みながら栗石（IV-1層）、裏込土（IV-2・3層）を積み上げ、石垣の北側についても盛土（第10層）を行い、三ノ丸石垣を完成させる。その後、三ノ丸石垣の北側にさらなる防衛施設として第10層上面に堀2を設ける。その後、第9層によって整地され、その上面に、堀2の代わりに堀1と堀をもうけ、石垣の北側に接して石垣の堀の排水を目的とした配石溝を巡らす。その後、堀を壊して更地（第8層で整地）とし、慶長19年（1614）の冬ノ陣後に破壊される。

### 徳川初期

- 盛土（第5層）が行われ、第5層上面では庇を伴う礎石建物やその北側に玉砂利を敷き始めた道路遺構（京街道）を検出している。
- 江戸時代から昭和初期には、OSJ90-2区の北側において重層して堆積する道路跡（京街道）、昭和初期の区画整理が行われるまで調査地の北端に見られた間知積みの石垣（大正時代まさかのぼる可能性）と寝屋川の河川敷跡などを検出した（第2～4層）。

（中西裕見子、宮崎泰史（元大阪府教育委員会））

表1 資料一覧

写真	no.	遺物の種類	造形・部位	調査	地区	登録番号	口径 〔直径〕	高さ
41	1	土器質品	第13層	90-2	A04JU	2858	12.7cm	2cm
41	2	土器質品	層290	90-2	A04KU	2503	6.7cm	1.8cm 図15(曹臣前頭相)
41	3	土器質品	第14層	90-2	A04LV	3333	7.7cm	1.7cm 図16(曹臣前頭相)
41	4	土器質品	土坑418	90-2	A04KX	3400	10cm	2.05cm 図16(曹臣前頭相)
41	5	土器質品	第14a層	90-2	A04LT	3499	7.9cm	2.6cm 黒褐色砂質シルト
41	6	土器質品	土坑418	90-2	A04MX	3091	10.15cm	2.2cm 図16(曹臣前頭相)
41	7	土器質品	組合式積 261 下層(陶灰色砂質シルト)	90-2	A04JU	1999	12.15cm	2.1cm 図16(曹臣後頭)
41	8	土器質品	第9層(折腰シルト)	90-2	A04JU	1885	11.8cm	2.4cm
41	9	遺物美術品	第11～15層(青銅・陶土)	90-2	傳土	2474	8.4cm	2.2cm
41	10	遺物美術品	第14層	90-2	A04LW	2873	10.2cm	3cm
41	11	遺物美術品	N-1層	90-1	A04PP	3329	9.3cm	2.3cm 南あげ
41	12	遺物美術品	第13層(下位)	90-2	A04MT	3400	11.6cm	2.35cm 青灰色シルト質粘土。あせ22
42	13	遺物美術品	第14a層	90-2	A04MS	3549	7cm	3.5cm
42	14	遺物美術品	第15層	90-2	A04IX	3550	6.2cm	3cm
42	15	遺物美術品	丸瓶真1	90-1	A04PN	2673	11.5cm	6.25cm 図7(曹臣前頭) 丸瓶
42	16	唐津焼	第9層(陶灰色砂質シルト)	90-2	A04KV	1900	10.4cm	5.9cm
42	17	唐津焼	第7層	90-2	A04LV	1324	上 3.5cm、下 6.2cm	10.3cm 離部元星雲架入
42	18	唐津焼	第13層	90-2	A04LU	3551	10.2cm	1.4cm
42	19	唐津焼	第11～12層	90-2	A04LU	3370	—	—
43	20	備前焼	瓦窓217	90-2	—	—	—	あせ22、黒目(十二・一・七)
43	21	備前焼	瓦窓21	90-1	—	—	—	図15(曹臣前頭)
43	22	備前焼	土器235	90-2	A04LS	1471	—	—
43	23	御吉津釉陶器	第11層	90-2	A04JX	2254+2679	—	—
43	24	始野焼	第7層(6-d層下)	90-2	A04LV	1023	—	—
43	25	始野焼	第7層	90-2	—	—	—	—
44	26	瓦質土質品	壁模18	90-1	A04OP	3309	36cm	—
44	27	瓦質土質品	瓦模42	90-2	A04KX	3123	14.3cm	18.1cm 図16(曹臣前頭)
44	28	土器・器	便器292	90-2	A04JW	2867	—	—
44	29	唐津焼	N-1層	90-1	A04PP	2217	24.3cm	9.5cm
44	30	唐津焼	第14層	90-2	A04JX	3239	27cm	10.5cm
44	31	唐津焼	N-2層もしくは第7層	90-1	A04ON	3134	32cm	14.4cm
45	32	季朝陶器	第6c-d層	90-2	A04LW	997	—	—
45	33	季朝陶器	第9層及び組合式積	90-2	A04US	2999	—	口縁部破片
45	34	季朝陶器	第9層	90-2	A04JT	2113	—	口縁部破片
45	35	季朝陶器	第9層	90-2	A04KT	1806	—	—
45	36	季朝陶器	第6b層	90-2	A04KV	949	—	—
45	37	季朝陶器	第9層	90-2	A04KU	1826	—	高台
45	38	季朝陶器	第6b層	90-2	A04KX	931	—	高台
45	39	季朝陶器	第11層	90-2	A04LW	2856	16.6cm(6.0cm)	4.15cm
45	40	季朝陶器	第11層	90-2	A04LU	3320	—	高台
45	41	季朝陶器	第5層	90-2	A04KT	643	—	後山初期 高台
46	42	備前焼	水盤268	90-2	A04KX	2729	—	「參石入 竹土」(正大) 図15(曹臣前頭) 高台
47	43	備前焼	水盤	90-2	A04HX	2729	—	「參石入 竹土」(正大) 図15(曹臣前頭) 高台
47	44	白磁	第9層下	90-2	A04JU	1901	—	—
47	45	白磁	第9層	90-2	A04LV	1884	—	—
47	46	白磁	第13～14層	90-2	A04LX	2921	—	—
47	47	白磁	第9層	90-2	A04LU	1903	—	—
47	48	白磁	第14層	90-2	A04LW	3529	—	—
47	49	白磁	第9層	90-2	A04JT	1864	—	—
47	50	白磁	第9層	90-2	A04JT	1968	—	コバルトブルー
47	51	白磁	第14層上面	90-2	A04KX	3309	13.1cm	2.9cm
47	52	白磁	第14層上面	90-2	A04LW	3279	10.4cm	2.3cm 高台 逆凹無
47	53	白磁	第14層	90-2	A04KW	3173	—	高台無軸
47	54	青花	第13層	90-2	A04KW	3013	—	口縁部
47	55	青花	第13層	90-2	A04KW	2735	—	口縁部から高台まで。
47	56	青花	第13層左位	90-2	A04MT	3400	11.66cm	—
47	57	青花	第13～14層	90-2	A04KW	2780	—	口縁部から高台まで。あせ22
47	58	青花	第9層	90-2	A04KX	3400	—	—
47	59	青花	第13層	90-2	A04HW	3332	—	口縁部
47	60	青花	第13層	90-2	A04LX	3152	—	口縁部
47	61	青花	第13層下位	90-2	A04MT	3400	—	口縁部から高台まで。
47	62	青花	第13層	90-2	A04LU	3156	—	高台
47	63	青花	第13層	90-2	A04LW	3223	—	—
48	64	季朝陶器	第11層	90-2	A04KU	3439	4.5cm	7.1cm 内面にも釉薬
48	65	伝向賀	第12層	90-2	A04KU	1363	—	—
48	66	中向賀	第9層	90-2	A04KS	1953	23.9cm	高台？ 『時跡』
48	67	遺物美術品	第9層	90-2	A04JT	1968	7.6cm	口縁部から高台
48	68	華清三彩	排水溝2	90-1	A04PL	1781	—	図7(曹臣前頭) 口縁部黄色。体・底部緑
48	69	青白製品	溝洗造積 15	90-1	A04OM	2668	—	図8(大坂本陣寺相)
48	70	青白製品	V-3層	90-1	A04PM	2340	—	—
48	71	フジの山口	第12層	90-2	A04LV	3415	3cm	あせ22
48	72	土鐘	第13層	90-2	A04LX	2932	3.2cm	3.9cm 重ねあげ
48	73	土器円盤(瓦質)	第9層(植物層)	90-2	A04LT	1968	5.6～5.8cm	瓦を円盤にす
49	74	大形土製品	V-1層	90-1	A04OM	1266	4.4cm	—
49	75	大形土製品	N-5層	90-1	A04OF	494	4.9cm	—
49	76	青石	V-1層	90-1	A04PO	2712	27.85 × 23.7mm	8.9mm
49	77	青石	第11層	90-2	A04KW	2391	29.5 × 23.25mm	6.8mm
49	78	築	第12～13層	90-2	—	2683	—	—
49	79	築	灰状焼成 16	90-1	A04PL	3169	—	図8(大坂本陣寺相) 南あげ
49	80	木綿布	壁模18	90-1	A04QP	2743	—	図8(大坂本陣寺相)
50	81	石臼(土)	砌石6	90-1	A04OO	3162	—	図7(大坂本陣寺相) 花唐草
50	82	石臼(土)	第10層	90-2	A04LW	2551	—	あせ20

50	82	石臼(上)	第10層	90-2	A04LW	2551			あせ20
50	83	石臼		90-2	A04LW				
50	84	石臼(下)		90-1	A04OM	2674			図7「大阪本願寺跡」
50	85	石臼	石臼状遺構225	90-2	A04LW	2271			図12「唐物跡」
50	86	葉口(下)	石臼状遺構225	90-2	A04LW	2588			図13「唐物跡」
50	87	瓦礫堆	瓦状遺構261	90-2	A04KL	2050			図13「唐物跡」(前)・和紙敷石、金箔で梵字、T.P. + 2.67m
51	88	礎	V-1層	90-1	A04QO	3244			裏あせ、瓦敷
51	89	礎	第7.5層	90-2	A04LW	1511			T.P. + 1.62m
51	90	礎	第7層	90-2	A04KW	1589			瓦敷
51	91	礎	排水溝2	90-1	A04NL	2656			図7「曹臣前頭」T.P. + 1.51m、瓦敷
51	92	礎	排水溝15	90-1	A04OM	3232			瓦敷、被覆、「天正19年」
53	94	金油押井丸瓦	排水溝1下層	90-1	A04PN	3136	埋幅8.0cm		図8「大阪本願寺跡」
53	95	金油押井丸瓦	N-5層	90-1	A04OL	558	埋幅9cm		図8「曹臣前頭」、瓦あせ
53	96	金油押井丸瓦	第6.5層	90-2	A04LV	1020	埋幅9.5cm		T.P. + 2.833m
53	97	金油押井丸瓦	第7層	90-2	A04LT	1434	埋幅11.8cm		
53	98	瓦敷	瓦状遺構15	90-1	A04OM	2622			図8「大阪本願寺跡」、18枚
53	99	瓦敷	瓦状遺構15	90-1	A04OM	2622			
53	100	瓦敷	瓦状遺構15	90-1	A04OM	2622			
53	101	瓦敷	瓦状遺構15	90-1	A04OM	2622			
53	102	瓦敷	瓦状遺構15	90-1	A04OM	2622			
53	103	瓦敷	瓦状遺構15	90-1	A04OM	2622			
53	104	瓦敷	瓦状遺構15	90-1	A04OM	2622			
53	105	瓦敷	瓦状遺構15	90-1	A04OM	2622			
54	106	移動先	第14層	90-2	A04KW	2733	294cm	16.5cm	T.P. + 2.35m
54	107	移動先	第13層	90-2	A04KW	3007			
54	108	移動先	V-1層	90-1	A04PP	3230	残14.8cm		T.P. + 2.22m、瓦あせ
54	109	移動先	第14層	90-2	A04LW	3279			
54	110	移動先	V-1層	90-1	A04PP	3230	残9.98cm		T.P. + 2.203m、瓦あせ
55	111	木版	第13層	90-2	A04NW	2840	17.41cm	2.7cm	
55	112	木版	第13層	90-2	A04NW	2840	18.84cm	3.1cm	
55	113	木版	V-1層	90-1	A04PM	1921	17.9cm	12.2cm	
55	114	木版	第7.5~8層	90-2	A04LS	1469	11.8cm	12.25cm	
55	115	木版	8~5層	90-1	A04ON	533	残4.5cm	11.46cm	
55	116	木版	土塗4	90-1	A04ON	1866			図7「唐物跡」
55	117	木版	土塗4	90-1	A04ON	2378	14.82cm	20.3cm	図7「唐物跡」
56	118	瓦敷	第9層	90-2	A04QJ	1648	埋幅13.5cm		T.P. + 2.562m、
56	119	瓦敷	第9層	90-1	A04QJ	1710	埋幅7.8cm		図7「唐物跡」(前) T.P. + 1.973m、
56	120	瓦敷	第14層	90-2	A04OW	2069	12.7cm	4.6cm	T.P. + 2.363m
56	121	瓦敷	第11層	90-2	A04OW	2968	埋幅7.4cm	8cm	
56	122	瓦敷	第12層上部	90-2	A04OW	2068		8cm	T.P. + 2.73m
57	123	瓦敷	8~2層	90-1	A04OM	3132	7.5cm		
57	124	下駄	土塗4	90-1	A04M ~ P04	244	長さ21.2cm	幅7.7cm	図7「唐物跡」
57	125	下駄	瓦状遺構261	90-2	A04OV	2188	長さ19.7cm	幅9.5cm	図14「唐物跡」 T.P. + 2.45m
58	126	アカシ	第14層	90-2	A04MT				瓦あせ23
58	127	アカシ	第14層	90-2	A04MT				瓦あせ23
58	128	ニシング上部脛骨	V-1層	90-1	A04OM	1290			上脛骨、尺骨、橈骨、手根骨4点
58	129	アカシ	集石422	90-2	A04LS	3295			図17「唐物跡」

註1 佐久間貴士 1990「大阪城跡の発掘調査—府立総人組合センター建設予定地」大阪府下埋蔵文化財研究会(第22回)資料

大阪府教育委員会

註2 大阪市文化財協会 2002「大阪城跡VI」

註3 宮崎泰史 1993「ドーンセンター建設に伴う大阪城跡の調査」大阪府下埋蔵文化財研究会(第27回)資料

註4 大阪城天守閣 1993「特別展 城下町大阪・地中より今甦る激動の歴史」

註5 一般財团法人 大阪市文化財協会の時期区分に準拠。

註6 内田九州男 1989「豊臣時代大阪城三の丸工事の史料について」大阪城天守閣記要 第17号

蓮生寺が慶長3年9月2日付で同僚に宛てた書状に、大阪御普請の様子は(三ノ丸)の南東については完成したが、北の方については来年の春に実施する予定。検出された石垣は、慶長4年の段階で普請されたものと考えられる。

註7 三ノ丸石垣の詳細なデーターは、日産建設(株)賀集幸治、中村石材工業(株)水田周一によってまとめられた「大阪城跡発掘調査に伴う機械掘削等請負工事の内 石垣撤去工 事に関する報告書」平成3年3月)による。

註8 「大正14年4月1日、大阪天守閣地図、大阪毎日新聞社」の地図には表記されている。

註9 内田九州男 1980「研究ノート 新出の寛永期大阪城跡について」大阪府天守閣紀要 第8号

寛永8~9年(1631~1632)の「大阪城跡並町中之図」によれば、調査地には京街道、町屋が描かれている。

註10 大阪市文化財協会 1988「大阪城跡VII」

## 凡例

・座標値は日本測地系(国土地理院直角座標第VI系)を用い、挿図中の方位記号は、座標北を示す。水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中ではT.P. ± mを記している。

・地区割りについては1/2500地形図(都市計画図)を基本として、二つのアルファベットを組み合わせた4m四方の区画(OP, OQ地区など)を設定した。なお、この4m区画は遺物取り上げの最小単位(遺物登録番号)としている。

・調査については渡辺 武、内田 九州男、北川 央、宮本裕次、佐藤弘、佐藤恭司、藤井重夫、森村健一、船谷和彦、松尾信裕、鈴木秀典、森 誠、宮本佐知子、黒田慶一、山口誠治、川口宏治、多賀智 昭、安部みさき、酒野俊明、酒野晶子、稻谷俊介、西川 旭、日野菊美、中村 忠、水田周一、阪口文子、別所秀高、鍋島隆宏、荒巻真由美、岡本奈美子、小島美穂、辻尾幸美の御教示・後協力を得ました(順不同・敬称略)。



写真1 OSJ90-1区 石垣石の平面図作成（西から）



写真2 OSJ90-1区 石垣石の寸法計測（東から）



写真3 OSJ90-1区 石垣石の撤去作業（北西から）



写真4 OSJ90-1区 石垣石の番号付け（北から）



写真5 OSJ90-1区 50cm ピッチの水氷張り（北から）



写真6 OSJ90-1区 解体用足場の設置（北西から）



写真7 OSJ90-1区 石垣石の洗浄（南西から）



写真8 OSJ90-1区 東側Pライン沿い土層断面（東から）



写真9 OSJ90-1区 三ノ丸の石垣石（北から）



写真10 OSJ90-1区 三ノ丸の石垣石 近景①（北から）



写真11 OSJ90-1区 三ノ丸の石垣石 近景②（北から）



写真12 OSJ90-1区 三ノ丸の石垣石 近景③（北から）



写真13 OSJ90-1区 三ノ丸石垣の断面（東から）



写真14 OSJ90-1区 石垣石の転石状況（北から）



写真15 OSJ90-1区 三ノ丸石垣前面の配石溝（北から）



写真16 OSJ90-1区

「大？」と書かれた墨書 石垣石 112



写真17 移築復元された三ノ丸石垣 完成時撮影



写真18 左に同じ 令和4年10月撮影

上部は大阪冬ノ陣後に破壊された状態で、地表下には2～3段分の石垣石を根石としていた築造当初の状態で復元している。石垣の北側に接して石垣の根の排水目的とした配石溝の代わりにコンクリート製の排水溝が造る。



写真19 OSJ90-1区西半部 V-1層上面 瓦片(東から)



写真20 OSJ90-1区 排水溝1～3(上が北)



写真21 OSJ90-1区 破風 出土状況(南から)



写真22 OSJ90-1区 VI層上面(東から)



写真23 OSJ90-1区 VI層上面(上が北)



写真24 OSJ90-2区 第5層上面(上が北)



写真 25 OSJ90-2 区 第 6 層上面 砕敷面（西から）

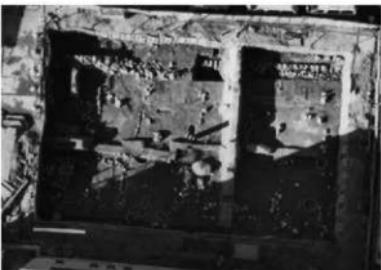


写真 26 OSJ90-2 区 第 7 層上面（上が北）



写真 27 OSJ90-2 区 第 9 層上面（上が北）



写真 28 OSJ90-2 区 第 9 層上面（西から）

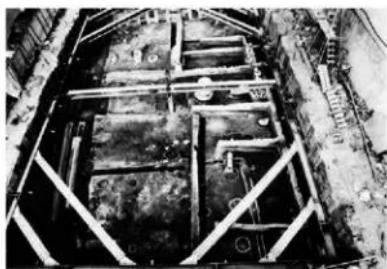


写真 29 OSJ90-2 区 第 10 层上面（上が北）

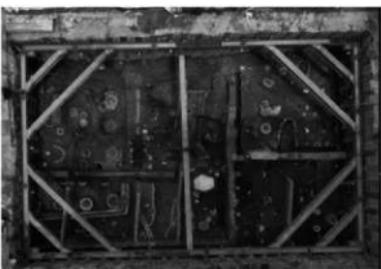


写真 30 OSJ90-2 区 第 10 ~ 12 层上面（上が北）



写真 31 OSJ90-2 区 第 12 层上面 炉 338(北東から)



写真 32 OSJ90-2 第 13 ~ 15 层上面（上が北）



写真33 OSJ90-2区 第13層中 硙石建物4(東から)



写真34 OSJ90-2区 第14層上面 水堀288(東から)



写真35 OSJ90-2区第14層上面 硙石建物6(西から)



写真36 OSJ90-2区第15層上面 硙石建物7(南から)



写真37 OSJ90-2区 第15層上面 集石422(西から)



写真38 OSJ90-2区 第15層上面 二枚貝(西から)



写真39 OSJ90-2区 硙石建物8 硙石640(東から)



写真40 OSJ90-2区 第15層上面 土坑420(西から)

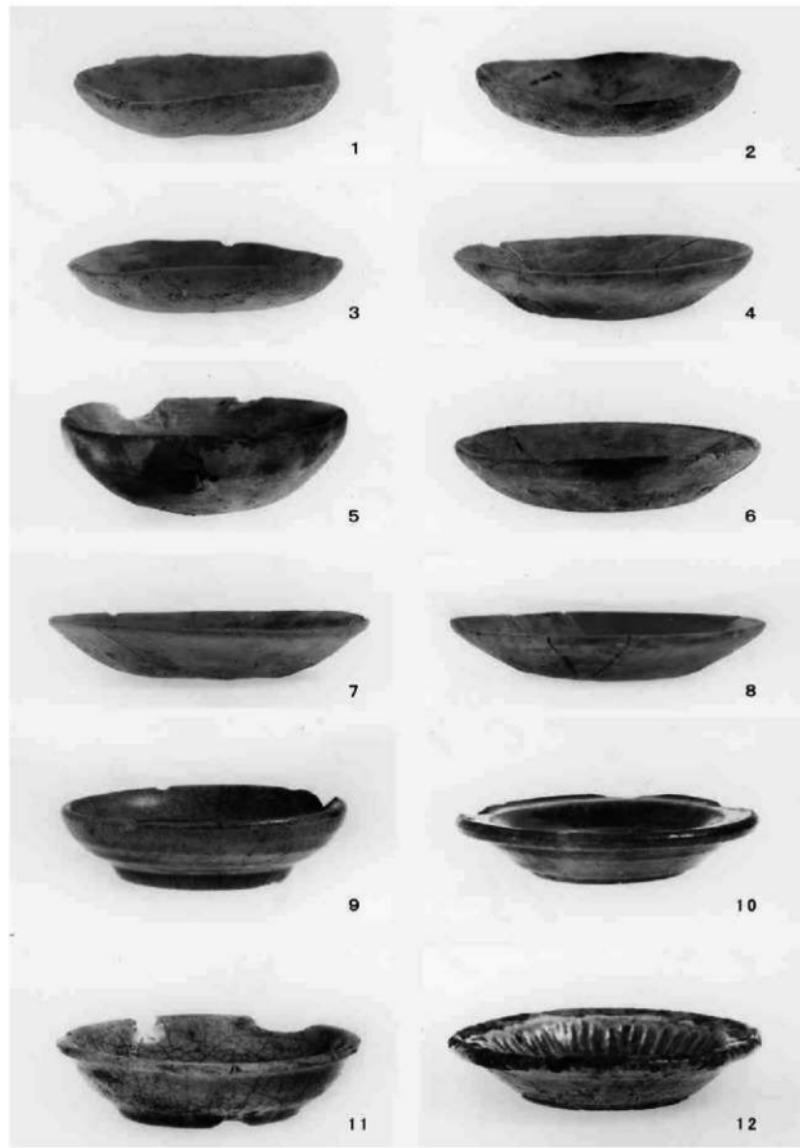


写真 41 大坂本願寺期～豊臣前期・後期 土器・陶磁器土師皿（1～4・6～8）土師質坏（5）

瀬戸・美濃焼（9～12）

第13層（1・12）桶290（2）第14層（3・5・10）土坑418（4・6）堀状造構261（7）

第9層（8）第11～13層（9）VI-1層（11）



13



14



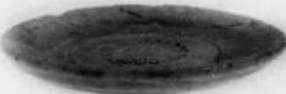
15



16



17



18



19

写真42 大坂本願寺期～豊臣前期・後期 陶磁器

瀬戸・美濃焼（13～15・17～19） 唐津焼（16）

第14a層（13） 第15層（14） 排水溝1（15） 第7層（17） 第13層（18） 第9層（16）  
第11～12層（19）



写真43 豊臣前期・後期 陶磁器

備前焼 (20・21) 織部焼 (22) 軟質施釉陶器 (23) 絵志野焼 (24) 絵唐津焼 (25)

瓦敷 417 (20) 排水溝1 (21) 土坑 235 (22) 第11層 (23) 第7層 (24・25)



写真44 大坂本願寺期～豊臣前期 土器・陶磁器

瓦質土器（26・27）土師質土器（28）備前焼擂鉢（29～31）

埋甕18（26）第12層上面（27）埋甕292（28）VI-1層（29・30）VI-2層もしくは落込7（31）

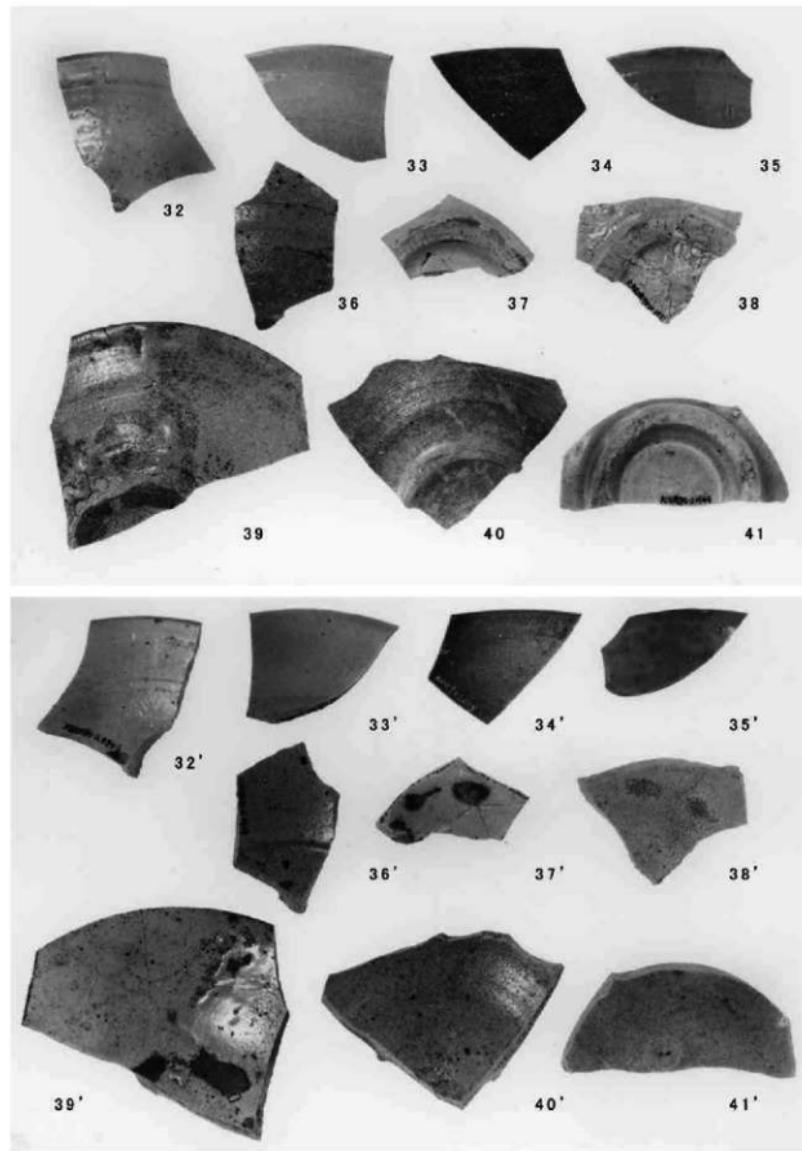


写真45 豊臣前期・後期 李朝陶磁器

第6層(32・36・38) 第9層(33～35・37) 第13層(39・40) 第5層(41)



42

写真46 豊臣前期 陶磁器  
備前焼大甕 水甕 288

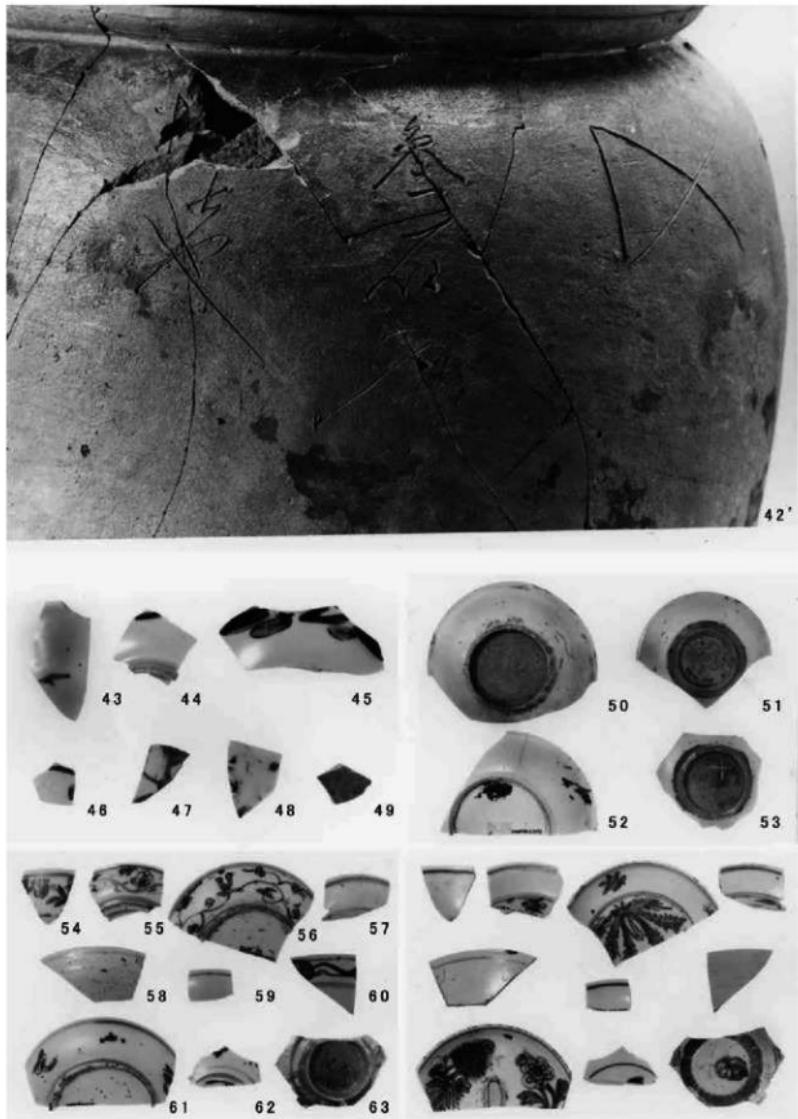


写真47 豊臣前期・後期 陶磁器

上段 備前焼大甕（拡大）「參石入 捺土也」

下段 色絵（43～49）白磁（50～53）青花（54～63）

第9層（43・44・46・48・49）第13～14層（45・57）第14層（47・50～53）

第13層（54～56・58～63）

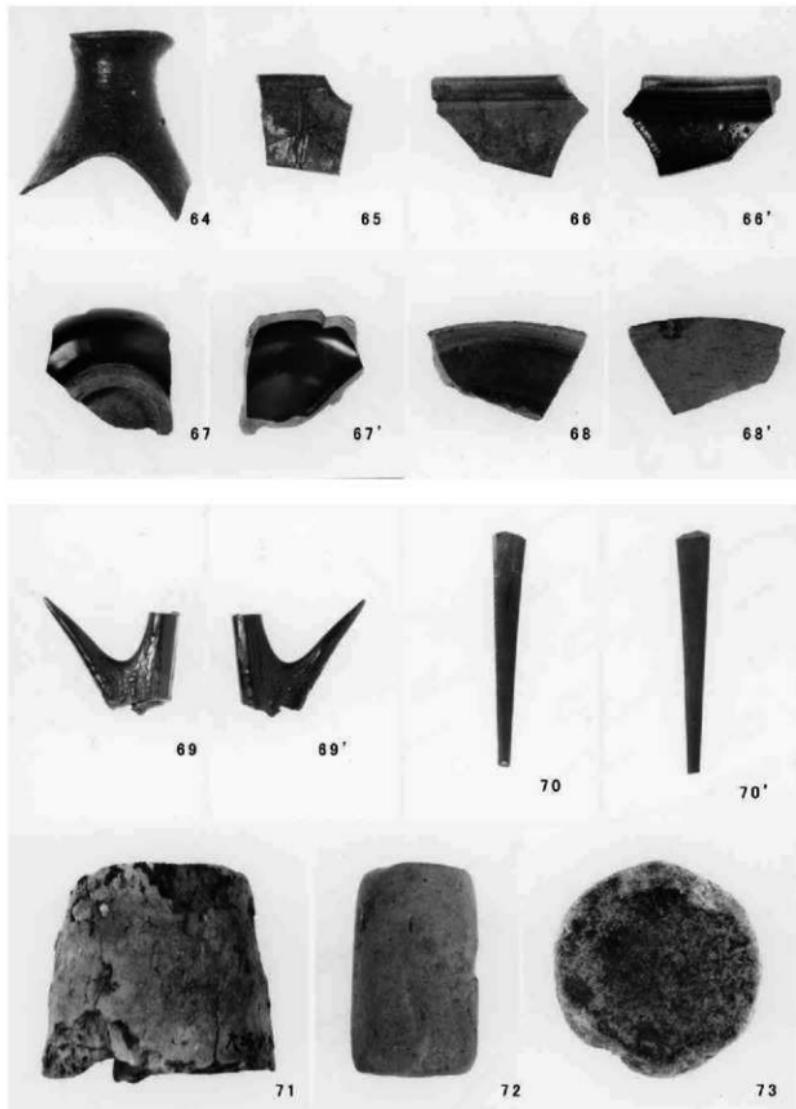


写真 48 豊臣前期・後期 陶磁器・骨角製品・土製品

上段 李朝(64) 信楽焼(65) 中国製陶器(66) 潟戸・美濃焼(67) 華南三彩(68)

第13層(64) 第12層(65) 第9層(66・67) 排水溝2(68)

下段 骨角製品(69・70) フイゴの羽口(71) 土鍤(72) 土製円板(73)

溝状造構15(69) V-3層(70) 第12層(71) 第13層(72) 第9層(73)

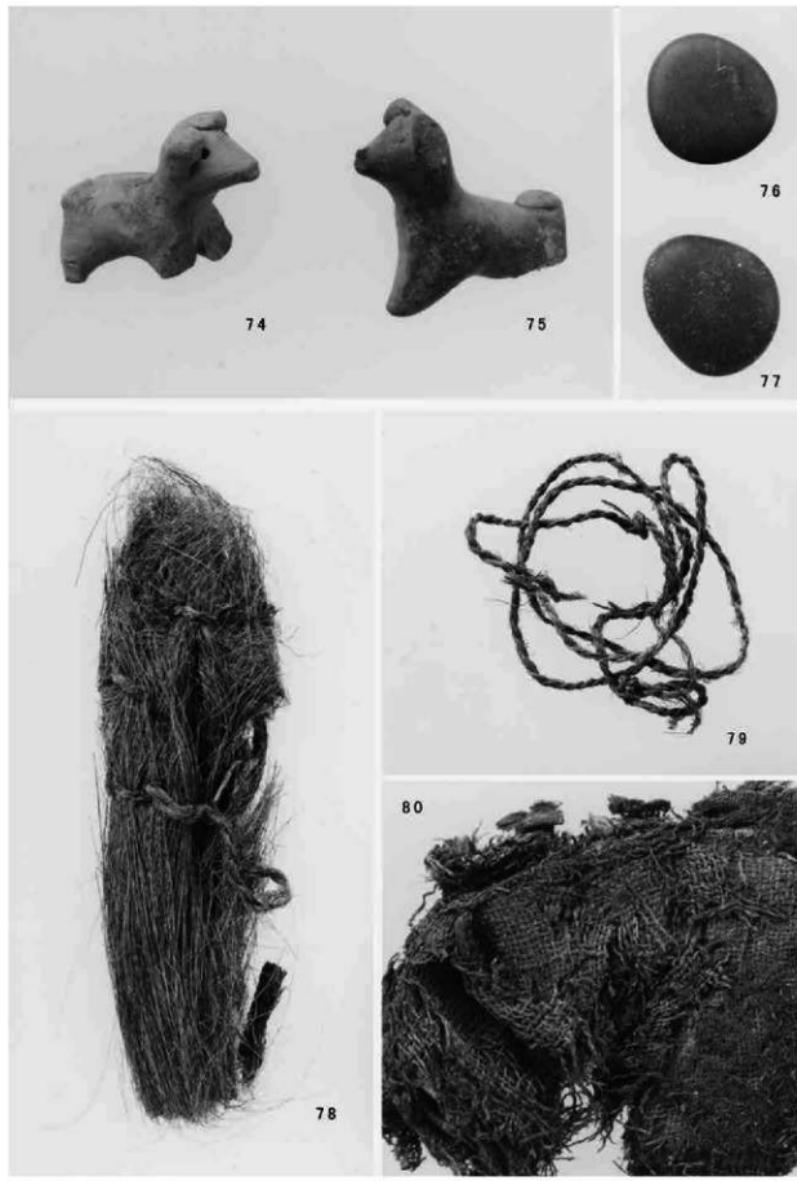


写真49 大坂本腰寺期～豊臣前期・後期 土製品・石製品・織維質

犬形土製品（74・75）碁石（76・77）ほうき状植物織維の束（78）縄（79）布（80）

VI-1層（76）IV-5層（75）第11層（77）第12～13層（78）溝状造構16（79）埋甕18（80）

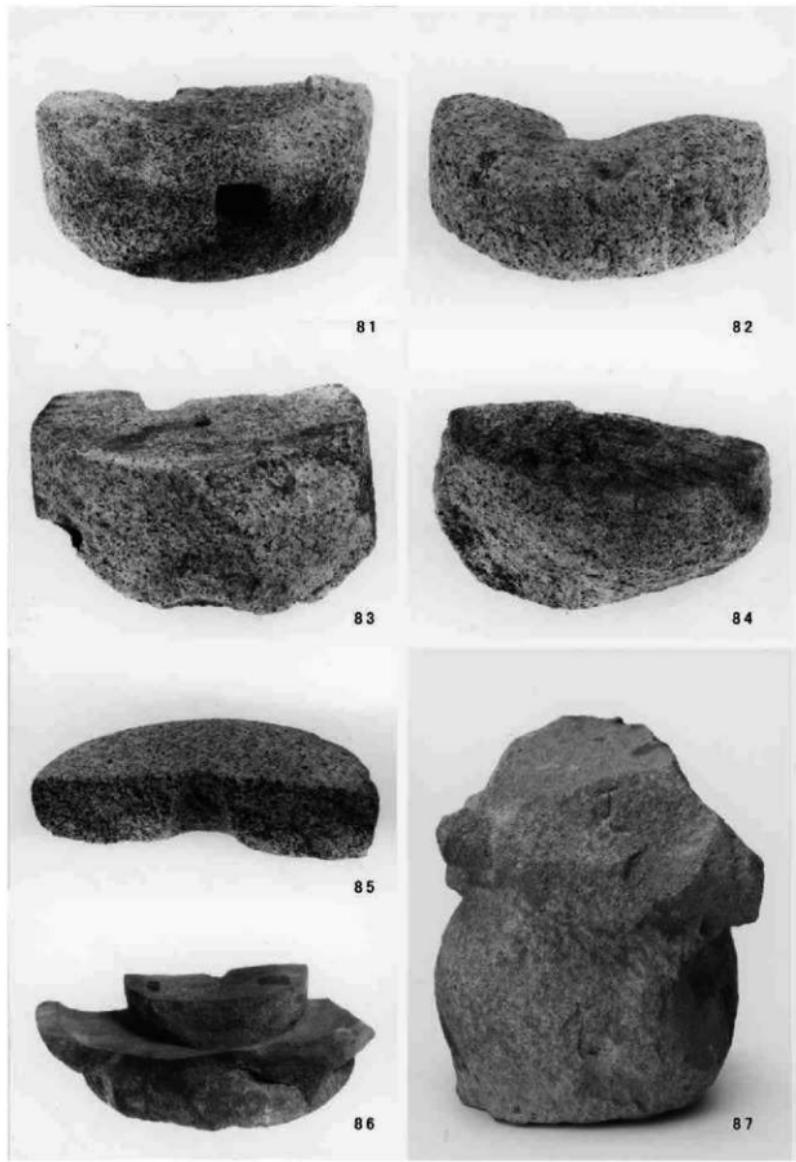


写真 50 大坂本願寺期～豊臣前期・後期 石製品

石臼 (81～85) 茶臼 (86) 五輪塔 (87)

礎石6 (81) 第10層 (82) 第6層 (83) 磐石7 (84) 石垣状造構 225 (85・86) 塚状造構 261 (87)

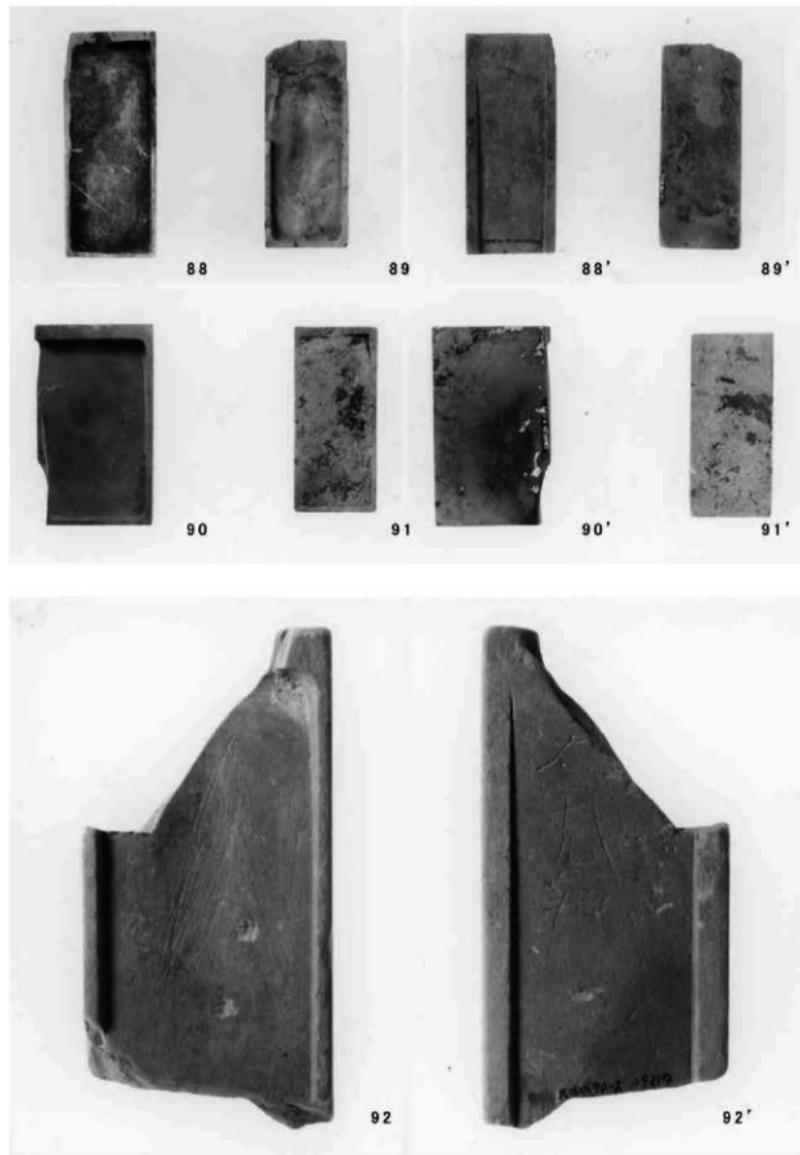


写真 51 大坂本願寺期～豊臣前期・後期 石硯

上段 VI - 1層 (88) 第7層 (89・90) 排水溝2 (91)

下段「天正十九年」銘入り硯 (92) 第6層

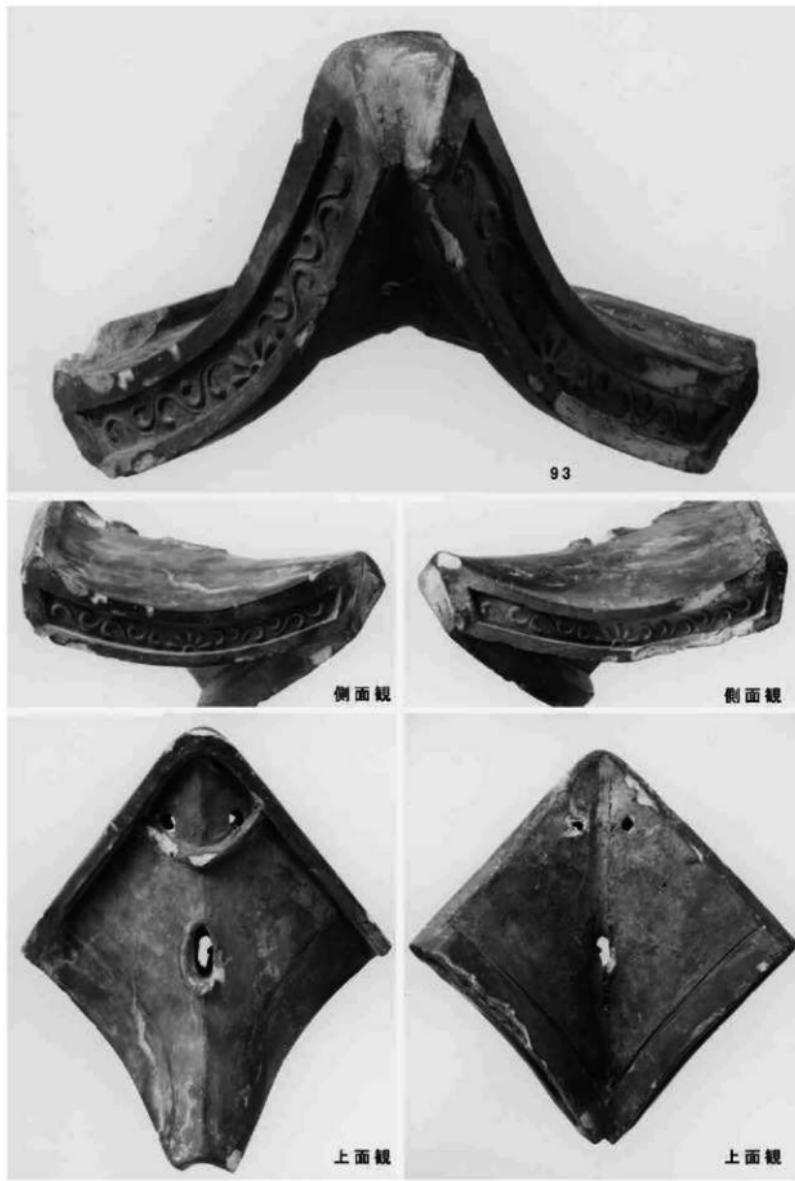


写真 52 大坂本願寺期 鳩瓦  
鳩瓦 (93) 溝状造構 15



94



95



96



97



98



99



100



101



98'



99'



100'



101'



102



103



104



105



102'



103'



104'



105'

写真 53 大坂本願寺期～豊臣前期・後期 金箔瓦・銭貨

上段 金箔押軒丸瓦

排水溝1（94）IV - 5層（95）第6層（96）第7層（97）

下段 銭貨（98～105） 溝状遺構 15 内 銅錢群5

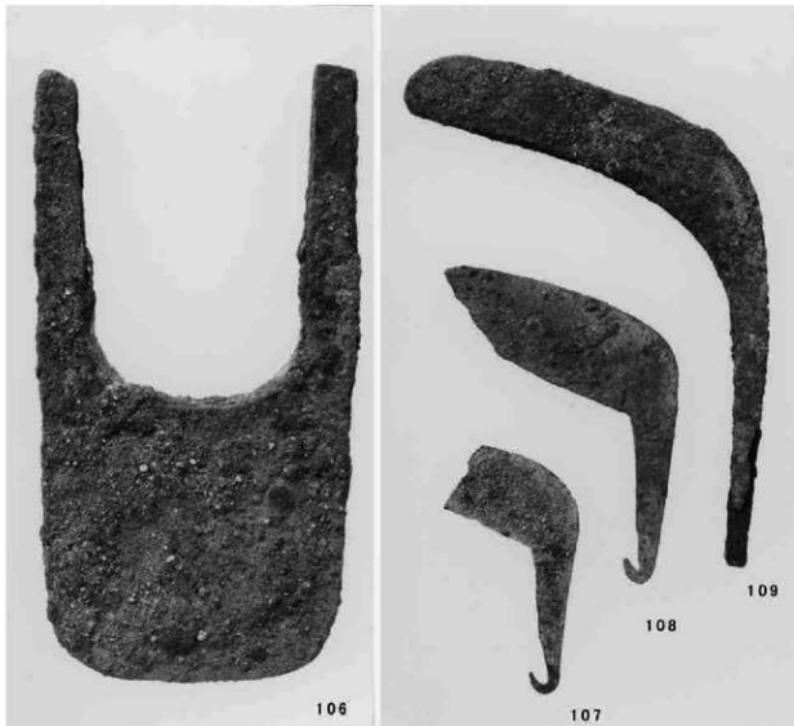


写真 54 大坂本願寺期～豊臣前期 金属製品  
鉄製鋤先（106）鉄製鎌先（107～109）包丁（110）  
第14層（106・109）VI-1層（108・110）第13層（131）

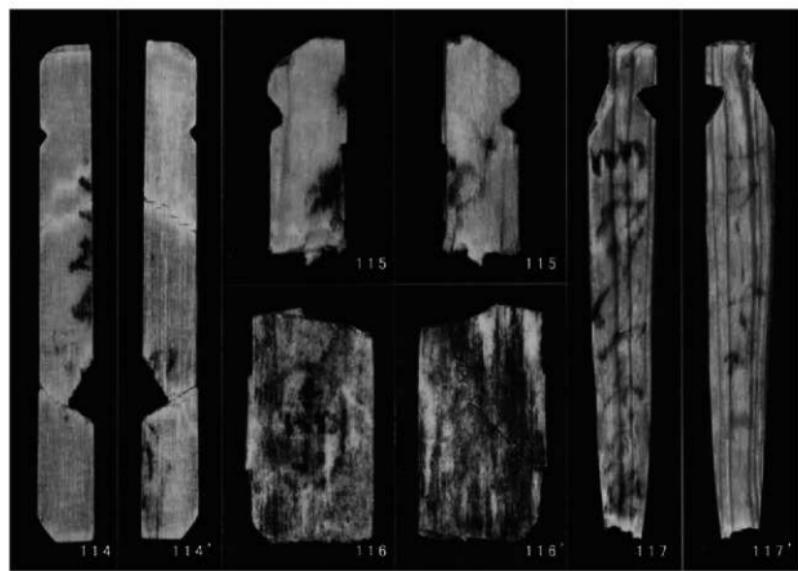
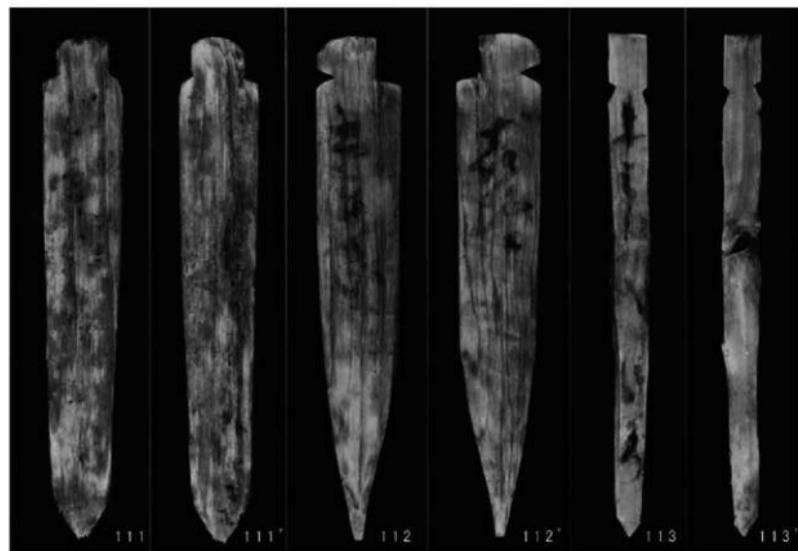


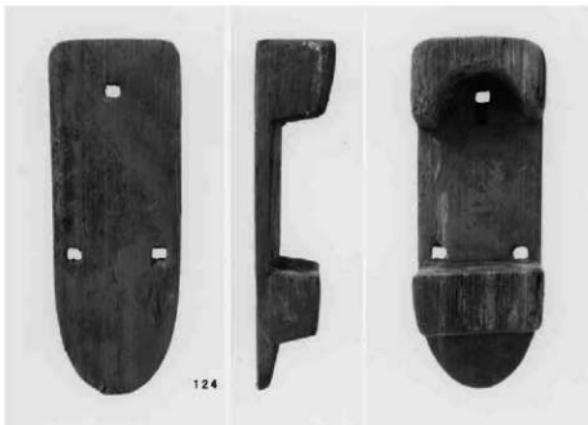
写真 55 豊臣前期・後期 木製品 木筒

第13層(111・112) V-1層(113) 第7層(114) IV-5層(115) 土坑4(116・117)

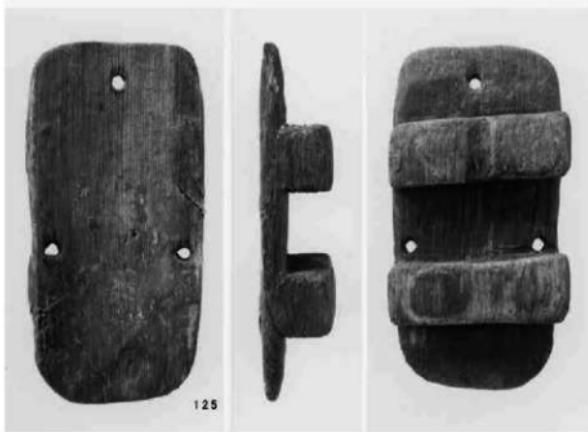


写真 56 大坂本願寺期～豊臣前期・後期 木製品 漆器椀

第9層(118) 排水溝1(119) 第14層(120) 第13層(121) 第12層上面(122) VI-2層(123)



124

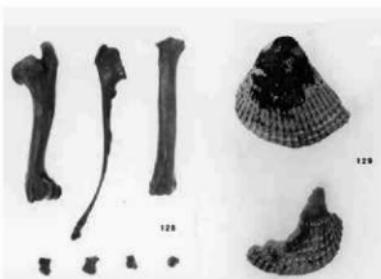


125



126

127



128

129

写真 57 豊臣前期・後期 木製品 動物遺存体

上段 下駄 土坑4 (124) 堀城造構 261 (125)

下段 アカニシ 第14層 (126・127) ニホンジカ上肢骨 V-1層 (128) アカガイ 集石 422 (129)

# 牛石9号墳の発掘調査

## はじめに

牛石古墳群は、大阪府の南部、行政区分では堺市を中心広がる泉北丘陵に存在する古墳群である。地形的には、東を石津川、西を和田川に挟まれた南北に長い梅丘陵上に位置する。

古墳発見の経緯とその後の発掘調査については2022年2月刊行大阪府教育庁文化財調査事務所年報25（以下、年報25と略す）で説明した。その中でも記述したが、詳細が不明や、未報告のままになっている古墳も多い。未報告のままである3基分の古墳の調査図面は平成27年度に大阪府所蔵資料となった故堅田直氏調査資料に含まれている。この調査資料を資料紹介していくのは、図面等の資料を保管し、また泉北丘陵に所在する大阪府文化財調査事務所の果たすべき責任であると考える。

年報25では3基の古墳のうち横穴式木室をもつ牛石5号墳について資料紹介した。引き続き今年度は、横穴式石室を持つ牛石9号墳について、発掘調査図面、

写真、出土遺物を合わせて調査の詳細をできる限り復元し、紹介していきたい。

## 1. 牛石9号墳の発掘調査

堅田調査資料に含まれている牛石9号墳の現場調査図面は、等高線を記入した縮尺1/100の地形測量図、墳丘に設定したA～Hの8か所のトレーニングの断面図、横穴式石室検出状況図、横穴式石室の平面図・立面図、石室内の遺物出土状況図等（いずれも縮尺1/10）である。今回の資料紹介では主として墳丘の外形・規模、そして横穴式石室の詳細とその出土遺物について報告することとする。

昭和42年度の調査概報（大阪府教育委員会1968）では牛石9号墳について次のように記述されている。「主体部は横穴式石室であるが、天井部の多くはすでに抜き取られていた。玄室内もかなり荒れてはいたが、床に河原石の敷石があり、木棺の他に陶棺が入っていたことが明らかになった。副葬品には須恵器、鉄刀、

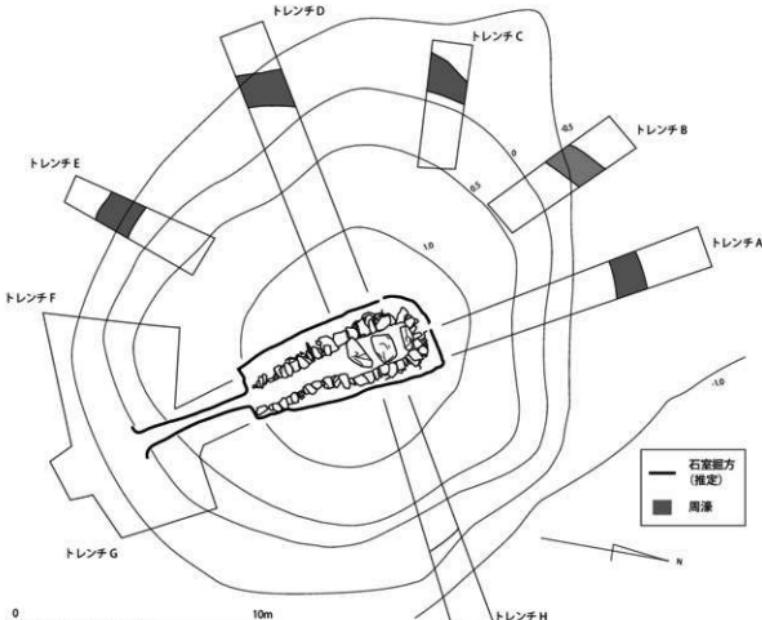


図1 牛石9号墳填丘測量図及び石室検出状況

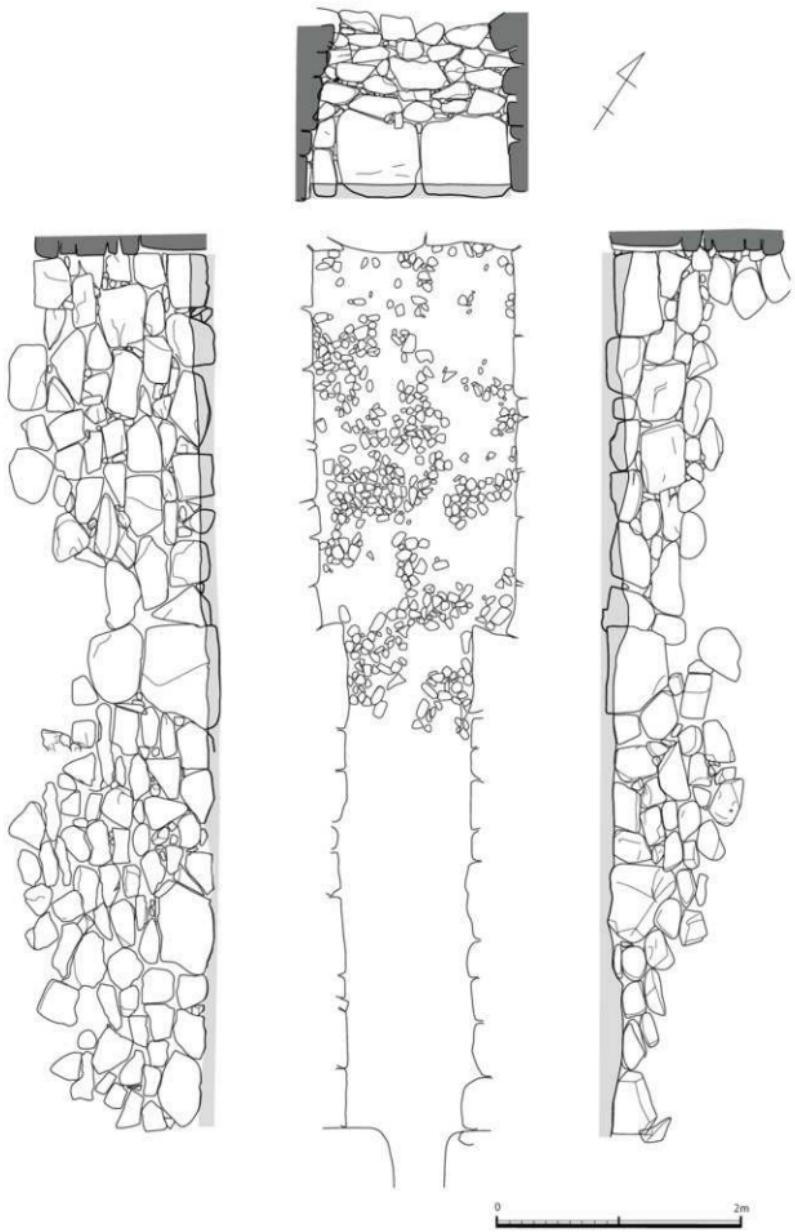


圖2 牛石9號填模穴式石室平面圖・立面圖



写真1 牛石9号填石室候出状況



写真2 牛石9号填石室（墓道から）



写真3 牛石9号填石室内遺物出土状況

鉄錆等がある。墳丘は直径約20mの円墳であるが、周囲に巾約2m、深さ1mの周濠の周りことが明らかとなった。石室は大きいとはいえないが、墳丘はこうした石室を有する古墳としては大きなものであり、明らかに周濠と言えるものを持っているのもまれな例と言える。」

図1は堅田調査資料の牛石9号墳墳丘測量図(0.5m間隔の等高線が入るが、数字は相対値のみ)に横穴式石室の検出状況を加筆したものである。墳丘は昭和42年度の概要のとおり直径約20mを測るやや不整形な円墳である。墳丘に設定したA~Hのトレンチには、一部不明瞭な箇所はあるが、墳丘の外側に幅1.2から1.5mの周濠が描かれている。絶対高は不明であるが、同じ梅丘陵の牛石7号墳の墳頂部が標高80mであり、おそらくほぼ同等の高さを有したと思われる。

トレンチの断面図を検討すると調査当時の地表面から約0.8m掘削したところで天井石を検出している。図2は天井石を除去した後の横穴式石室の平面図・立面図で、立面図の網掛け部分は石室検出時に埋設していたと推定される箇所である。この図面にも絶対高は記入されていない。横穴式石室は両袖式で図面から復元した規模は玄室部分が幅約1.6m、長さ3.0m、羨道は幅約1.0m、長さ4.1mを測る。

石室に使用されている石材の大きさは、天井部分が最大で1.0×0.6m大の石を使用している。また玄室奥壁の一段目は平面が0.7×0.8m大の石を二つ並べて使用、両袖石も平面が0.6×0.8m大の比較的大きな石を使用している。この3か所以外は平面が0.2×0.4m前後の石が積まれている。石積みの残存高は、

奥壁は1.5m、側壁は最大で1.7mを測る。石室床面、玄室と羨道の一部にこぶし大の敷石が残存している。

写真1~3は昭和42年発掘調査 당시に撮影されたガラス乾板の写真である。写真1は石室検出状況で、天井石が3個残存している様子がわかる。写真2は天井石を除去した後、羨道から奥壁方向を撮影した写真、写真3は石室内床面の遺物出土状況、玄室内袖石付近の状況である。

## 2. 出土遺物の検討

出土遺物は泉北考古資料館に保管されていたが、資料館閉館に伴い大阪府文化財調査事務所に移された。図4発掘調査時の遺物出土状況平面図には、取り上げNoが記入されている。それによると図面上で取り上げNoにより出土地点が判明している遺物は154点、そのうち須恵器(出土した土器は須恵器のみである)は49点、鉄製品が76点、玉・耳環など装飾品は21点である。

### (1) 遺物の出土状況

出土状況検討・分析してみると、遺物の出土位置は大きく分けて【A】玄室内【B】~【D】羨道内【E】羨道の5か所のエリアに整理することができた(図3)。最初にエリア別に遺物の出土状況の特徴を記述する。

【A】のエリア、玄室内で出土したのは大部分が鉄製品で、それも碎片がほとんどである。遺物は散乱したような状態で原位置を保っていない。

羨道内は、【B】=玄室寄りのエリア、【C】=羨道中央のエリア、【D】=羨道入口付近のエリアの3か所に分けて整理した。

【B】のエリア、玄室寄りでは玉類や耳環等装飾品が集中して出土し、その周囲に須恵器が出土している。図4 遺物出土状況平面図では装飾品が集中して出土した箇所に網掛けを施している。

【C】のエリア、羨道中央ではまとまった時期の須恵器が重なるようにおかれていた。

【D】のエリア、羨道入り口付近では左側壁寄りに須恵器がまとまって出土している。

【E】のエリア、羨道では所々に分散して須恵器が出土している。

次にそれぞれの種類別に出土遺物の内容を説明する。

### (2) 須恵器

取り上げNoで出土地点を、そして文化財調査事務所で実物の所在を確認した須恵器41点については実測図を作成し、図5に掲載した。図5掲載図番号は、【A】~【E】のエリア順に付けてある。また図4 遺物出土状況図に実測図(縮尺1/6)を加筆した。

図5の1~6は【A】のエリア、玄室の両袖部付

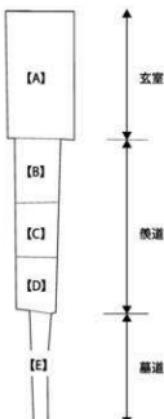


図3 遺物出土エリア模式図

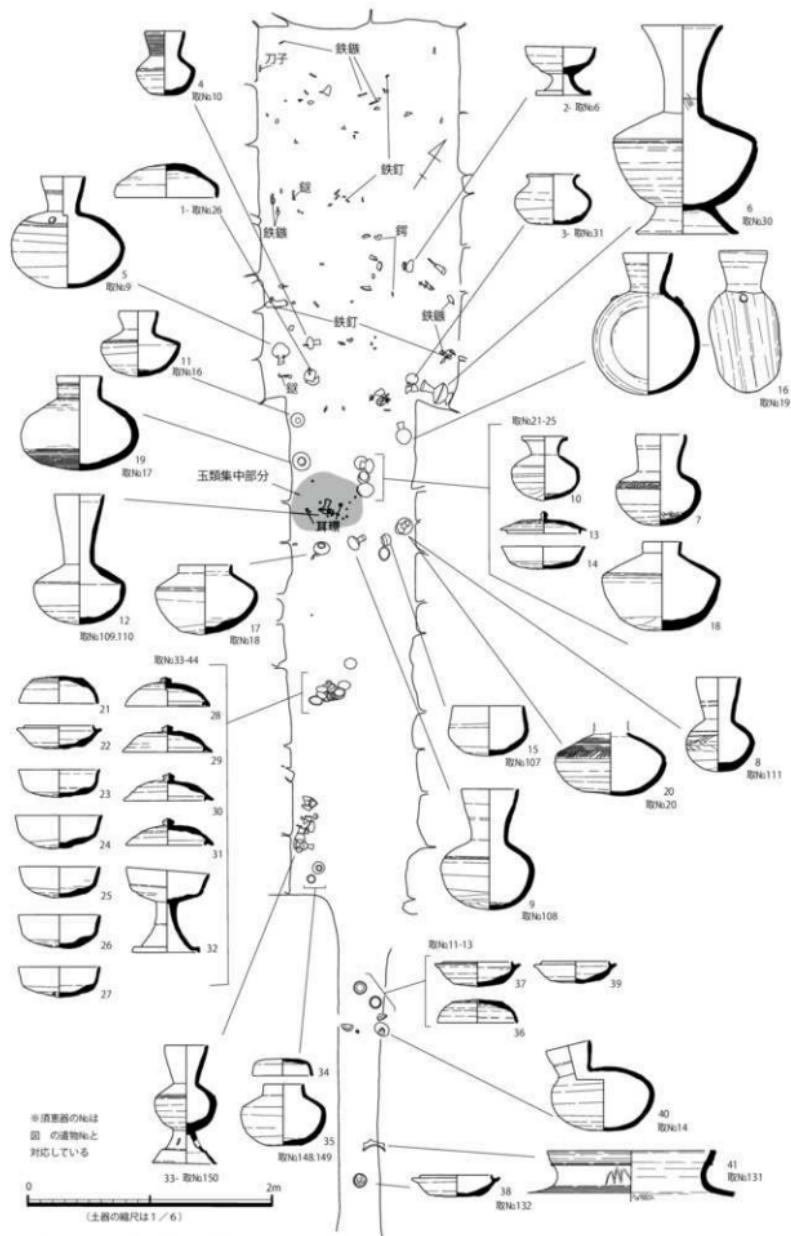


図4 牛石9号墳石室内遺物出土状況図

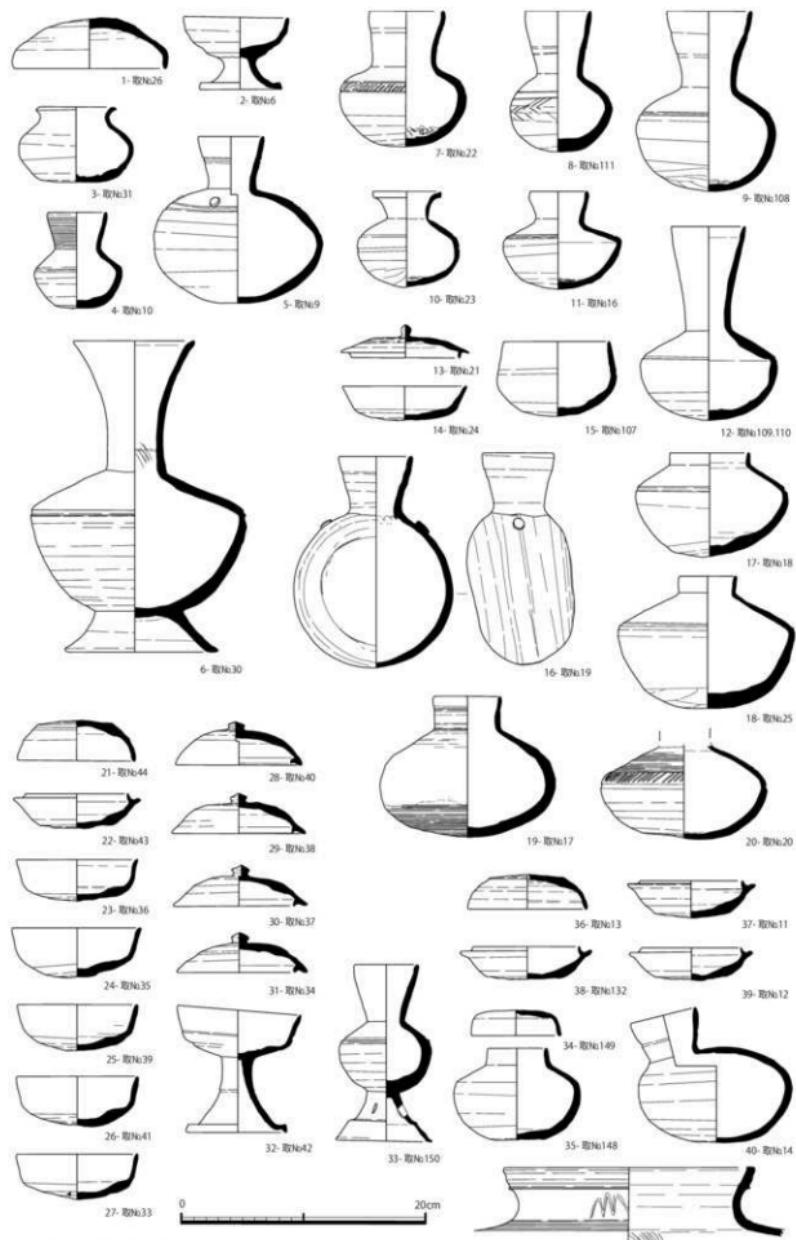


图5 牛石9号填石室内出土须惠器实测图

近で出土したもので、器種は环蓋、台付壺、高环、ミニチュアの壺などがある。陶邑編年II～III形式(註2)に相当するものを含み、時期にややバラつきがある。

図5の7～20は【B】のエリアから出土したもので器種は長頸壺、短頸壺等壺類が多い。この箇所は玉類他装飾品や砥石等が集中して出土しており、須恵器は玉類の周囲をとりまくように出土している。13、14の蓋環はつまみ部分や端部が洗練されたシャープな作りでIII型式1段階に相当すると思われる。

図5の21～32は【C】のエリア、狭道中央に重ねた状態で出土した蓋環、高环である。II型式6段階～III形式1段階のまとまった時期に相当し、ほぼ全てが完形品である。

図5の33～35は【D】のエリア、狭道の入り口付近左侧で出土したものの一部、台付壺、短頸壺、壺蓋である。破損している個体が多く、片づけてまとめられた状況を示している。

図5の36～41は【E】のエリア、墓道に散在して出土したもので、器種は壺の口縁部、平瓶等がある。II型式6段階に相当する時期の壺蓋がある。

### (3) 鉄製品

図4遺物出土状況図で出土地点が判明している鉄製品は76点、その中で実物が存在するのは65点である。ほぼすべてが【A】のエリア玄室内から散在した状況で出土している。鉄製品の場合は、複数の製品が一か所でまとめて取り上げられていたようである。発掘調査から50年以上経過し、いずれも腐食が激しく脆い状態である。製品名が判明した場合できる限りその名称を出土状況図に加筆、記入した。主な種類は、鉄鍔、鉄鎌、鉄鎌、鉄釘等である。以下種類別に説明する。

写真4の鉄鍔は、元々2片に割れており玄室内で50cmの間隔をあけて出土している。昭和42年度の概要では副葬品として鉄刀が挙げられていたが、明らかに鉄刀と判定できるものは見あたらない。しかし鍔の存在から鉄刀が副葬されていたことは推定されるであろう。残存長6.5cm、復元最大幅5.0cm、中心孔の長さ2.5cm、復元幅1.2cmを測る。

鉄鎌はほとんどが破損しているが、少なくとも35点以上は存在していたと推定できる。写真5は鎌身部が残存しているもの4点を集め撮影掲載した。写真5の1は頭部に比して鎌身部長が6.5cmと異様に大きく、儀礼用に使用されたものか。写真5の2～4は有頭平根式鉄鎌(註1)で、2は鎌身部残存長2.8cm、3は鎌身部長3.7cm、全長8.7cm、4は鎌身部長4.0cmを測る。他にも頭部、茎部が多数残存しており、複数個体の長頭鎌が存在していたと思われる。

鉄鎌は3点出土、写真6の1、2は渡り部分と爪

部(註2)が両方残存しているものを撮影掲載した。写真6の1は渡り部の幅1cm、厚さ0.8cm、長さ8.3cm、爪部片側は破損、残存部は3.1cmを測る。写真6の2は、渡り部の幅0.9cm、厚さ0.4cm、残存長5.2cm、爪部片側が破損、残存部分も先端が欠損しているが、残存長1.9cmを測る。

鉄釘もほとんどが破損しているが、少なくとも9点以上は存在していたと推定できる。写真6の3～6はいずれも木質が付着している。3～5は横方向の木目が、6は縱方向の木目が観察できた。これらの鉄釘は、3は断面が $0.6 \times 1\text{cm}$ 、4は $0.8 \times 1\text{cm}$ 、5は $1 \times 1.2\text{cm}$ の素材を使用して作られている。

鉄鎌や鉄釘の出土から木棺の存在が推定できる。



写真4 牛石9号墳出土鉄鍔



写真5 牛石9号墳出土鉄鎌

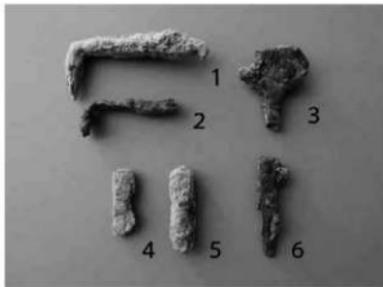


写真6 牛石9号墳出土鉄鎌・鉄釘

#### 4) 耳環・玉類

耳環・玉類はほとんどが【B】のエリア、羨道の玄室寄りで出土している。図4 遺物出土状況図では耳環3点、砥石1点、玉類19点に取り上げ№が付けられ出土地点が判明しているが、実物の所在は半数以上が不明である。そのうち実物が存在しているものについては法量等詳細の一覧表1を作成した。

耳環は3点中1点のみ実物が残存、不明のうち1点は取り上げ№によると墓道から出土している。残りの2点（1点は実物の所在不明）は【B】のエリア、羨道の玄室寄りで30cmの間隔をあけて出土している。この2点の耳環を中心とした約40cm四方の範囲から琥珀玉、ガラス玉等が出土している。耳環・玉類のこの出土状況は、これらの遺物がほぼ原位置を保っている可能性を示している。

写真7の1は琥珀玉、2・3は埋木彫玉、4は水晶切子玉、5～7はガラス小玉、8は耳環である。

#### おわりに

牛石9号墳について現場図面、写真、出土資料から発掘調査の詳細を復原、検討してみた。その結果、牛石9号墳の埴丘は直径20mの円墳で、その外側に幅1.2～1.5mの周濠が巡ることが判明した。埋葬施設は両袖式の横穴式石室で、玄室の幅約1.6m、長さ3.0m、羨道は幅約1.0m、長さ4.1mである。石室からは、須恵器の他、鐵鍼、鎌、釘などの鉄製品、耳環や玉類などの装身具も出土している。

遺物の出土状況から、玄室や羨道を使用して複数回、少なくとも3回以上の埋葬がおこなわれたと推定できる。石室から出土した須恵器の年代から、牛石9号墳は6世紀末に築造され、7世紀中頃まで埋葬施設として機能していたのではないかと思われる。

これまでの検討から、牛石9号墳は牛石古墳群の中で最終段階の横穴式石室を持つ古墳であり、またこれまで判明している泉北丘陵周辺の古墳群を含めてやはり最終段階の古墳となることが判明した。

表1 牛石9号墳出土玉類・耳環計測表

写真図№	取り上げ№	種類	直徑(cm)	長さ(cm)	孔径(cm)	備考
1	45	琥珀玉	1.4×1.3	2.1	0.3×0.25	
	136	琥珀玉				破片のみ
2	137	埋木彫玉	0.9	1.4	0.2	
3	133	埋木彫玉	0.8	1.3	0.2	
4	138	水晶切子玉	0.9×1.0	0.9	0.3×0.1	
5	124	青ガラス小玉	0.45×0.42	0.25×0.2	0.18	不透明ガラス
6	124	青ガラス小玉	0.38×0.35	0.2	0.1	透明ガラス
7	135	黄ガラス小玉	0.35	0.25	0.08	不透明ガラス
8	115	耳環	2.5×2.3			径0.4cmの素材を使用

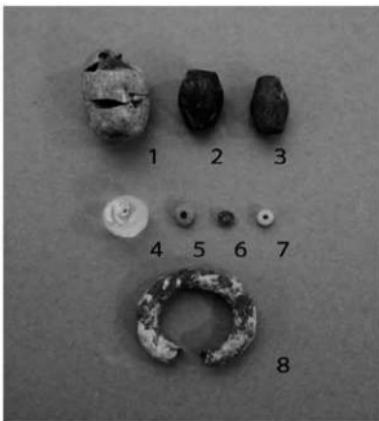


写真7 牛石9号墳出土玉類・耳環

今後は未報告である10号墳の再整理・報告を行い、泉北丘陵の古墳群の詳細をより明らかにし、これらの資料がさらに活用されていくように努めたい。

（藤田道子）

註1 鉄鍼の形式分類は、川畠純氏『武具が語る古代史』2015年3月『矢鍼の型式学的研究』に従った。

註2 鉄鍼の部位は、岡林孝作氏『古墳時代木棺の展開過程における鍼の基礎的研究』2015年3月（科学研究費助成事業基盤研究（C）、平成24-26年度、研究成果報告書）奈良県立橿原考古学研究所に従った。

#### 参考文献

大阪府教育委員会 1968『昭和42年度泉北丘陵地区窯跡古墳発掘調査概要』

大阪府教育委員会 1990『陶邑VII』大阪府文化財調査報告書第37輯

## 【資料紹介】

# 令和3年度弥生プラザ展示『水差形土器の世界』展示資料について

展示場所	大阪府立弥生文化博物館 2階常設展示室前
展示期間	令和3年 12月 7日（火曜日）から 令和4年 6月 23日（木曜日）
主催	大阪府教育委員会、公益財団法人大阪府文化財センター、大阪府立弥生文化博物館

## はじめに

大阪府立弥生文化博物館にて令和3年度弥生プラザ展示『水差形土器の世界』を開催し、大阪府内で出土した水差形土器に焦点を当てた展示を行った（写真1）。

水差形土器とはその多くに注ぎ口状の口縁を持つ、壺状の土器を指す。その形状から液体を注ぐための土器と考えられる。他にもこれまで釣瓶や薬缶等様々な用途が考えられているが、「液体を入れる」「液体を注ぐ」という点に関しては共通している。畿内を中心に弥生時代中期後半に盛行し、畿内V様式初頭には一部を除き見られなくなる、弥生土器のなかでは比較的地域も期間も限定的な器種である。

水差形土器には把手をもつ畿内型（佐原 1968）と把手をもたない根津型（森田 1990）があるが、今回も短頸壺 No. 8（番号は表1に準拠）以外は畿内型の水差形土器を展示了。

ここでは今回展示了水差形土器を、報告書未掲載土器も含めて紹介する。

## 展示資料と水差形土器について

今回の展示では出土地点と形状に注目した。

### 1) 水差形土器の出土状況

水差形土器は様々な場所から出土する。主に井戸や河川、流路など水に関係する場所や周溝墓付近からの出土が多い。

No. 1、2、4、7、11、12 の5点は周溝墓から出土している。ほとんどが周溝からの出土である。

No. 1、7は和泉市府中遺跡の周溝墓の溝から出土している。No. 1は周溝墓に挟まれた溝（SZ0304 南東溝、SZ05 北西溝）から壺や甕等 16点が横倒しになって列状に並んだ状態で出土している。（写真2）No.4は四條畷市雁屋遺跡の周溝墓西周溝から同様に状態で見つかっている。出土状況からみて溝に投棄されたものでも、埴丘面から落としたものでもない。溝に立ち並べて何らかの祭祀を行った後、埋没したと考えられている。

また、周溝墓から出土する土器にはしばしば穿孔が見られるが、水差形土器にも施されていることがあり、

No. 1、7がこれに当たる。両方とも胴下半部に施されている。水差形土器の場合、穿孔すると「液体を入れる」という機能が失われてしまうため、供獻土器として祭祀で使用したとするならば、使用後に穿孔したのではないだろうか。

流路からの出土事例として、No.3を展示した。No. 3は和泉市池上曾根遺跡の史跡指定地の北東部 55-1区で溝と護岸用杭列の隙間からほぼ完形で発見された（図1）。この溝は遺跡内の立地から水田への水路と考えられている。同様の事例として和泉市輕部池遺跡の事例がある（和泉市教育委員会 2008）。この事例では、河川と杭列に加え、河川から水田へと水を引く取水する堰が上・下流2つと導水施設が発見されている。その堰から壺の他に水差形土器が数点設置されるように出土した。河川や取水・導水施設から土器や祭祀遺物がまとまって出土する事例は弥生時代以降も多くみられる。以上の事例では安定的な水の供給を願った祭祀が行われ、そのなかで水差形土器が使用されたと考えられる。No. 6の出土地点付近ではそういういた施設は確認されていないが河川から出土している。

井戸から出土したNo.13、14は両方とも八尾市亀井遺跡から出土している（図2）。亀井遺跡ではこれまでに70基以上の井戸が発見されており、井戸から完形に近い水差形土器が出土する事例が見られる。

井戸から出土する遺物は実際に井戸で使用されたもの以外に井戸祭祀に使用された、または井戸廃棄後にごみ穴として廃棄されたものとして見ることができる。それは出土した層の違いや祭祀遺物が共存する等状況によって判断できることもあるが、明確な区別は難しい。報告書ではNo.13、14含めた水差形土器の一部は、釣瓶としての機能をもつと記載されている（財團法人大阪府文化財センター 1980、1984）。しかし、使用痕の判別が困難なため、釣瓶としての使用を断定することはできない。亀井遺跡では木製の釣瓶が弥生時代後期に出土しており、No.14が出土した井戸からは植物性の繩が頸に巻かれた壺が出土しており、釣瓶として使用されたと考えられている（財團法人大阪府文化財センター 1980）。

以上の事例の他にも土坑から、No.15、16が完形に近い形で発見されている。

水差形土器の出土地点は主に井戸や流路等水に関係する場所や周溝墓付近に偏っている。出土状況から実用的な現代の「水差し」のような使い方の他に水のマツリや葬送儀礼等祭祀に関わる使い方が想定できる。



写真1 弥生プラザ展示「水差形土器の世界」展示状況



写真2 府中遺跡周溝墓溝 (SZ03・04 南東溝、SZ05 北西) 遺物出土状況

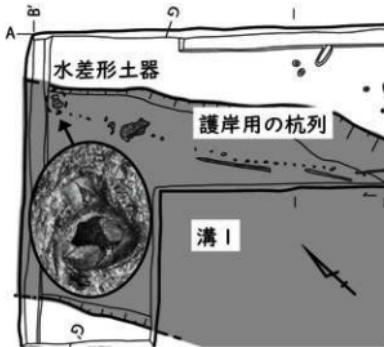
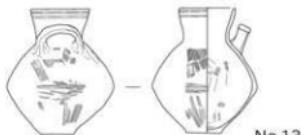
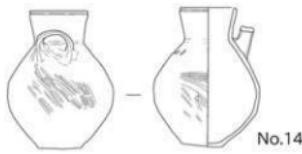


図1 池上曾根遺跡 溝1 水差形土器出土状況図



No.13



No.14

図2 水差形土器 No.13, 14 実測図



写真3 水差形土器 No. 2



写真4 水差形土器 No.10



写真5 弥生ブラザ「水差形土器の世界」展示資料（表1No.13～16除く）

表1 展示資料一覧

※口径・底径・器高の単位はcm

No.	遺跡名	出土位置	掲載報告書	図	番号	口径(残存)	底径(残存)	器高(残存)	備考
1	府中遺跡	SZ0304 南東溝、SZ05 北西溝 (周溝基溝)	大阪府教育委員会「府中遺跡 大阪府埋蔵文化財調査報告 2010-5」2010年2月	68	1056	7.8	7.6	18.2	台付 生駒西麗座
2	瓜生堂遺跡	周溝基	報告書未掲載	—	—	5.4	3.1	10.4	ミニチャア 穿孔有 生駒西麗座
3	池上曾根遺跡	溝1 (池上) 杖列と溝肩の間	大阪府教育委員会「大阪府文化財調査概要 1981池上発掘調査概要・X III」 1981年3月	7	1	6.7	4.0	15.5	
4	雁屋遺跡	1号墓 西側溝 (周溝基溝)	大阪府教育委員会「府立四條高等学校校舎増築工事等に伴う雁屋遺跡発掘調査概要 -四条桜市雁屋北町所在-」 1987年3月	11	7	7.4	4.8	21.9	穿孔有 生駒西麗座
5	山城廃寺	溝	大阪府教育委員会「山城廃寺発掘調査概要 -府立ため池等整備事業「山城新池地区」に伴う発掘調査-」 2010年3月	46	229	8.7	6.1	21.6	
6	池上曾根遺跡	自然凹口5 -1上層	大阪府教育委員会「池上曾根遺跡発掘調査 -池上・池下上層線に伴う調査-」 1997年3月	18	15	7.2	—	21.6	台付 8割程度口縁部欠損(復元)
7	府中遺跡	SZ03 溝 (周溝基溝)	大阪府教育委員会「府中遺跡 大阪府埋蔵文化財調査報告 2010-5」2010年2月	64	1061	—	6.3	—	口縁、把手欠損 穿孔有
8	府中遺跡	土器群 2・3	大阪府教育委員会「和泉寺跡・府中遺跡Ⅲ 大阪府埋蔵文化財調査報告 2014-5」 2015年3月	41	84	10.5	3.8	20.6	注ぎ口状の口縁をもつ短颈壺 この1点のみ弥生時代後期、 他はすべて弥生時代中期
9	池上曾根遺跡	SD05 溝	大阪府教育委員会「史跡池上曾根遺跡発掘調査概要 -松川・浜曾根壁建設に伴う発掘調査-」 1990年3月	16	114	8.5	5.4	22.8	
10	龜井遺跡	—	報告書未掲載	—	—	8.9	9.8	24.1	台付
11	弓削ノ庄遺跡	方形周溝基 1周溝	財團法人大阪府文化財センター 「弓削ノ庄遺跡 大阪府文化財センター 周溝基調査報告書第133集」 2005年8月	65	2	9.4	5.3	23.4	8割程度口縁部欠損
12	弓削ノ庄遺跡	—	—	65	1	10.0	6.5	29.6	生駒西麗座
13	龜井遺跡	SK-16 井戸	財團法人大阪府文化財センター 「龜井遺跡II-本文編-」1984年10月	80	1	8.8	5.7	20.5	財團法人大阪府文化財 センターから出展、生駒西麗座
14	龜井遺跡	SK-25 井戸	—	154	17	11.5	7.2	22.8	財團法人大阪府文化財 センターから出展
15	雁屋遺跡	土坑2	大阪府教育委員会「府立四條高等學校 校舎増築工事等に伴う雁屋遺跡発掘調査概要 -四条桜市雁屋北町所在-」1987年3月	19	45	6.8	4.4	15.9	パネルのみ展示 大阪府立弥生文化博物館 常設展示、生駒西麗座
16	東郷遺跡	SK305 土坑	大阪府教育委員会「東郷遺跡発掘調査概要-1」 1989年3月	35	259	—	—	—	展示(スルのみ (出土状況))

## 2) 水差形土器の形状

今回の展示では出土地点とともに水差形土器の形状について比較し、パネル等を用いて説明した。主に台付水差形土器と口縁の形状の違いに触れた。

今回は No. 1、6、10 が台付水差形土器である。いずれも台が底にかけてハの字状に広がる形状である。展示できなかったが他にも円筒状の台が付く場合がある。台付きの水差形土器が登場するのは遅れて、IV 様式以降と考えられている。

水差形土器の口縁部は No. 1、3、12 のように口縁に傾斜があり、注ぎ口側の方が反対側より器高が高くなる形状、No. 4、5、9 のように口縁の高さがほぼ一定になる形状の二つに分かれる。後者は注ぎ口と反対側の口縁に抉りをもつ場合がある。抉りを作る理由は正確には判断していないが、田中清美は把手を持ち、抉りに指を掛け支える持ち方を想定している(田中 1999)。この抉りはあらかじめ焼成前に作ることもあるが、後から打ち欠いて抉りを作っている水差形土器もみられる。また文様や調整が口縁にある場合、抉りに沿って施されていることが多い。そのため、使用に際して抉りに何らかの意味があったのではないだろうか。

また、水差形土器は一部地域を除き、V 様式初頭にはほとんど見られなくなる。しかし、畿内では入れ替わるように把手がある短頸壺や小型壺など類似した形状の土器が少數見られるようになる。類例として今回は口縁が注ぎ口状になっている短頸壺 No. 8 を展示した。

### 報告書未掲載土器について

今回展示した資料には報告書未掲載の資料 2 点が含まれていた。ここではその 2 点について紹介する。

No. 2 (写真 3) は東大阪市瓜生堂遺跡から出土した口径 5.4cm、底径 4.0cm、高さ 10.4cm の小型の水差形土器である。把手側の口縁に抉りがあり、胴下半部に穿孔がある。一部胴下半部に漆とみられる黒色物質が付着している。外面は胴下半部に縱方向のミガキ、胴最大径付近と口縁に横方向ミガキ、内面はナデ、把手までミガキを施しており、比較的丁寧な調整がなされている。色調は薄い茶褐色で生駒西麓産土器である。

把手が小さく、把手と本体との間が狭いため、実用的な形状ではない。周溝墓から出土していることからも葬送儀礼で使用された土器ではないだろうか。

No.10 (写真 4) は八尾市亀井遺跡から出土した台付の水差形土器である。口径推定 8.9cm、高さ 24.1cm であり、台の底径は 9.8cm である。胴は下方に向けて大きく張り出し、台はハの字状に広がる。把手は欠落しており、片方の根本のみ残っている。胎土

が粗く、1~2 mm 程度の礫が多く含まれており、摩滅も激しく調整はほとんど残っていない。色調はぶい黄橙色である。出土地点の詳細は不明である。

### まとめ

今回は水差形土器の出土状況と形状に注目し、展示を行った。その結果、水差形土器は弥生土器のなかでも特異的な土器であることを改めて確認できた。

把手がある水差形土器は持つ部位が分かりやすく、口縁の形状から「液体を注ぐ」という使用状況がイメージしやすい。その反面、器種自体の研究はあまり進んでおらず、詳細な用途等不透明な部分もある。今後の研究の進展が望まれる。

(河原秋桜)

### 図出典

- 図 1 財團法人大阪文化財センター 1984『亀井遺跡Ⅱ—本文編一』図 80-1、図 154-17 再トレース  
図 2 大阪府教育委員会 1981『大阪府文化財調査概要 1981 池上発掘調査概要・XⅢ』  
図版第 5 を一部改変、写真は図版第 12 中段

### 参考文献

- 和泉市教育委員会 2008『和泉市埋蔵文化財調査報告 8 乾部池遺跡発掘調査報告書』  
大阪府立狭山池博物館 2006『平成 18 年特別展 水にうつる願い』大阪府立狭山池博物館図録 8  
佐原真 1968『畿内地方』『弥生土器集成』本編 2  
財團法人大阪文化財センター 1980『亀井・城山』  
田中清美 1999『水差土器一考』『大阪市文化財協会 研究紀要』第 2 号  
寺沢薰、森井真雄 1989『河内地域』『弥生土器の編年と様式』近畿編 I、木耳社  
埋蔵文化財研究会 2008『井戸再考—弥生時代から古墳時代前期を対象として—』第 57 回埋蔵文化財研究集会 発表要旨集  
森田克行 1990『摂津地域』『弥生土器の編年と様式』近畿編 II、木耳社

その他 表 1 掲載報告書に記載

## 文化財調査事務所での普及・啓発・公開事業

**はじめに**

文化財保護課ではコロナウィルス感染拡大防止のため、令和元年度末から普及啓発活動の中止・延期措置を取っていた。令和3年度も人的交流を主とする事業を中心とした普及啓発活動を中止もしくは延期せざるを得なかつたことを前置きしておく。

**研修事業**

例年中学校の職場体験学習、高校生と大学生のインターンシップおよび国際協力機構（JICA）の海外研修生の受け入れを行っていたが、今年度は全ての事業が停止したため受け入れをすることはなかつた。

**発掘調査等の現地公開**

一般府道大阪羽曳野線（八尾藤井寺工区）道路改良事業に伴い、津堂遺跡を調査し、古墳時代の建物跡が発見された現地公開を行う予定であったが、当日荒天により中止となつた。現地公開資料は文化財保護課ホームページにて公開している。

**文化財収蔵庫の特別公開**

例年、和泉池上文化財収蔵庫の特別公開を年に4回程度実施している。しかし、展示の内容上、感染拡大予防を講じることが困難であり、また、多量の収蔵資料の移管予定があるため、収納場所の確保の必要性から今年度も実施しなかつた。

**出かける博物館事業（展示・関連講演等）**

大阪府立狭山池博物館と河内長野市立ふるさと歴史学習館にて、本府教育委員会と河内長野市教育委員会、大阪狭山市教育委員会、府立狭山池博物館共催でミニ展示「歴史発見三題 2021」を開催した。本展示会では、近年の発掘調査で出土した堺市堺環濠都市遺跡出土陶磁器や岸和田市大町遺跡出土土師器等を展示了。

大阪府立弥生文化博物館では、弥生ブラザとして2回展示を行つた。前半タイトルは「ツボ三昧」で、弥生時代の壺形土器を中心に展示了。後半は「水差形土器の世界」として弥生時代の水差形土器を中心に展示了。

令和2年度に引き続き、大阪府立男女共同参画・青少年センター（ドーンセンター）4階では「大阪城跡出土の金箔瓦」をテーマに、豊臣期大阪城の三の丸の範囲で出土した金箔瓦を展示公開した。

同じく大阪府教育センターでは「萱振1号墳出土の

埴輪」をテーマに、府立八尾北高校建設時調査で出土した同古墳出土埴輪の展示を行つた。

**出かける博物館事業（講演等）**

堺自由の泉大学から講師派遣依頼を受けて、職員を1名派遣した。37名が受講し、「百舌鳥・古市古墳群出土の武器・武具」というテーマで講演した。

**ホームページでの調査成果公開**

発掘調査については、大町遺跡、府中遺跡、久宝寺遺跡、西野々古墳群の調査成果を公開した。

出土資料については、堺環濠都市遺跡から出土した青磁、牛石5号墳から出土した須恵器等について情報を公開している。

**出前授業**

大阪狭山市立第七小学校6年生3クラス（97名）を対象とした出前授業を開催した。例年、遺物のハンズオンを含んだ対面授業形式で実施しており、今回も国府遺跡の縄文土器に触れてもらい、消毒等感染防止を十分に行った上で実施した。大阪狭山市西小学校も同様に実施する予定であったが感染拡大により中止した。

**動画で学ぶ大阪府の文化財**

昨今のコロナウィルス感染症拡大により、普及啓発事業の実施が困難になつたため、小学生向けの文化財普及啓発動画の作成に着手した。

「人気者になりたい！！～仏並遺跡出土土面～」と題し、令和2年度に大阪府指定文化財に指定された仏並遺跡出土土面を紹介する動画を作成した。録音ナレーションは大阪府立泉北高等学校の放送部・演劇部に依頼し、漫才風のコミカルで飽きない動画をめざした。

現在は大阪府教育庁Youtubeチャンネルで公開している（令和5年2月1日時点で386回再生）。ホームページで動画の振り返り学習ができるワークシートも公開している。

(河原秋桜)



写真1 ミニ展示「歴史発見三題 2021」展示状況1



写真2 ミニ展示「歴史発見三題 2021」展示状況2



写真3 弥生ブラザ展示「ツボ三昧」展示状況



写真4 弥生ブラザ展示「水差形土器の世界」展示状況



写真5 ミニ展示「歴史発見三題 2021」チラシ



写真6 大阪狭山市立第七小学校6年生の出前授業



写真7 動画で学ぶ大阪府の文化財「人気者になりたい!! 仏並遺跡出土土面」サムネイル

表1 令和3年度普及・啓発・公開事業一覧

事業	事業名	実施年月日	実施場所	内容	対象	備考
発掘調査の現地公開	津堂遺跡の成果報告	令和3年3月26日	津堂遺跡 発掘調査現場	一般府道大阪羽曳野線（八尾藤井寺工区）道路改良事業に伴う調査内容の公開。荒天により現地公開は中止。	一般	現地公開資料を文化財保護課HPで情報公開 <a href="https://www.pref.osaka.lg.jp/bunkazaihogo/maibun/tsudo_gensetsu.html">https://www.pref.osaka.lg.jp/bunkazaihogo/maibun/tsudo_gensetsu.html</a>
出かける博物館事業(展示会等)	長期展示「大坂城跡出土の金箔瓦」	令和2年度から継続	大阪府立男女共同参画・青少年センター	大坂城三の丸出土の金箔貼軒丸瓦等を展示。令和2年度から継続。	一般	文化財保護課HPでも公開(現在は展示終了)
	長期展示「萱振1号墳出土の埴輪」	令和2年度から継続	大阪府教育センター	萱振1号墳から出土した円筒埴輪、形象埴輪を展示。令和2年度から継続。	一般	文化財保護課HPでも公開(現在は展示終了)
	ミニ展示「歴史発見三題2021」	令和3年6月1日～令和3年6月27日	大阪府立狹山池博物館	堺環濠都市遺跡の陶磁器や大町遺跡の土器等を展示。河内長野市、大阪狭山市、狹山池博物館との共催。	一般	文化財保護課HPでも公開(現在は展示終了)
	ミニ展示「歴史発見三題2021」	令和3年6月29日～令和3年7月18日	河内長野市ふるさと歴史学習館	上記資料に追加して狹山池博物館からは狹山池木製杓工の模型を展示	一般	文化財保護課HPでも公開(現在は展示終了)
	弥生ブラザ「ツボ三昧」	令和3年6月2日～令和3年12月5日	大阪府立弥生文化博物館	弥生土器の壺を展示	一般	文化財保護課HPでも公開(現在は終了)
	弥生ブラザ「水差形土器の世界」	令和3年12月7日～令和4年6月25日	大阪府立弥生文化博物館	弥生土器の水差形土器や関係する土器を展示	一般	文化財保護課HPでも公開(現在は終了) 本書70～73頁に詳細掲載
出かける博物館事業(講演等)	堺自由の泉大学	令和3年7月15日	堺自由の泉大学	テーマ「百舌鳥・古市古墳群出土の武器・武具」で講演	一般	37名が受講
ホームページでの調査成果公開	「堺環濠都市遺跡から出土した青磁」	令和3年9月6日から公開	文化財保護課HPにて公開	堺環濠都市遺跡から出土した中国産青磁について公開	一般	文化財保護課HP <a href="https://www.pref.osaka.lg.jp/bunkazaihogo/maibun/r3-1sakaihangou.html">https://www.pref.osaka.lg.jp/bunkazaihogo/maibun/r3-1sakaihangou.html</a>
	「牛石5号墳から出土した須恵器」	令和4年2月28日から公開	文化財保護課HPにて公開	横穴式木室という特殊な埋葬施設をもつ牛石5号墳から出土した須恵器や馬具などの鉄製品について公開	一般	文化財保護課HP <a href="https://www.pref.osaka.lg.jp/bunkazaihogo/maibun/r3-2ushishi.html">https://www.pref.osaka.lg.jp/bunkazaihogo/maibun/r3-2ushishi.html</a>
	大町遺跡	令和4年2月21日から公開	文化財保護課HPにて公開	府営住宅の住宅内道路整備に伴う調査で、中世の耕作地を検出	一般	文化財保護課HP <a href="https://www.pref.osaka.lg.jp/bunkazaihogo/maibun/oomachi2021.html">https://www.pref.osaka.lg.jp/bunkazaihogo/maibun/oomachi2021.html</a>
	西野々古墳群	令和4年3月2日から公開	文化財保護課HPにて公開	府宮農村総合整備事業に伴う発掘調査1,2,4号墳の樋の溝や周溝の状況を確認	一般	文化財保護課HP <a href="https://www.pref.osaka.lg.jp/bunkazaihogo/maibun/nishinonishi02.html">https://www.pref.osaka.lg.jp/bunkazaihogo/maibun/nishinonishi02.html</a>
	府中遺跡	令和4年3月14日から公開	文化財保護課HPにて公開	大阪岸和田南海線に伴う発掘調査で、弥生時代末から古墳時代初頭の堅穴建物や古代の掘立柱建物等を検出	一般	文化財保護課HP <a href="https://www.pref.osaka.lg.jp/bunkazaihogo/maibun/r03_fucyu.html">https://www.pref.osaka.lg.jp/bunkazaihogo/maibun/r03_fucyu.html</a>
	久宝寺遺跡	令和4年3月22日から公開	文化財保護課HPにて公開	久宝寺緑地整備事業に伴う発掘調査で、古墳時代初頭の溝、土坑などを検出し準構造船の船首、船尾を井戸枠にした5世紀後半の井戸が見つかった	一般	文化財保護課HP <a href="https://www.pref.osaka.lg.jp/bunkazaihogo/maibun/kyuhougi2.html">https://www.pref.osaka.lg.jp/bunkazaihogo/maibun/kyuhougi2.html</a>
動画で学ぶ大阪府の文化財	「人気者になりたい!!～仏並遺跡出土土面～」	令和4年3月31日から公開	大阪府教育庁YouTubeチャンネルにて公開	仏並遺跡で出土した織文時代の土面を紹介。ナレーション、錄音用機材の提供を高校生に依頼し、動画を作成した	一般	文化財保護課HPにワークシート公開 <a href="https://www.pref.osaka.lg.jp/bunkazaihogo/maibun/movie_domen.html">https://www.pref.osaka.lg.jp/bunkazaihogo/maibun/movie_domen.html</a>  動画 QR コード

## 令和3年度収蔵資料

### ■埋蔵文化財（各収蔵庫）

- (1) 北部収蔵庫（摂津市鳥飼中）
- (2) 東大阪収蔵庫（東大阪市長田東）
- (3) 泉北収蔵庫（高石市綾園）
- (4) 文化財調査事務所（堺市南区竹城台）
- (5) 泉佐野収蔵庫（泉佐野市日根野）
- (6) 近つ飛鳥博物館（河南町大字東山）
- (7) 和泉池上収蔵庫（和泉市池上町）
- (8) 岸和田収蔵庫（岸和田市磯ノ上町）

(5) 番野家資料 68点

(6) 三宅家資料一括

(7) 大恩寺資料一括

(8) 前西家資料 22件

### ■美術工芸品

- (1) 田中家文書一括 5箱 4,100点
- (2) 「府立大阪博物場」資料
  - ・旧蔵美術工芸品（大阪府指定文化財）277点
  - ・古銭（大阪府指定文化財）4箱 3,078点
  - ・その他博物場資料

### ■民俗文化財

- (1) 谷口家資料 221点
- (2) 上辻家資料 132点
- (3) 守田コレクション 200点
- (4) 上平家資料 150点

### ■その他写真・図面・図書資料一括

## 令和3年度調査・研究等の検討会

第1回 令和3年5月12日（水）

「陵東遺跡発掘調査成果」奈良拓弥

第2回 令和3年6月9日（水）

「西野々遺跡発掘調査報告」大澤嶺

第3回 令和3年7月14日（水）

「水差形土器について」河原秋桜

第4回 令和3年9月8日（水）

「宮園遺跡発掘調査成果」木村啓章、原田昌浩

第5回 令和3年10月19日（火）

「百舌鳥・古市古墳群世界遺産保存活用会議事務局

の仕事について」飯塙信幸

第6回 令和3年12月9日（木）

「鍼形石の変遷と流通～畿内を中心とした」中川恋歌

「川原寺裏山遺跡出土塑像片から見る飛鳥・川原寺

の尊像構成について」北川咲子

第7回 令和4年1月18日（火）

「防災研修会」横田明

第8回 令和4年2月9日（水）

「岸和田市大町遺跡について／大町遺跡からの視点」

三木弘

第9回 令和4年3月9日（水）

「文化財保護課30年／技術文化3地点比較」

井西貴子

## 令和3年度大阪府教育庁文化財保護課刊行物一覧

### 大阪府埋蔵文化財調査報告

2021-1『大町遺跡V』

2021-2『宮園遺跡III』

2021-3『太井遺跡』

『西野々古墳群・外子遺跡・西野々遺跡発掘調査概要』

『摂津における中世城館の調査』

### 年報

『大阪府教育庁文化財調査事務所年報25』

令和3年度資料貸出・掲載・閲覧事業一覧

表1 實物資料・複製資料長期貸出

表2 実物資料・複製資料短期貸出

件数	依頼者	道跡	資料内容	点数	目的
1	大阪府立弥生文化博物館	池上曾根遺跡	台付鉢	1	令和3年度夏季企画展「難波の池上曾根遺跡－縄文点集落としての姿－」における展示・公開のため
2	大阪府立弥生文化博物館	池上曾根遺跡	ヒスイ製勾玉	1	令和3年度春夏季企画展「難波の池上曾根遺跡－縄文点集落としての姿－」における展示・公開のため
3	大阪府立近つ飛鳥博物館	扶桑道跡 78-7 区	縄式系土器 12		
		はさみ山道跡 82-16 区	土師器（高杯 4、二重口縁壺 1、複合口縁壺 1、布留形壺 1）、和形土製品 1		
		土師の里道跡 79-17 区	土師器（小形壺 2、高杯 6、壺 2、杯 3、鉢 2、把手付鉢 1）、須恵器蓋杯 5	21	令和3年度春夏季企画展「（仮）古墳群に暮らした人たち－集落遺跡からみる古市古墳群－」における展示・公開のため
		土師の里道跡 82-14 区	土師器（小形壺 1、高杯 3、壺 2）		
		土師の里道跡 79-15 区	須恵器（把手付椀 1、杯身 1、縫 1、高杯 3）、土師器（把手付鉢 1、壺 1）		
		応神陵古墳外堤 88-1 区	土師器布形彌生 1		
		林道跡 1B-2 区	須恵器（把手付壺 1、無蓋高杯 1）、円筒埴輪 1		
4	吹田市立博物館（貸出期間の延長）	上寺山古墳	須恵器（直腹 2、短腹 2、杯 6、壺 3、直 2、子持ち壺 1、度瓶 3、平底 1、足付楕 1）土師器（坪 4、壺 1）售 4、縫 3、鐵鏃 3、刀刃 3、縫 1）	40	令和3年度春季特別展「新芦原古墳－被葬者の命にせまき－」における展示・公開のため
5	堺市博物館	藤の森古墳	ガラス勾玉	3	令和3年度夏至スマート展示例「百舌鳥・吉市古墳群のたからもの」における展示・公開のため
6	東大阪市	河内寺廻寺跡	軒丸瓦 5、軒平瓦 4	9	河内寺廻寺跡発掘調査報告書作成のための検討資料
7	太子町教育委員会	初田 1 号墳	埴	2	聖德太子 1400 年忌追記企画展「聖徳太子墓－御陵場北古墳－」における展示・公開のため
8	大阪府立弥生文化博物館	田井中道跡	弥生土器（西 4、壺 1、鉢 1、壺蓋 1、直 1、サヌカイト剝片 15、土偶 40、土偶 1、石棒 3、石臼 3、石斧 5）		
		池島・福万寺道跡	縄文土器 1、土偶 3、弥生土器（三二ニチヨウ土器）、直 1、鉢 1、高杯 1)、石臼 1、土偶 1 人形 1	103	令和3年度秋季特別展「近畿最初の弥生人」における展示・公開のため
		池内道跡	縄文土器 1、弥生土器直 1、サヌカイト（スクレーパー 1、石核 1）石臼 1		
		弓削／庄道跡	縄文土器（直鉢 4、直 1、透鉢 1）、石棒 2		
9	あいの新日道跡ミュージアム	池上曾根遺跡	ヒスイ製勾玉	1	特別企画展「弥生の巨大遺跡」における展示・公開のため
10	堺市博物館	陶器千塚 7 号墳	須恵器（杆直 1、杯身 1、壺 2）		
		陶器千塚 93 号墳	埴 3	21	令和3年度夏季企画展「（仮）古墳群に暮らした人たち－集落遺跡からみる古市古墳群－」における展示・公開のため
		牛石 5 号墳	須恵器（杆直 1、杯身 1、壺直 1、梅 1、脚付楕 1、長脚高杯 1、短頭壺 1、長颈壺 1、環状器 1、縫（共通）1、縫 1）		
11	高槻市	井天山 D2 号墳	家形埴輪 1、須恵器 1	3	春季企画展「王の丘－井天山古墳群の系譜」における展示・公開のため
		井天山 D3 号墳	甲冑埴輪（单指）1		
12	岸和田市教育委員会	大園道跡	筒型蓋台 1、直 2、直 1、圓台 1、土鋪 4	9	企画展「岸和田市と高石市の文化財－広域連携をはじめるにあつて－」における展示・公開のため
13	大阪府立狹山池博物館	土師の里道跡	土師器（杆 2、小型壺 1、鉢 1）、須恵器（杆 3、直 1、直 1）		
		復元都条里道跡	須恵器（杯直 1、杯直 1、有蓋高杯 1、有蓋高杯 1、無蓋高杯 1、縫 1）	16	令和4年度春季企画展「土木遺産×緑道・道路」における展示・公開のため

表3 資料撮影、写真・図面等貸出・掲載

件数	依頼者	貸出 用 影 像 料	種類	遺跡等	内容	点数	目的／掲載誌
1	大阪府立弥生文化博物館	貸出 用 影 像 料	写真	池瀬遺跡	V字溝横出土状況	1	令和3年度夏季企画展「奈良の池上・曾根遺跡－既成築造としての姿－」に伴う図録・展示パネル、ポスター、チラシ、ホームページ等の広報資料へ掲載するため
				四ツ池遺跡	F地区 G・E・M溝全景	1	
2	大阪府立弥生文化博物館	撮影 用 影 像 料	写真	池上管轄遺跡	台付鉢	1	令和3年度夏季企画展「奈良の池上・曾根遺跡－既成築造としての姿－」に伴う図録・展示パネル、ポスター、チラシ、ホームページ等の広報資料へ掲載するため
				桃山遺跡 78-7 区	調査区全景		
3	大阪府立近つ飛鳥博物館	貸出 用 影 像 料	写真	はさみ山遺跡 92-16 区	I区全般、土器窓、土師器高杯3、土師器二重口桝形、土師器複合口綠色、船形大製品		
				はさみ山遺跡 80-1 区	蟹穴住跡		
				土師の里遺跡 82-14 区	S801 遺物出土状況、全景、土器器小西形、土師器高杯3、土師器窓2		
				土師の里遺跡 79-17 区	夷委区全般、西区全般、S801, SD01 遺物出土状態		
				土師の里遺跡 79-15 区	D区 古墳時代溝		
				応神天皇古墳外縁 88-1 区	土師器布留式壺		
				林道跡 18-2 区	18-2区墓 Q1、須恵器附長颈壺、須恵器無蓋高杯、円筒埴輪		
4	大阪府立近つ飛鳥博物館	公開	写真 パネル	寶積寺 75 号墳	石室全景、蓋面内遺物出土状況	2	令和3年度春季特別展「歎する器－須磨古墳群を中心－」に伴う図録パネル
5	朝日カルチャーセンター川西教室	貸出 用 影 像 料	写真	西福井遺跡	土坑 Q10 全景	1	朝日カルチャーセンター川西教室の講座「縄文時代の器と復興」(2021年7月27日、8月24日、9月28日開催予定)におけるPRとして、朝日新聞、ホームページ、リーフレット、チラシ、ポスター等に掲載するため
6	朝日新聞社大阪本社社会部	貸出 用 影 像 料	写真	堂山 1号墳	全景、出土甲冑、出土須恵器	3	朝日新聞デジタルにおいて、「堂山古墳群史跡広場の紹介記事に掲載するため
7	市博物館	撮影 配信	動画	豊原北遺跡	陶質土器 3、馬頭骨	6	特集図「海と越えてつながりー後の五王と東アジアー」において、動画を撮影し YouTube で公開するため
				府中道跡	陶質土器		
				三宅西遺跡	陶質土器		
8	藤井寺市教育委員会	貸出	写真 図面	国府道跡	1970 年度調査 カラースライドフィルム、ネガフィットオーバルバム、スクランプック、調査図面	一式	史跡国府道跡の今後の保存活用に向けて参考資料として使用するため
9	個人	転載	図面	日下道跡	治金系遺物実測図	6	論文に掲載するため
10	牧田市立博物館	貸出	写真	上寺山古墳	土器複合埋葬、須恵器平瓶 14~20、須恵器横口 14~20 口縁部、須恵器壺瓶 14~21 埋葬、須恵器横口 14~21 埋葬、壁 23~3、普 23~5、6、7、8、肥化した第 2 号木棺材、肥化した第 3 号木棺材	9	令和3年度春季特別展「新芦原古墳－被葬者の辯にせまる－」における図録・ホームページ等の広報資料へ掲載するため
11	奈良市教委員会	貸出 用 影 像 料	写真	七ノ坪遺跡	古墳時代前期初頭遺構全景	1	奈良市立図書館「ソーラ」内歴史展示コーナーにおいて、パネル展示するため
12	株式会社スタジオタッククリエイティブ	貸出 用 影 像 料	写真	土師の里遺跡 79-15 調査	D区 古墳時代溝	2	企画書「マンガで楽しむ歴史図鑑「はにわ」」に掲載するため
13	京都府立考古資料館	貸出 用 影 像 料	写真	吉本郡丘墓跡	H-1 号平窓調査状況	1	令和3年度前期特別展「平安京をつくる・たもつ」に伴う展示パネル
14	個人	転載	写真	御良都古墳道跡	粒	1	論文に掲載するため
15	株式会社ウェッジ	貸出 用 影 像 料	写真	豊原北道跡	馬全身骨骼出土状況	1	月刊誌「ひととき」「ニッポンの馬の話」に掲載するため
16	個人	貸出	図面	大坂城跡	朝鮮王陶鋗器組	1	論文に掲載するため
17	羽曳野市教委員会	転載	写真	津堂山古墳	津堂山古墳後円部の石室と長持形石棺	1	「世界遺産のまち」で遊び、伝承しよう！古市古墳群と羽曳野の歴史」に掲載するため
18	公益財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	貸出 用 影 像 料	写真	豊原北道跡	馬全身骨骼出土状況	1	公益財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘監査報告書 689 「金刀下新田塚古墳（立政時代以降）解説・論考稿」に掲載するため
19	太子町教育委員会	撮影 用 影 像 料	写真	初田 1号墳	堆	2	聖徳太子 1400 年忌記念企画展「聖徳太子－葛福寺と古墳－」における図録に掲載するため

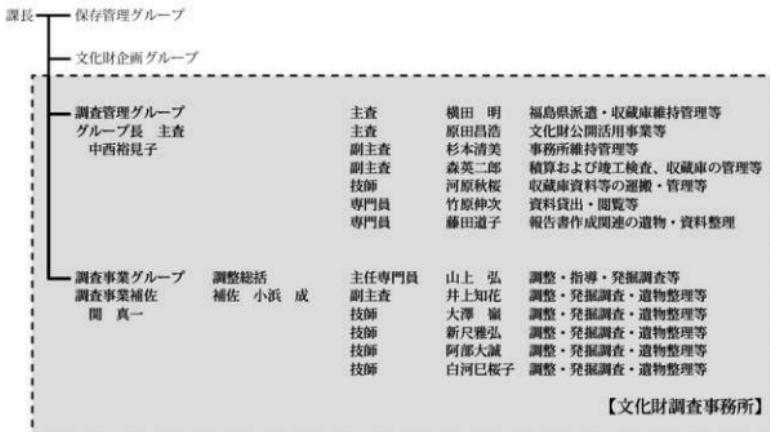
件数	依頼者	貸出 用紙 用板	種類	道跡等	内容	点数	目的/ 諸般誌
20	大阪府立弥生文化博物館	撮影 用紙	写真	田井中道跡	弥生土器（壺4、甕2、鉢1、盞1、蓋1、サヌカイト剝片15、土縫40、土棒1、石棒3、石苔73、石片5	103	令和3年度秋季特別展「近畿最初の弥生人」における図録・展示パネル、ポスター、チラシ、ホームページ等の広報資料へ掲載するため
				池島・福万寺道跡	绳文土器1、土棒3、弥生土器（ミニチュア土器1、壺1、鉢1、盞1、盖杯1）、石棒3、土器人形1		
				池内道跡	绳文土器1、弥生土器1、サヌカイト（スクレーパー1、石核1）石苔73		
				弓削／庄道跡	弥生土器（深鉢4、壺1、浅鉢1）、石棒2		
		用紙	写真	田井中道跡	弥生土器、石岸・石苔1、土縫・土偶・カット剝片1、石棒・土偶	5	
21	四條畷市教育委員会	貸出 用紙 用板	写真	高麗城跡	792×870mm、第1回調査区埋貼跡の建物、第15調査区地盤構造全面企画	9	三好長慶生誕500周年記念プレイベント 四條畷市立歴史民俗資料館 36回特別展「天下の吉原」
				能登城跡	能登城跡古写真5		三好段・考古学から天下人三好長慶の吉原と飯塚城』における展示パネル、図録用紙及び全国道路報告紙駆宣に登録するため
22	株式会社少年新聞社	貸出 用紙	写真	郡原北道跡	馬全身骨格出土状況	1	『人と動物の日本史図鑑』古墳時代から安土桃山時代』（仮題）に掲載するため
23	道明寺天神通り商店街	貸出 用紙	写真	三ツ屋古墳	修羅出土状況	1	道明寺天神通り商店街周辺の歴史・文化を紹介する小冊子に掲載するため
24	奈良県立橿原考古学研究所	貸出 用紙	写真	郡原北道跡	馬全身骨格出土状況	1	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館常設展示の展示パネルに使用するため
25	揖斐市	転載	図面	大田茶臼山古墳	太田茶臼山古墳南古墳位置図	1	「近畿沿岸津史自然地理・先古代・中世編」に掲載するため
26	株式会社八木書店出版部	貸出 用紙	写真	郡原北道跡	馬全身骨格出土状況	1	『古代日本と外交史辞典』の本文参考図版として掲載するため
27	公益財団法人大阪府文化財センター	貸出 用紙	写真	大坂城跡	ペネチアングラス	1	「近畿財團法人大阪府文化財センター年報 令和2年度」に掲載するとともにホームページで公開するため
28	宝塚市教育委員会	用紙	写真	宮の新道跡	方形周溝墓	1	『宝塚市史第1巻』をデジタル化し「宝塚市デジタルアーカイブ」で公開するため
29	大阪府立狛山山博物館	貸出 用紙	写真	龜井道跡	堤と水田	1	令和3年度特別展「鶴見20周年記念展 狛山池のルーツ—古代アジアのため地と土技術—」に伴う図録・展示パネルとして使用するため
30	あいの朝日道跡ミュージアム	貸出 用紙	写真	池上普曇道跡	ヒスイ製勾玉	1	特別企画展「生人の大道路」における印刷物・映像等に使用するため
31	富林市教育委員会	貸出 用紙	写真	お島古石垣	発掘調査状況	1	お島古石垣の案内看板に使用するため
32	株式会社美交工業（都市公園久宝寺緑地指定管理者共同体）	貸出 用紙	写真	久宝寺道跡	井戸検出状況、井戸枠転用の船の帆先、井戸出土の壺	3	「大阪府営久宝寺緑地開設50周年記念誌」に掲載するため
33	大阪津市教育委員会	使用	写真 (バネル)	池浦道跡	埋灌と考えられる渠	1	弥生学習館におけるミニ企画展「大阪津最初の弥生人」における展示パネルとして使用するため
34	岸和田市長	貸出 用紙	写真	岸和田城跡	岸和田城跡古写真	16	岸和田城天守閣復元露天会場における資料調査及び会議資料として使用するため
35	関西大学総合情報学部	撮影 用紙	写真	藤の森古墳	出土遺物	16	百舌鳥古市古墳群出土品検索アプリに使用するため
36	株式会社心社	転載	写真	黒崎山古墳	前方部石室、遺物出土状態	2	「近畿沿岸津史・自然地理・先古代・中世編」に掲載するため
37	揖斐市	転載	写真	安岐道跡	出土遺物、住居19遺物出土状況	2	「近畿沿岸津史・自然地理・先古代・中世編」に掲載するため
38	有限会社海島社	貸出 用紙	写真	大庭北道跡	木簡	1	「九州考古学論考」西谷正著に掲載するため
39	膳所市教育委員会	貸出 用紙	写真	青山4号墳	彌生埴輪	4	特別ミニ企画展「アイセルシュラホールのモデルって?」の展示パネルとして使用するため
				三ツ屋古墳	修羅棲出状況		
				喜上山古墳	人物埴輪2		
40	市博物館	貸出 用紙	写真	梅尾塚原古墳群	2号墳企画、3号墳穴式石室2、5号墳主室部復元模型等、6号墳埴輪穴式石室企画、8号墳主室部全壙、9号墳第3主室玄室奥部	14	令和4年度企画展「古墳が変わる—百舌鳥古墳群の進化と新たな2つの復元施設—」における図録・展示パネル、ポスター、チラシ、ホームページ等の広報資料へ掲載するため
				牛石古墳群	5号墳墓床表面遺物出土状況、13号墳主室部全壙、14号墳主室部全壙		
				陶器千塚古墳群	7号墳全壙、93号墳出土壙、93号墳主室部全壙		
				野々井25号墳	全壙		
				梅尾塚原古墳群	鹿角、器、織機、環状器、剝離形容器		
				転載	写真		

件数	依頼者	貸出 用紙	種類	道訪等	内容	点数	目的／掲載誌
41	高槻市	掲載 写真	弁天山D2号墳 弁天山D3号墳 太田新山古墳 太田新山古墳C 弓削東	家形埴輪1、須恵器1、円筒埴輪1 家形埴輪(草屋)1 円筒埴輪1 円筒埴輪1	6 春季企画展「王家の丘－弁天山古墳群の系譜－」に 登場する因縁・展示パネル、広報物等へ掲載するため		
42	朝日カルチャーセンター川西教室	貸出 用紙	写真	田井中道跡	石棒	1 朝日カルチャーセンター川西教室講座「飛鳥時代の 石製祭祀貝を探る」におけるPRとして朝日新聞、 ホームページ、リーフレット、チラシ、ポスター等 に掲載するため	
43	市世界遺産課	掲載 写真 図面	二本木山古墳 椎尾原京古墳群 椎尾原塚3号墳 椎尾原塚8号墳	二本木山古墳群展開状況写真1、測 量図1、割竹形石室來測量図1 配図図1 横穴式石室写真1、石室移築作業風景 写真1、測量図1 主体部全景写真1、主体部平面図1	9 古事記古跡魅力発掘講座「飛の古墳－市内に残る 古墳を訪ねて－」の講座資料及び市ホームページ で掲載するため		
44	文化庁	貸出 用紙	写真	木の本道跡	第2道築面南半部	1 「水中道跡パンフレット」及び文化庁ホームページ に掲載するため	
45	近畿文化会	貸出 用紙	写真	桜塚古墳群	昭和10年の区画整理事業前の状況	1 「近畿文化」第868号「ゴーランドが歩いた箕面町 の古墳時代」に掲載するため	
46	株式会社 ABC アーク	掲載	写真	大坂城跡	京桥	1 「歴史」4月増刊別冊に掲載するため	
47	名古屋市教育委員会	貸出 用紙	写真	三ツ塚古墳	修復出土状況	1 「令和2年度はにわなごび体験」の説明資料に掲載 するため	
48	文化財石垣保存技術協議会	掲載	写真	シショツカ古墳	石室奥室	1 「文化財石垣保存技術協議会研究資料集」第3集に 掲載するため	
49	市博物館	貸出 用紙	写真	牛石5号墳	墓室床面遺物出土状況	1 令和4年度企画展「古墳が変わる－百舌鳥古墳群の 特徴と新たな2つの埋葬施設－」における因縁・ 展示パネル、ポスター、チラシ、ホームページ等の 広報資料に掲載するため	
50	松原市教育委員会	貸出 用紙	写真	大塚山古墳	全景	2 市主催の百舌鳥古墳群魅力発掘講座第4回「松原 の古墳－丹波野に残る古墳の底駄－」の講座資料及 び市ホームページで掲載配信するため	
51	枚方市	貸出 用紙	写真	百済寺跡	講堂北辺瓦積み	1 百済寺跡説明版に使用するため	
52	株式会社アド近畿	貸出 用紙	写真	三ツ塚古墳	修復出土状況	1 近畿ツバキ寺開闢100周年記念デジタルサイネージ に掲載するため	
53	個人	貸出 用紙	写真	大坂城跡	京橋、「壹」焼印、「きのとの、蓬三郎、 とり」陶刻	3 日本書紀協会第88回総合ポスターセッションタ イトル「古代～中世における本地神の分岐と編年」 発表資料に掲載するため	
54	株式会社 NHK エンタープライズ	貸出 放映	写真	田辺寺跡	西塔跡・基壇東縁、東塔跡・基壇全周、 東塔跡・基壇外層瓦出土状況	3 BSプレミアム「英雄たちの選択」#253 不比斎「日 本」をつくる－国づくりの中枢にいた男の挑戦と隠 （仮題）で放送するため	
55	個人	提供 掲載	分析資料	大坂城跡	大坂城跡出土の金属製環体の全化学組 成分析結果	1 論文に引くため	
56	北海道立埋蔵文化財センター指定管 理者公財法人北海道埋蔵文化財 センター	使用	図面	西浦鉱跡	鋼炭化鉄鉱測定図	1 令和4年度北海道立埋蔵文化財センター連携講座・ 講義会「論文から学生への」のポスター、チラシに使 用するため	

表4 資料閲覧

件 数	申 請 者 (所 属)	閲 覧 資 料	目 的	閲 覧 場 所
1	個人（京都大学）	日下貝塚出土铁器・殿治間通遺物、御屋北通跡出土铁器・木器、殿治間通遺物	研究	調査事務所
2	藤井寺市教育委員会	国府道跡調査写真、図面	史跡追加指定のための調査	調査事務所
3	市博物館	藤の森古墳出土ガラス製勾玉	展示	藤井寺市立生涯学習センター
4	市	大阪府文化遺跡地名表	業務	調査事務所
5	個人（奈良文化財研究所）	新堂廐寺出土鰐尾	研究	調査事務所
6	市博物館	南堀千塚 7号墳出土須恵器、陶器千塚 93号 墳出土埴輪	展示	調査事務所
7	個人（奈良文化財研究所）	新堂廐寺出土鰐尾	研究	調査事務所
8	個人（交野市教育委員会）	日下貝塚出土铁器・殿治間通遺物、難麗化通跡出土铁器・木器・殿治間通遺物	研究	調査事務所
9	個人（大阪府立狭山池博物館）	藤の森古墳出土ガラス玉・調査図面	研究	調査事務所
10	個人（公財）千葉県教育振興財團	菅田白鳥道跡出土舟底形石器	研究	調査事務所
11	太子町教育委員会	初田 1号出土埴輪	展示	池上収蔵庫
12	個人（京都大学）	舟中通跡出土水差形土器・短頸壺、雁屋通跡出土水差用土器、山越寺跡出土水差形土器	研究	調査事務所
13	大阪府立弥生文化博物館	田井中道跡出土遺物、池島・福寺万葉道跡出土遺物。	展示	調査事務所、佐草野収蔵庫
14	大阪府立弥生文化博物館	池内通跡出土遺物、弓削・庄通跡出土遺物。	展示	池上収蔵庫
15	個人（駒澤大学）	茅原津都市遺跡出土遺物	研究	調査事務所
16	個人（京都府立大学）	調良郡条里道跡出土木製軸	研究	調査事務所
17	個人（京都府立大学）	調良郡条里道跡出土木製軸・木製鞍	研究	調査事務所
18	市文化財課	馬色塙跡群跡調査図面	業務	調査事務所
19	岸和田市教育委員会	岸和田城ガラス乾板焼き写真	業務	調査事務所
20	個人（奈良大学）	招福中町道跡出土杯盤、野端道跡出土杯盤、長峯丘陵道跡出土杯盤	研究	調査事務所
21	個人	はざみ山道跡出土旧石器	研究	調査事務所
22	個人	国府通跡第3地点出土旧石器、国府通跡第6地点出土旧石器	研究	調査事務所
23	個人（岡西大学）	藤の森古墳出土ガラス玉・勾玉	研究	調査事務所
24	個人（筑波大学、東京電機大学）	藤の森古墳出土ガラス玉・勾玉	研究	調査事務所
25	個人（筑波大学、東京電機大学）	藤の森古墳出土ガラス玉・勾玉	研究	調査事務所
26	個人（筑波大学、東京電機大学）	藤の森古墳出土ガラス玉・勾玉	研究	調査事務所
27	個人	西大井通跡出土旧石器	研究	調査事務所
28	市博物館	牛石 5 号墳出土須恵器・雪・蛭	展示	調査事務所
29	個人	八尾南道跡第6地点出土旧石器	研究	調査事務所
30	鶴見市考古博物館	河内庭分寺跡出土軒丸瓦・軒平瓦	展示	調査事務所
31	今城塚古代歴史館	井天山古墳群出土家形埴輪、草眉形埴輪、須恵器	展示	調査事務所
32	個人	八尾南道跡第3地点出土旧石器	研究	調査事務所
33	岸和田市教育委員会	大園道跡出土遺物	展示	調査事務所
34	個人（櫛原考古学研究所、立命館大学）	御屋北道跡出土土師器	研究	調査事務所
35	和歌山県立紀伊風土記の丘	古市大溝出土遺物	展示	調査事務所
36	個人	青山道跡出土旧石器	研究	調査事務所
37	個人（岡西大学）	藤の森古墳出土鉄器	研究	調査事務所
38	個人	古室通跡・応神陵古墳外堤・菅田白鳥道跡・高屋城跡・北岡道跡出土旧石器	研究	調査事務所
39	個人（大阪大学）	御屋北道跡出土石製防護築・石製管玉・臼玉	研究	調査事務所
40	個人（大阪大学）	御屋北道跡出土石製防護築・石製管玉・臼玉	研究	調査事務所
41	大阪府立狭山池博物館	土師の里道跡出土土師器・須恵器、諏良郡条里道跡出土須恵器	展示	調査事務所
42	個人	南花田道跡出土旧石器	研究	調査事務所
43	個人	御屋北道跡出土須恵器・杯身	研究	調査事務所
44	阪南市教育委員会	堺谷古墳群発掘調査図面	業務	調査事務所

## 【文化財保護課】



令和4年度文化財保護課・文化財調査事務所組織図

## 大阪府教育庁文化財調査事務所年報 26

発行日 令和5年3月31日

発 行 大阪府教育委員会

〒 540-8571

大阪市中央区大手前2丁目

TEL 06-6941-0351（代表）

編 集 大阪府教育庁文化財調査事務所

〒 590-0105

堺市南区竹城台3丁21-4

Tel 072-291-7401

印 刷 株式会社 近畿印刷センター

〒 582-0001

柏原市本郷5丁目6番25号

Tel 072-972-5918